

千年の時を超えて見えざる交流の道を探る！

2022年

11月19日(土)

会場

サイエンスヒルズこまつ

小松市こまつのだ 2番地 (小松駅東口正面)

基調報告 9:30~14:00

吉岐国

松見 裕二 (吉岐市教育委員会社会教育課)

肥前国

細川 金也 (佐賀県文化課文化財保護室)

因幡国・伯耆国

河合 章行 (鳥取県立むきばんだ史跡公園)

備前国

河合 忍 (岡山県教育庁文化財課)

越後国・佐渡国

渡邊 裕之 (新潟県観光文化スポーツ部文化課)

加賀国

下濱 貴子 (小松市埋蔵文化財センター)

パネルディスカッション 14:10~16:00

問題提起・コーディネーター

禰宜田 佳男 (大阪府立弥生文化博物館 館長)

く拠点をつなぐ道・国府所在地の源流く

ヒトとモノ、ワザが動く

いしかわ百万石文化祭二〇二三&加賀立国一二〇〇年祭 プレフォーラム

背景：「加越能三箇国絵図(部分)」(金沢市立玉川図書館所蔵)

〈主催〉

いしかわ百万石文化祭 2023 実行委員会
いしかわ百万石文化祭 2023 小松市実行委員会
加賀立国 1200年祭実行委員会・小松市



加賀立国
千二百年



文化絢爛 ふんかけんらん

第38回国民文化祭 第23回全国障害者芸術・文化祭
いしかわ百万石文化祭 2023
令和5年10月14日(土)~11月26日(日)

いしかわ百万石文化祭 2023 小松市イベント

開催趣旨

2023年(令和5)は、823年(弘仁14)に加賀国が誕生してから1200年の節目の年にあたります。また2023年秋には、石川県において「いしかわ百万石文化祭2023」(第38回国民文化祭及び全国障害者芸術・文化祭)が開催されます。

小松市では、加賀国府が置かれたまちとして「いしかわ百万石文化祭2023」における小松市の独自事業として「加賀立国1200年祭」の開催を計画しており、本フォーラムは、翌年に向けて気運を盛り上げるためのプレ事業として企画いたしました。

小松の地は、弥生時代に北陸を代表する拠点集落・八日市地方遺跡が営まれ、平安時代には加賀国府が置かれます。古くから海路と陸路が交わる物流の十字路としての役割を果たしてきたもので、このような弥生時代の拠点集落と国府が近接する例は、全国各地で確認することができます。本フォーラムでは、特に地理的環境に注目しながら、弥生時代に拠点集落を結んでいた「見えざる道」に迫り、国府がその地に置かれた源流を探っていきます。

フォーラム日程

令和4年11月19日(土) 会場：サイエンスヒルズこまつ わくわくホールB・C

9:30～14:00 (昼休憩11:50～13:00) 基調報告(各30分程度)

- ❖ 下濱 貴子(小松市埋蔵文化財センター)「加賀国の地理的環境、拠点集落と国府の位置」
- ❖ 松見 裕二(壱岐市教育委員会社会教育課)「壱岐国府の地理的環境と弥生時代の拠点集落」
- ❖ 細川 金也(佐賀県文化課文化財保護室)「肥前国(佐賀平野)所在の官衙関連遺構と弥生時代拠点集落について」
- ❖ 河合 章行(鳥取県立むきばんだ史跡公園)「因幡国府・伯耆国府の地理的環境と弥生時代の拠点集落」
- ❖ 河合 忍(岡山県教育庁文化財課)「備前国の地理的環境、拠点集落と国府の位置」
- ❖ 渡邊 裕之(新潟県観光文化スポーツ部文化課)「越後・佐渡国における弥生時代～古代遺跡の動態―「拠点」の形成とその背景―」

14:10～16:00 パネルディスカッション

・問題提起「拠点をつなぐ道について考える」 禰宜田 佳男 (大阪府立弥生文化博物館 館長)

・パネルディスカッション

- ・コーディネーター：大阪府立弥生文化博物館 館長 禰宜田 佳男
- ・パネリスト：松見 裕二・細川 金也・河合 章行・河合 忍
渡邊 裕之・下濱 貴子

- ・質問用紙は昼休憩後に回収いたします。
発表内容についてご意見・ご質問等ございましたら、ご記入ください。
- ・アンケート用紙はフォーラム終了後に回収いたします。ご協力よろしくお願ひ申し上げます。

目次

開催趣旨・フォーラム日程

目次

講師紹介

【基調報告】

- 「加賀国の地理的環境、拠点集落と国府の位置」 下濱 貴子 …………… 4
- 「壹岐国府の地理的環境と弥生時代の拠点集落」 松見 裕二 …………… 14
- 「肥前国（佐賀平野）所在の官衙関連遺構と弥生時代拠点集落について」 細川 金也 …… 24
- 「因幡国府・伯耆国府の地理的環境と弥生時代の拠点集落」 河合 章行 …………… 34
- 「備前国の地理的環境、拠点集落と国府の位置」 河合 忍 …………… 44
- 「越後・佐渡国における弥生時代～古代遺跡の動態－「拠点」の形成とその背景－」
渡邊 裕之 …… 54

【特別寄稿】

- 「拠点をつなぐ道について考える」 禰宜田 佳男 …………… 64

講師紹介

禰宜田 佳男（ねぎた よしお）

1958年兵庫県出身。大阪大学文学部史学科卒

現在、大阪府立弥生文化博物館 館長

『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社 2019

「弥生時代の播磨地域の道」『ひょうご歴史研究紀要』第6号 2021

松見 裕二（まつみ ゆうじ）

1976年佐賀県出身。別府大学文学部史学科卒

現在、壹岐市教育委員会社会教育課文化財班 係長

「「倭人伝」の国邑の考古学 原の辻遺跡（一支国）」『月刊考古学ジャーナル』2011

「「魏志」倭人伝に記された一支国の世界」『壹岐市立一支国博物館図録』2015

細川 金也（ほそかわ きんや）

1967年愛媛県出身。國學院大學文学部史学科卒

現在、佐賀県文化・観光局文化課文化財保護室 副室長

「弥生時代の祭場－北部九州－」『季刊考古学』第86号 2004

「有明海北岸の弥生時代青銅器の研究」『鍋島報効会研究助成研究報告書』第4号 2008

河合 章行 (かわい のりゆき)

1978年兵庫県出身。熊本大学文学部歴史学科卒

現在、鳥取県立むきぼんだ史跡公園 調査活用担当 係長

「製作技術からみた骨角器の伝播」『動物考古学』第30号 2013

「青谷上寺地遺跡からみた管玉の生産と流通」『玉文化研究』第2号 2016

河合 忍 (かわい しのぶ)

1972年石川県出身。富山大学大学院日本・東洋文化専攻（考古学）卒

現在、岡山県教育庁文化財課 総括副参事（埋蔵文化財班長）

「吉備地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房 2016

「吉備南部の精製器種群と布留式土器との関係について—弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉土器の分析から—」『古墳出現期土器研究』8 2021

渡邊 裕之 (わたなべ ひろゆき)

1968年新潟県出身。明治大学大学院博士前期課程（史学）卒

現在、新潟県観光文化スポーツ部文化課 埋蔵文化財係長

「異なる生産過程をもつ道具・磨製石斧の製作と利用—北陸地方における磨製石斧生産の様相—」『縄文の資源利用と社会』季刊考古学別冊 21 雄山閣 2014

「第2章縄文時代 土器（晩期）」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会 2019

下濱 貴子 (しもはま たかこ)

1973年愛知県出身。富山大学人文学部考古学専攻卒

現在、小松市交流推進部 埋蔵文化財センター 所長

「八日市地方遺跡をめぐる論点」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会 2021年度金沢大会資料集』日本考古学協会 2021

「石川県における拠点集落について」『まいぶん講座フォーラム報告 2 弥生時代の北陸を探る—考証 八日市地方遺跡とは—』小松市教育委員会 2009

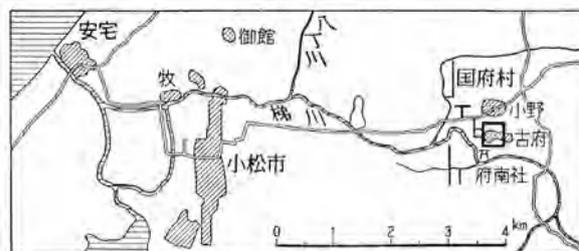
加賀国の地理的環境、拠点集落と国府の位置

小松市埋蔵文化財センター
下濱 貴子

はじめに

石川県は本州の中央部、日本列島の日本海側におけるほぼ中央に位置する。県域は令制国の加賀国と能登国にあたる。古代の北陸は7世紀後半には「越国」と認識されていたようで、7世紀末頃の国境画定によって越前、越中、越後国が成立。養老2年（718）には能登国が分立する。加賀国の成立は遅く、弘仁14年（823）に越前国から分国し、全国の中で最後に建てられた国である。当初、加賀国は江沼郡と加賀郡からなっていたが、後に江沼郡から能美郡、加賀郡から石川郡が分けられて四郡となった。

加賀国における国府はどこか。まだ確定には至っておらず、文献や地名などから古代能美郡に属する国府周辺、現在の小松市古府町の石部神社周辺が古くからの有力候補地である。ただし、立国当初から能美郡に置かれたとする意見と北加賀の遺跡調査成果から加賀郡から能美郡へ移転したという二説^(註1)がある。



第1図 加賀国府の位置と安宅関
(藤岡1969より転載)

本報告では、加賀国の地理的環境を整理し、弥生時代を中心とした遺跡の動態や大規模拠点集落の交流の在り方から国府候補地との関係を考えてみたい。さらに、広域交流の結節点・八日市地方遺跡が花開く弥生時代中期、終焉をむかえる中期後葉、後期終末期、古墳時代前期といった各期の見えざる道を出土資料から検討し、古代の水陸交通路との関連性にもせまりたい。

1. 加賀国の地理的環境と弥生時代の遺跡分布（第2図）

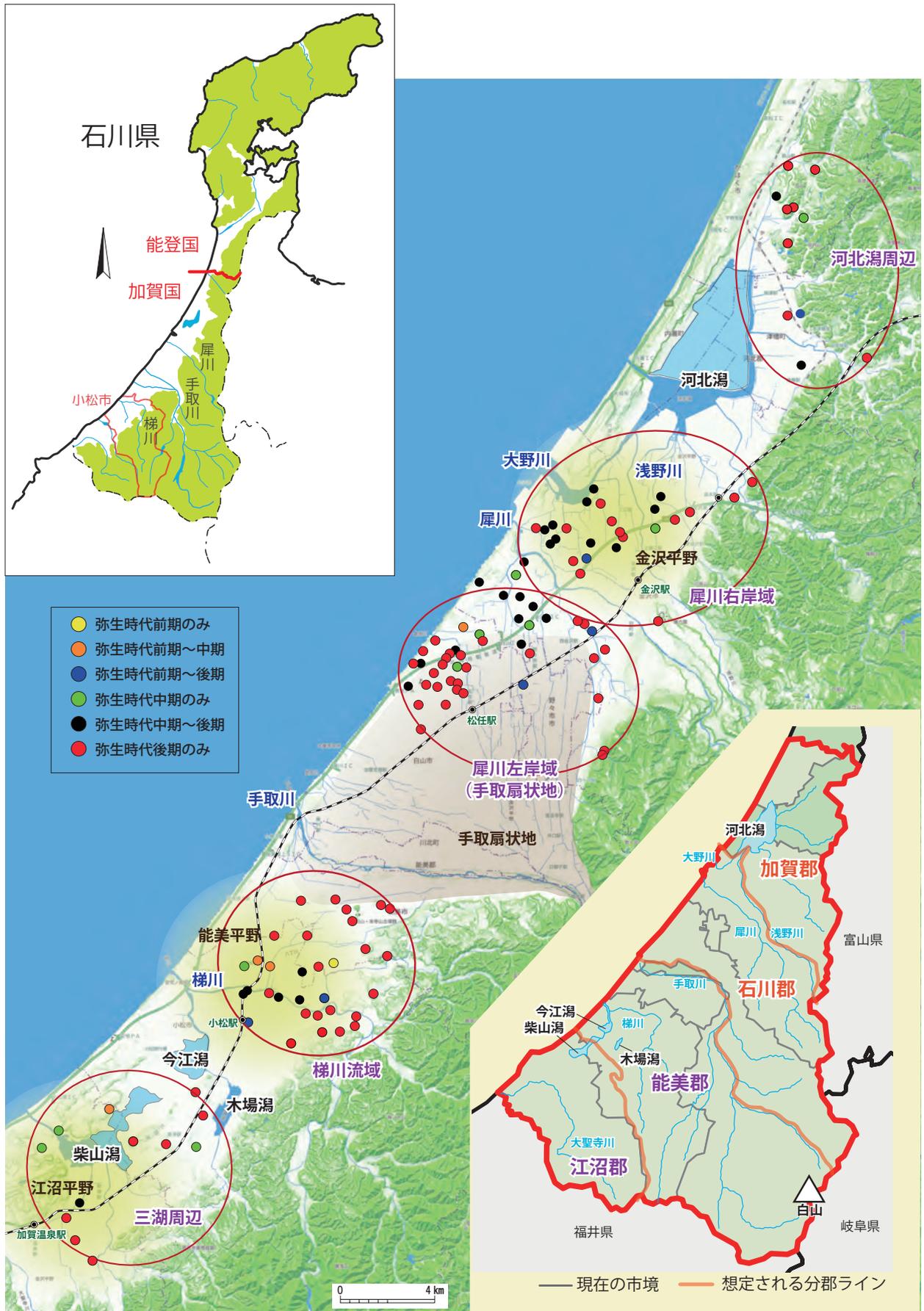
加賀の地は、南東部に白山を最高峰とする山地が発達し、北西方向に標高を減じて丘陵部から平野部に至る。白山を源に中央部を流れる手取川は、白山市鶴来付近から半径12～13kmの扇状地を形成し、平野部を北加賀と南加賀に分断している。山地・丘陵から派生する幾筋もの河川が沖積平野を潤しており、北加賀では犀川と浅野川、大野川、南加賀では梯川が、弥生時代以来の人々の活動拠点となる。また、海岸線の背後には砂丘群によって海と遮断された潟湖が発達し、北加賀では河北潟、南加賀では加賀三湖（木場潟、今江潟、柴山潟）が形成され、それぞれに連結する河川とともに、水上交通の要となっている。

第2図は弥生時代の主要な遺跡分布を示したものである。遺跡は大まかに5つにエリア分けが可能で、北加賀は①河北潟周辺②犀川右岸域（犀川・浅野川・大野川、金沢平野）③犀川左岸域（手取扇状地）、南加賀は④梯川流域（能美平野）と⑤加賀三湖周辺となる。

なお、この5か所の中でも、国府候補地を含む水陸交通の結節点として考えられるエリアは、②犀川右岸域と④梯川流域であり、この二つのエリアについて遺跡の概要を紹介する。

(1) 北加賀—②犀川右岸域（第3・4図）

大野川から犀川に挟まれた犀川右岸域は、平野と山地からなっており、平野は犀川と浅野川、



第2図 加賀国の地理的環境と主な弥生時代の遺跡分布 (下濱 2008 に加筆)

金腐川^{かなくさ}といった中小河川の土砂排水によって形成された金沢平野がみられ、北側には北陸最大の汽水湖である河北潟^{かほくがた}がひろがる。このエリアは出越茂和氏の詳細な遺跡消長の分析成果（出越2003）第4図をもとに紹介する。弥生時代中期^{じようこんもん}の条痕文系土器を伴う遺跡（中期前葉～中葉古段階）が最初に目立つ。その後、小松式^{こまつ}（中期中葉新段階）に増加した遺跡は猫橋式^{ねこはし}（後期前半）に一旦衰退し、法仏式^{ほうぶつ}（後期後半）から再度盛り返し、第1のピーク【弥生時代終末期～古墳時代前期】を迎える。西念・南新保遺跡^{さいねん みなみしんぼ}や大友西遺跡^{おともにし}、戸水大西遺跡^{とみずおおにし}は大型建物や井戸を伴い、南新保C遺跡には前方後方墳や方墳を中心とした墓域が展開している。特に、西念・南新保遺跡は、北加賀における中核的な集落と位置づけられており、出土遺物には仿製鏡^{ぼうせいきやう}、絵画土器、山陰との交流を示す花卉高杯^{かべんたかつき}がみられる。その後、小海進期に入る古墳時代中期～飛鳥時代までは遺跡数が激減、飛鳥時代前半期には一時的に遺物の出土を見るが長くは続かず、第2のピーク【奈良時代～平安時代前期】を迎える。大野川河口近辺の発掘調査成果によると、この河道の変動によって、「津」として機能する適所が変化したと考えられ、7世紀代の金石本町遺跡^{かないわほんまち}からはじまり、8世紀前半に畝田・寺中遺跡^{うねだ じちゆう}（木曳野遺跡群^{きびきの}）は越前国の津司としての大きな画期をむかえる。その後、海上交通と内水面交通の結節点に位置する戸水C遺跡は、渤海使^{ぼっかいし}がもたらす物資も加え、大きく発展した。しかし、10世紀にはいと遺跡は激減し、中世に至るまで回復は待たなければならぬとのことである。

総じて、大野川河口近辺には2つのピーク時の遺跡群に重なりを確認でき、両段階とも水陸交通の結節点として発展したとも考えられる。

なお、出越茂和氏は遺跡の盛衰の要因について海進—海退に起因すると考えている。



第3図 金沢平野西部の主な弥生時代～古代の遺跡分布

遺跡名	縄文晩期	弥生中期	弥生後期	弥生終末	古墳前期	古墳中期	古墳後期	飛鳥時代	奈良時代	平安前期	平安中期	平安後期	平安末期	鎌倉時代	室町時代
畝田															
畝田・寺中															
畝田・無量寺															
畝田ナベタ															
大友西															
金石本町															
西念・南新保															
近岡															
近岡テラダ															
近岡ナカシマ															
寺中															
寺中B															
戸水B															
戸水C															
戸水大西															
藤江B															
藤江C															
二ツ屋															
南新保C															
南新保D															
南新保E															
南新保三枚田															
無量寺															
無量寺B															

出越茂和 2003 「内水面と古代水上交通～戸水・大友遺跡群の総括に代えて～」『大友西遺跡Ⅲ』を転載

第4図 金沢平野西部における遺跡の消長模式図

(2) 南加賀④梯川流域 (第5図)

梯川は掃流力が弱く、「川切り」が行われるまでは、島状に分布する微高地を縫うように複雑に蛇行していたようである。八日市地方遺跡は、梯川下流域と加賀三湖（今江潟、柴山潟、木場潟）に挟まれた能美低地の沿岸洲上に立地しており、複雑に蛇行する梯川支流の1つとして形成された小川に沿うように展開している。また、加賀三湖は南に抜けることなく、梯川と合流して日本海に注ぎ込むことから、梯川下流に展開する遺跡は海に開けた水上交通の要衝に位置していると指摘できる。梯川河口は北前船の寄港地安宅湊にあたり、現在でも1月から3月にかけて澄んだ日には雄大な白山がみえる。原始から現在に至るまで、日本海を行き交う人々にとってこの情景はランドマークであり、現小松市域が日本海側において、交流拠点地として栄えてきた所以ともいえるであろう。

縄文晩期から弥生時代初頭段階の遺跡は数えるほどしかなく、しかも短期間であり詳細な遺構等わからない。櫛描文系土器波及期である弥生時代中期前葉は、現在、環濠集落として確認されている遺跡は、八日市地方遺跡と当遺跡から約1.3km離れたところに位置する園町遺跡（石川埋文2018）のみである。その他の遺跡は、現段階では土器の出土がみられるのみで、明確な遺構は伴っていない。弥生時代前期併行からみられる八日市地方遺跡でも間をあけて新たに環濠集落を形成しているこのことから、南加賀では櫛描文波及期が弥生文化受容の画期であり、大規模環濠集落として成立する八日市地方遺跡の存在意義は大きい。

八日市地方遺跡拡大期である小松式土器成立期（中期中葉）以降は、梯川流域で土器が散見するようになり、梯川鉄橋遺跡、一針C遺跡など小集落が形成されはじめる。その後、凹線文出現期（中期後葉）にはいると、八日市地方遺跡が縮小するとともに、ある程度規模をもつ遺跡へと変化し、戸水B式期（中期後葉後半）には終焉を迎え、集落主体は梯川中下流域に移動したものと考えられる。当該期併行の遺跡は大長野A遺跡や白江梯川遺跡のみである。中期後葉後半から後期の移行期に衰退するのは、BC50年前後が気象上不安定な時期であるからであろうか。

猫橋式期（弥生後期前半）は中期後葉から継続する遺跡に加え、青銅器鑄造や鍛冶技術がみられる一針B遺跡、木器生産がみられる白江梯川遺跡、平面梯川遺跡など複数点在しはじめるが、八日市地方遺跡のように突出する拠点集落はみられない。法仏式期（後期後半）に入ると、八丁川流域では高堂遺跡や中ノ庄遺跡が出現、梯川中下流域では佐々木遺跡、千代オオキダ遺跡、さらに吉竹遺跡や八幡遺跡など台地へ拡大化する。そして、月影I式期（後期終末から古墳初頭）には、丘陵上に展開する八里向山遺跡や河田山遺跡がみられる。こういった高所の遺跡は古墳時代には墓域化し、集落は、千代能美遺跡や漆町遺跡、佐々木遺跡、荒木田遺跡等梯川兩岸や、高堂遺跡や松梨遺跡など八丁川流域の平野に展開し、多くの遺跡は奈良時代以降の集落との重なりをみせる。

加賀国府推定地は、現海岸線から約8km内陸にある梯川と鍋谷川に囲まれた古府台地に位置する。古府台地は周辺の平野との比高差は5～10mあり、梯川中下流域にひろがる遺跡からは最も手前に見える高台であり、河川は航行だけでなく、藤岡氏の表現を借りれば、「府域を区画し、官僚都市としての威厳を保たしめた場所」（藤岡1969）にも該当する。推定地周辺では7世紀後半頃に集落形成が認められ、奈良時代には区画施設を伴う建物群（佐々木遺跡）や律令祭祀に関わる水場遺構（荒木田遺跡）など確認されている。その後、加賀立国を迎える9世紀前半から中頃には一旦低調となり、9世紀後半以降には再び活性化へと転じる。

2. 弥生時代における‘見えざる道’と交流の姿

(1) 八日市地方遺跡出土土器からみた見えざる道について (第6・9図)

縄文時代晩期終末期は、甲信地方の浮線文系土器の拡がりや、白山をとりまく遺跡群と共通する要素をもつ沈線文系土器の存在から、白山をめぐる「陸の道」、白山環状ネットワークが情報共有の道であったと考えられる。しかし、新たに稲作文化を迎える弥生時代前期後半には、日本海沿岸の層灰岩製片刃石斧や東北部から北海道が主たる分布域とする三面石斧(佐藤・宮田 2018)やヒスイ製垂飾の動きから日本海域の「海の道」が新たにひらかれたものと思われる。その後、中期前葉(集落Ⅰ期)には、日本海沿岸域、近畿北部に祖型をもつ櫛描文系土器がみられ、集落形成に大きく関与するものと考えられる。中期中葉(集落Ⅱ期)には北陸独自の櫛描文様である小松式土器が成立し、条痕文系土器は次第に姿を消す。搬入土器は中国地方、近畿北部がもっとも多く、次に貝田町式土器がみられ、近江系土器は少ない。当該期には白山をめぐる「陸の道」は拠点集落を結ぶ道へと変化し(下濱 2018)、また、新たに北陸新幹線ルートである「陸の道」が小松式土器の動きからみてとれる。中期後葉(集落Ⅲ期)は凹線文土器出現段階である。搬入品は、凹線文土器をはじめとし、近江系土器が増加傾向である。また北陸新幹線ルート上に栗林式土器や榎田型磨製石斧が流入する。凹線文系土器の流入は、河合忍氏の北加賀地域における外来系土器の検討(河合 2000)から、①日本海を海路または陸伝いのルート、②播磨・(畿内北部)→加古川・由良川→近畿北部→北陸、③播磨→畿内北部→近江西部→北陸の3ルートがあげられている。八日市地方遺跡の凹線文系土器は③ルートをメインに環濠集落終焉時には3ルートの影響を受けて多様な様相をもつ。

(2) 日本海を行き交う弥生中期から古墳時代前期への玉の道の変化 (第7図下、第10図)

弥生時代中期の主要な生産品としての碧玉製管玉は、石製品の中でも膨大な量を占め、量産していたものである。女代南B遺物群(註2)の動きで特筆すべきものは、鳥取県の青谷上寺地遺跡出土の玉作資料の分析で65%が那谷・菩提系と判定され(河合・藁科 2013)、小松産碧玉を鳥取まで運び入れて玉作を行い、製品を九州へと運ぶといった考察が展開されている。また、ヒスイの原石を糸魚川から仕入れて勾玉を作り、地元の碧玉製管玉と併せて西の世界へと出荷する構図が見えてくるが、一方で八日市地方遺跡では、集落内での生産能力を超える碧玉原石を保有していた実態が以前から指摘されており、原石供給拠点としての役割もすでに想定されている(宮田 2008・榎田 2020)。次に、製玉関連工具には、磨製石針(輝石安山岩製、瑪瑙製)、打製石針(瑪瑙製)、石鋸(結晶片岩製)がみられる。輝石安山岩製の磨製石針は、管玉同様、製作工程資料が出土しており、蛍光X線分析成果からは、二上山産、金山産、馬ノ山産がみられる(小松市 2014)。以上のように石針や石鋸の原材は遠隔地から仕入れており、玉生産に関わる物流は、技術交流を含めて広域に及んでいる。こうした玉の動きは、八日市地方遺跡終焉とともに弥生時代中期後葉には途絶え、再び動き出すのは弥生時代後期中葉以降となる。古墳時代の碧玉製品の動きは、加賀地域→敦賀→近江→畿内のルートが想定されている(河村 2021)(第10図)。精製高杯の分析(石川 2019)からも日本海ルートが弥生後期終末期までは継続するが、古墳前期には碧玉製品の動きと同様である(第8図)。古代北陸の水上交通は、加賀→敦賀津→塩津→大津が『延喜式』にあることが指摘されており(藤岡 1969)、弥生時代中期後葉に凹線文系土器の流入として新たにみられた③ルートは、古墳時代前期以降、平安時代にかけての主要ルートとなったのであろう。

3. まとめ

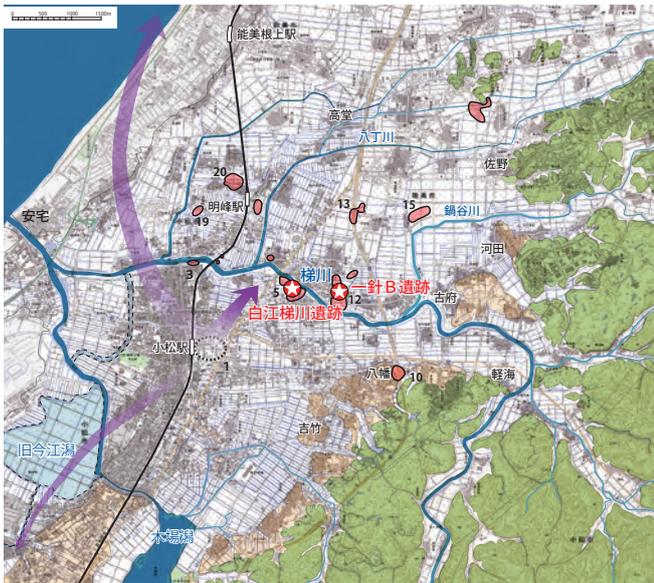
- ②犀川右岸域と④梯川流域の遺跡の動向からは、弥生時代終末期以降から平安時代にかけて多く遺跡の位置が重なることが読み取れる。また、北加賀の時期的盛衰は南加賀とは逆相関の関係をもち、その所以は海進一海退に起因し、加賀地域の拠点が変化したものと思われる。
- 畿内から近江西部、北陸へとつながる日本海航路は、弥生時代中期後葉の凹線文系土器流入ルートに源流をもち、古墳時代前期以降から平安時代にかけての主要ルートであった。
- 日本海沿岸、加賀地域にとって、ヒトとモノ・ワザが動く文化・経済活動の基盤は、稲作文化の到来から加賀国府誕生に至るまで一貫して海路と陸路のクロスロードにあった。白山というランドマークをもつ梯川河口・安宅湊は、弥生時代中期に栄えた八日市地方遺跡や加賀国府候補地にとって重要な海の玄関といえよう。

【註】

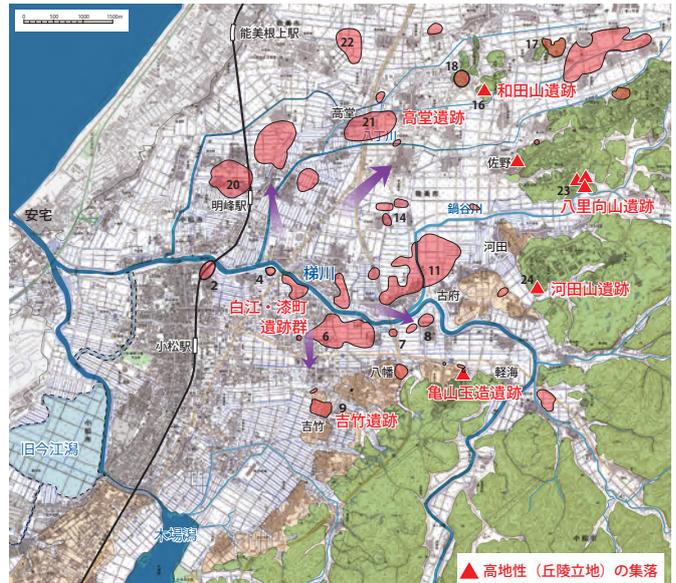
- (1) 現在、国府所在地は関連記事として10世紀前半に成立した『和名類聚抄』^{わみょうるいじゆしやう}に記載と『為房卿記』^{ためふさきやうき}寛治5年(1091)から能美郡とし小松市古府町石部神社周辺にする通説、大東急記念文庫本『和名類聚抄』^{わみょうるいじゆしやう}に加賀国府の所在地が加賀郡とあることから、加賀国の国府所在地は立国当初は加賀郡にあったとする説がある。
また、立国当初は加賀郡にあったとする出越茂和氏によると、9世紀代の金沢平野における遺跡の隆盛から加賀郡の既存郡衙施設を修理した初期国府とし、10世紀前後に能美郡へと移転する意見もある。
- (2) 女代南B遺物群は、兵庫県豊岡市の女代神社南遺跡で確認した原石群で、それが西日本を中心に最も多く分布するにもかかわらず、原石自体の産出地は不明とされていたものである。その後、那谷・菩提・滝ヶ原地区で産出する碧玉を分析したところ、女代南B遺物群と一致するものの存在が確認されはじめた。

【主要参考文献】

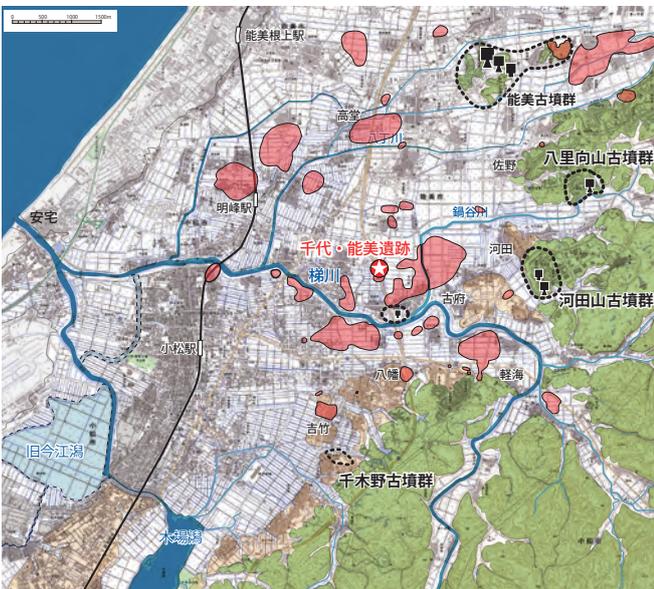
- 石川県埋蔵文化財センター 2018「園町遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第39号
- 石川ゆずは 2019「纏向遺跡辻土壌4出土装飾木製高杯の系譜」『古代学研究』第222号
- 樫田 誠・下濱貴子 2020「特論二 碧玉原産地と玉づくり」『新修 小松市史 資料編 17 考古』
- 河合 忍 2000「弥生時代中期後半における土器交流システムの変革とその背景—北陸における凹線文系土器の分析を中心として—」『石川考古学研究会々誌』43
- 河合章行・藁科哲男 2013『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告書 9 玉・玉作関連資料』鳥取県埋蔵文化財センター
- 河村好光 2021『ヒスイと碧玉の考古学—日本列島における中の民の形成—』六一書房
- 小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
- 小松市教育委員会 2008『まいぶん講座フォーラム報告 加賀国府と中宮八院』
- 小松市教育委員会 2014『八日市地方遺跡Ⅱ 第3部製玉編 第4部木器編』
- 小松市教育委員会 2016『八日市地方遺跡Ⅱ 第5部土器・土製品編 第6部自然科学分析編 第7部補遺編』
- 佐藤由紀男・宮田 明 2018「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』第65巻第3号 考古学研究会
- 下濱貴子 2009「報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について」『弥生時代の北陸を探る—考証八日市地方遺跡とは—』まいぶん講座フォーラム報告Ⅱ 小松市教育委員会
- 下濱貴子 2018「八日市地方遺跡から北陸の地域社会を考える」『論集弥生時代の地域社会と交流—転機8号—』地域と考古学の会
- 下濱貴子 2019「第Ⅰ章 位置と環境」『八日市地方遺跡Ⅴ』小松市埋蔵文化財センター
- 下濱貴子 2020「八日市地方遺跡をめぐる論点」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会 2021年度金沢大会資料集』
- 出越茂和 2003「内水面と古代水上交通」『大友西遺跡Ⅲ』金沢市
- 出越重和 2020「加賀の古代津湊と交通」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会 2021年度金沢大会資料集』
- 藤岡謙二郎 1969『国府』吉川弘文館
- 宮田 明 2008「弥生時代中期における管玉生産の展開」『第6回日本玉文化研究会 石川大会 北陸における弥生・古墳時代に玉作の変革発表要旨集』



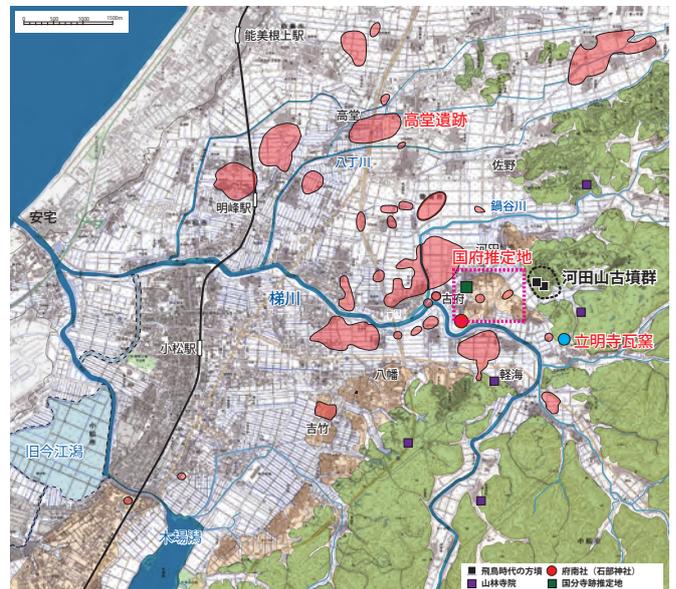
弥生時代中期後葉～後期前葉の遺跡



弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺跡



古墳時代前期 弥生時代末に高地性集落が立地した場所を中心に古墳群が誕生します。



飛鳥～平安時代の主要な遺跡

群	No.	遺跡名	属性	長竹	I	II	III	IV	V
梯川流域	1	八日市地方	集落 (方形周溝墓) (土壇墓)						
	2	園町遺跡							
	3	梯川鉄橋							
	4	平面梯川							
	5	白江梯川							
	6	漆町(群)							
	7	佐々木アサバタケ							
	8	佐々木							
	9	吉竹							
	10	八幡							
	11	千代オオキダ							
	12	一針B・C							
	13	大長野A							
	14	千代デジロA							
	15	牛島ウハシ							
	16	和田山下	墳墓						
	17	西山墳墓群	墳墓						
	18	寺井山墳墓群	墳墓						
	19	銭畑							
	20	松梨							
	21	高堂							
	22	中庄							
	23	八里向山A,C,D							
	24	河田山							

〈弥生時代前期～中期初頭〉

梯川流域の遺跡は少なく、しかも短期間であり、詳細な遺構等がみついている遺跡は少ない。

〈弥生時代中期〉

八日市地方遺跡は大規模拠点集落として展開。

櫛形文系土器波及期である中期前葉段階の環濠集落は八日市地方遺跡と園町遺跡のみ。

中期中葉(小松式土器成立以降)は、各流域で土器が散見。

中期後葉(凹線文出現期)には、八日市地方遺跡集落縮小とともに、各流域に展開していた遺跡は、ある程度の規模へと変化。

〈弥生時代後期〉

後期前半(猫橋式期)には、青銅器鑄造、鍛冶技術がみられる遺跡(一針B遺跡)、木器生産(白江梯川遺跡)、平面梯川遺跡など複数点在。

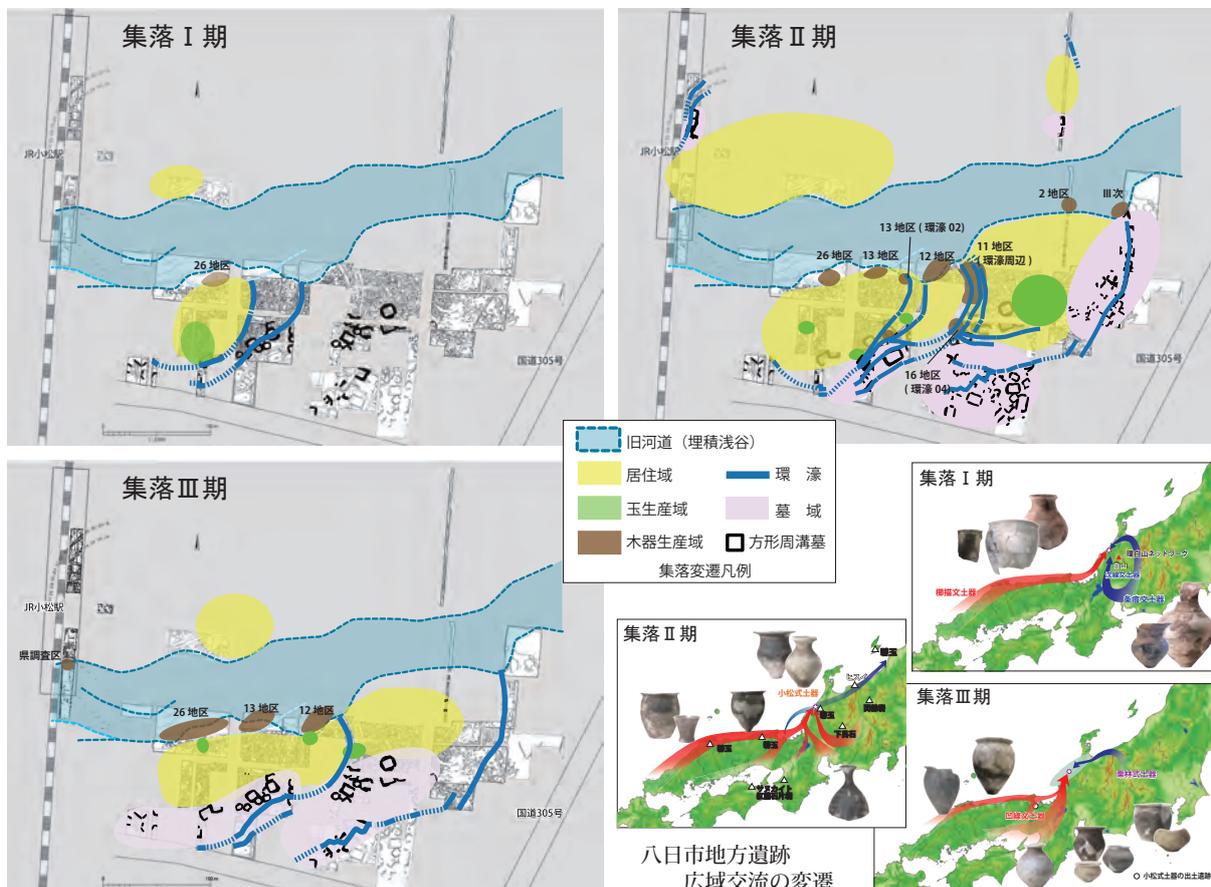
弥生時代中期に八日市地方遺跡でみられたような複合型集落で突出する遺跡がみえなくなり、遺跡は点在・分散してみられる。

後期後半(法仏式期)には、さらに遺跡は増加し、再び玉作りが盛んに行われる。

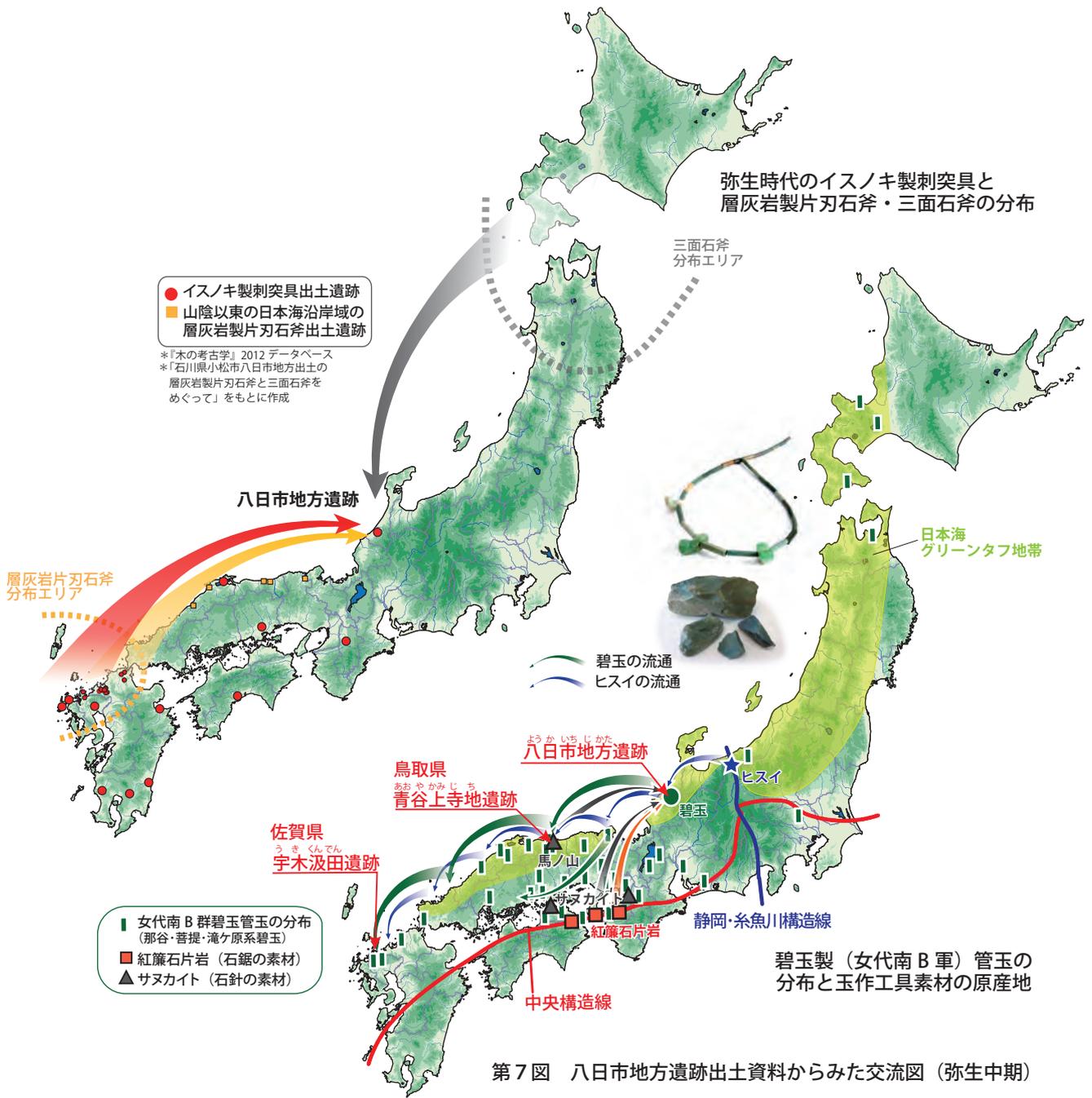
後期終末期(月影式)には、東部台地に新たに展開する遺跡が出現。

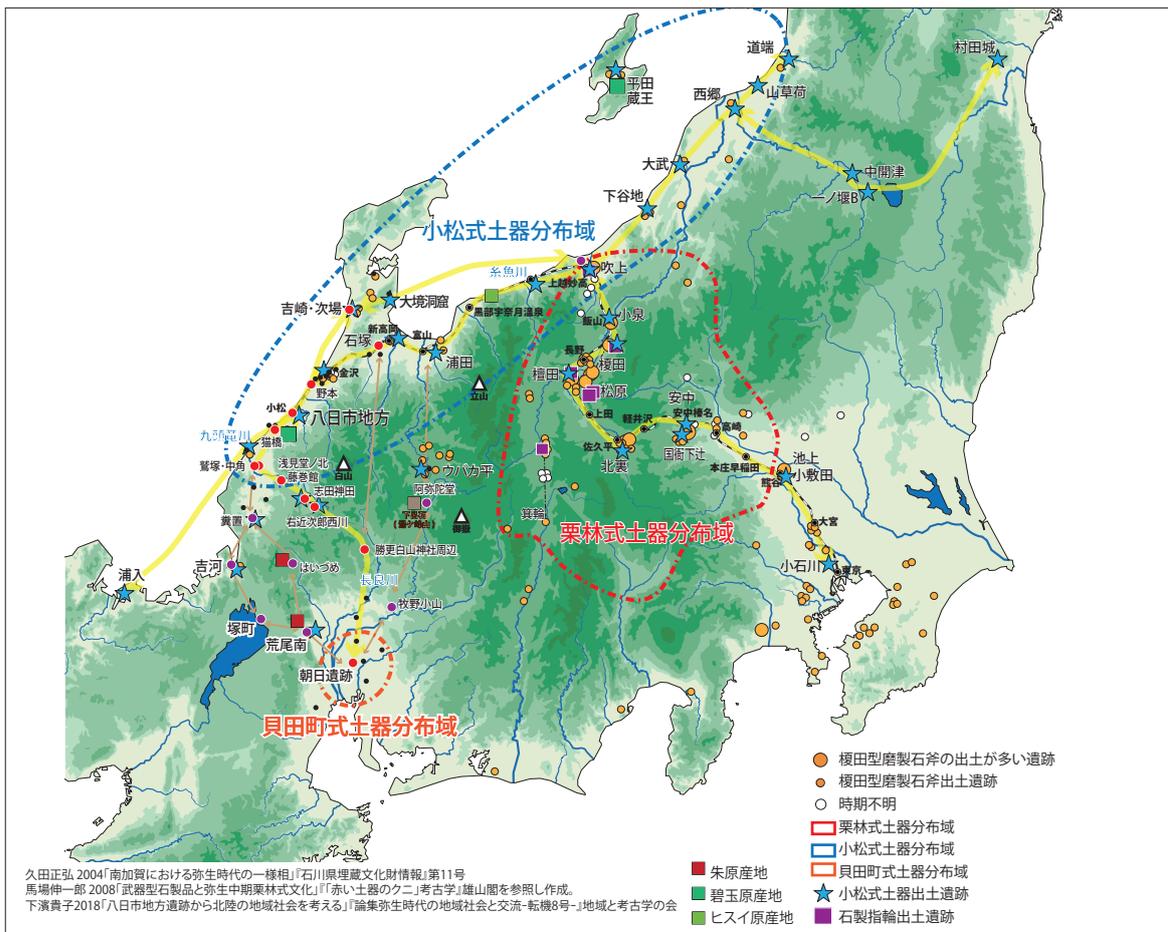
第5図 梯川流域における弥生時代中期後葉～古墳前期と飛鳥～平安時代の遺跡分布

時代区分	八日市地方 集落 土器	畿内 様式	西暦			八日市地方 遺跡の変遷	日本列島 の動向	中国・朝鮮半島 の動向	中国 大陸	朝鮮 半島
			AMS	年輪	酸素					
縄文晩期		0				砂層中に縄文後期包含層	西日本に水稻耕作が拡散			
弥生前期		1	-550			★埋積浅谷より、遠賀川式土器出土。			春秋	
		2	-400			埋積浅谷より遺物散見。				
		3				クヌギ・アベマキ等(ドングリ)の貯蔵穴。				
弥生 中期前葉	I 期	4	-350			★環濠掘削開始。環濠集落の成立。 埋積浅谷肩部に木器貯蔵開始。 管玉生産開始。	金属器使用の開始	BC.403 三晋の成立(趙、魏、韓)	古朝鮮	
		5								戦国
		6	-300			★環濠再掘削。 居住域拡大。小松式土器の成立		BC.312 ~ 279 燕の東方進出		
弥生 中期中葉	II 期	7	-283+	-250+		★環濠再掘削。	東日本で広域な社会変動	BC.221 秦の始皇帝が中国統一	秦	
		8	-250+	-220+				八日市地方遺跡の最盛期		BC.202 高祖(劉邦)が漢王朝を興す
		9	-200			★居住域縮小。凹線文系土器の波及 埋積浅谷肩部に貝層・貯蔵穴(ヒシ・トチ等)				BC.195 衛氏朝鮮の成立
弥生 中期後葉	III 期	10	-136	-139+	-107+	-97+			前漢	
			IV	-100	-40		★集落廃絶。	鉄器生産の開始		BC.108 前漢が朝鮮半島に四郡を設置
弥生後期		V	80			★埋積浅谷がほぼ埋まった後、 一時的土器祭祀。	AD.57 奴国王が後漢に使い(金印賜与)	新後漢	原三国	

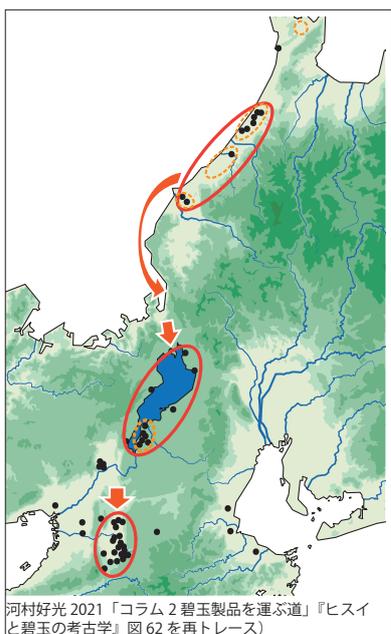


第6図 八日市地方遺跡の変遷 (2014年度までの調査成果で作成)





第9図 小松式土器及び朝日遺跡と交流圏（弥生時代中期中葉）



第10図 南近江の集落遺跡出土碧玉製品から読み取る加賀・越前製作碧玉製品の動き（古墳前期）



第11図 北陸の陸上・水上交通

壱岐国府の地理的環境と弥生時代の拠点集落

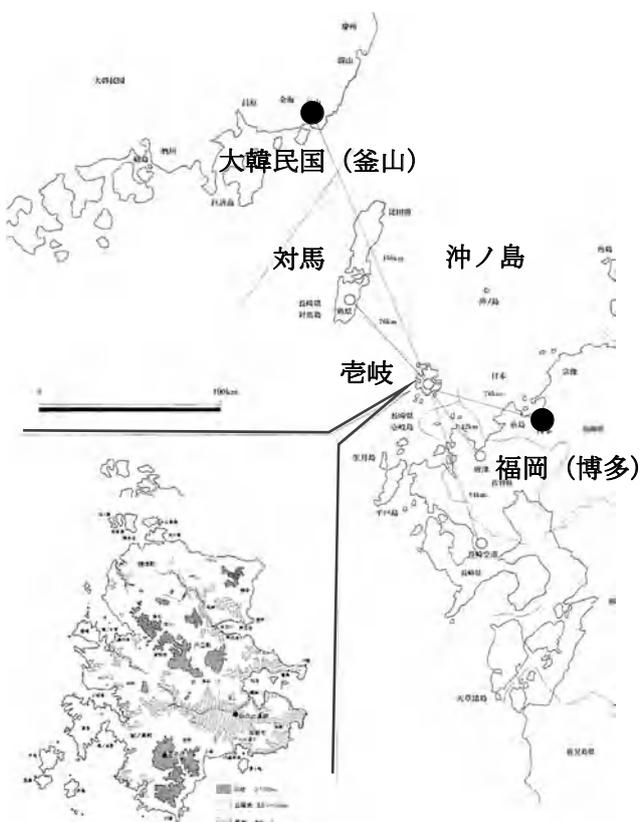
壱岐市教育委員会社会教育課
松見 裕二

■壱岐島の立地的環境

壱岐市は、行政区分は長崎県に属し、郷ノ浦町、勝本町、芦辺町、石田町の4町（人口約2万6千人）で構成された九州本土と韓半島の間の玄界灘に浮かぶ島で、対馬島とともに古代より“東アジア諸国との国境の島”として重要な役割を担ってきた島である【第1図】。

壱岐市は、壱岐本島と21の属島〔有人島4島・無人島17島〕で構成され、南北約17キロメートル、東西約15キロメートル、総面積は138平方キロメートルの規模で、全国で20番目の大きさ《註1》である。地形的には南北にやや長い楕円形状を呈し、島の面積は、対馬島の約5分の1程度で、対馬市巖原町1町の面積にも満たない大きさである。

壱岐島は、標高20～100メートルの低い丘陵地が島の80パーセント以上を占める緩やかな地形で構成されている。島内で最も高い岳の辻でも標高213メートルと山としては標高が低いが、頂上からは、島全体を見渡すことができると同時に、晴れた日には九州本土影【図版1】や対馬島影【図版2】を一望できる立地にある。



第1図 壱岐島の立地的環境位置図

《註1》 本土・北方領土及び沖縄本島を除く



図版1 壱岐島からみた九州本土影



図版2 壱岐島からみた対馬島影

■はじめに

最先端の文物を求めていた古代、特に弥生時代と古墳時代において、壱岐島及び対馬島は中国大陸や朝鮮半島の国々との友好交流によって“東アジア諸国との対外交流の歴史”を築いてきた。

当時の社会において、壱岐島には多くの渡来人が往来し、最先端の文物を求めて多くの倭人が海を渡り、来島していたものとみられる。

そのような壱岐島には、対外交流の歴史を物語る数多くの史跡や文化財が残っており、国特別史跡原の辻遺跡をはじめ、国史跡壱岐古墳群、国史跡勝本城跡といった指定史跡、国重要文化財原の辻遺跡出土資料一括、国重要文化財^{ささづか}笹塚古墳出土資料一括、国重要文化財^{そうろく}双六古墳出土資料一括、国重要文化財石製弥勒如来坐像（奈良国立博物館所蔵）、国重要文化財高麗版大般若経（安国寺所蔵）などの貴重な文化財を有する。

今回は対馬島と共に国境の島として対外交流の歴史を築いてきた壱岐島の歴史についてまとめていく。

■魏志倭人伝に認められた“国邑”

《57文字で記された壱岐島の様子》

又南渡一海千余里。名曰瀚海。至一大（支）国。官亦曰卑狗。副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有田地。耕田猶不足食。亦南北市糶。

【訳文】

対馬国から、また南に一海を渡ること千余里で一支国に到着する。この海は瀚海（かんかい）と名付けられる。この国も対馬国と同じく、大官は卑狗（ひこ）、次官は卑奴母離（ひなもり）という。広さ三百里ばかり、竹木・叢林が多く、三千ばかりの家がある。ここはやや田地があるが、水田を耕しても食料には足らず、やはり南や北と交易をして暮らしている。

《64文字で記された対馬島の様子》

始度一海千余里。至対馬国。其大官曰卑狗。副曰卑奴母離。所居絶島。方可四百余里。土地山險。多深林。道路如禽鹿径。有千余戸。良田無。食海物自活。乗船南北市糶。

【訳文】

はじめて海を渡ること千余里にして対馬国に到着する。其の大官を卑狗（ひこ）といい、副官を卑奴母離（ひなもり）という。居る所、絶島。方四百余里ばかり。土地は山険しく、深林が多く、道路は禽鹿（きんろく）の径（こみち）のようである。千数戸の家があるも、良田は無く、海産物を食して自活し、船に乗って南や北と交易をして暮らしている。

表1 一支国と對馬国の内容比較

一支国（壱岐島）	比較内容	對馬国（対馬島）
卑狗	大官名	卑狗
卑奴母離	副官名	卑奴母離
三百里	島の面積	四百余里
竹木で構成された林が広がっている	島の風景	山地が険しく、深い森が広がっている
三千余家	家の数	千数戸
良田が多い	耕作地の状況	水田がほぼない
北や南と交易をして暮らしている	生活の状況	北や南と交易をして暮らしている

■渡来人が吉岐島にもたらしたモノ・技術（ワザ）・文化

国特別史跡 原の辻遺跡（はるのつじいせき）

原の辻遺跡は、長崎県で2番目に広い平野である「深江田原（ふかえたばる）」【図版3】にある。深江田原は島内各地の山麓から湧き出した水が集まり、島内最長を誇る幡鉾川^{はたぼこ}に合流する場所に位置する。遺跡からは海を望むことができないが、幡鉾川を東に約1キロメートル下流に向かうと「内海湾（うちめわん）」が広がっている。原の辻遺跡は深江田原に舌状にのびる標高18メートルの丘陵最頂部につくられた祭儀場を中心に、標高10メートル前後の丘陵尾根上に居住域が広がり、そのまわりを多重の環濠で取り囲んだ大規模環濠集落跡である。

一支国の交流ネットワークは倭国内だけに留まらず、朝鮮半島や中国大陆にある東アジアの国々にまで広がっていたことがわかる。東アジアの国々から海を越えて吉岐島に持ち込まれた最先端の文物や倭国各地から吉岐島に運ばれてきた様々なものが揃う【図版4】。時に原の辻遺跡は「弥生のデパート」と称されるように、土器や石製品だけでなく、木製品、鉄製品、青銅製品、ガラス製品、骨角製品など多種多様な遺物が発見されているのが特徴である。立地的環境から日本最古や国内唯一といった遺物も多く、人の顔を模した石製の人面石【図版5】、青銅製の棹秤の錘^{さおばかり おもり}【図版6】、装飾を施したガラス製の蜻蛉玉^{とんぼ}【図版7】、国内未導入の青銅製の馬車の部品【図版8】、同じく国内未導入の弩の矢先に用いる青銅製の三翼鏃^{さんよくぞく}鉄製の金錠、などの代表遺物がある。



図版3 原の辻遺跡遠景

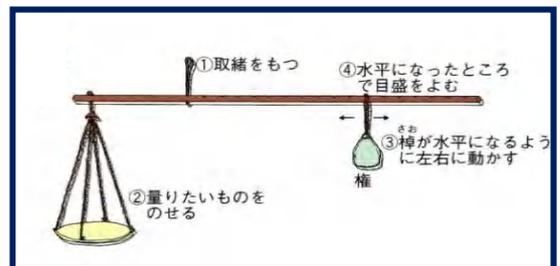


図版4 原の辻遺跡代表資料

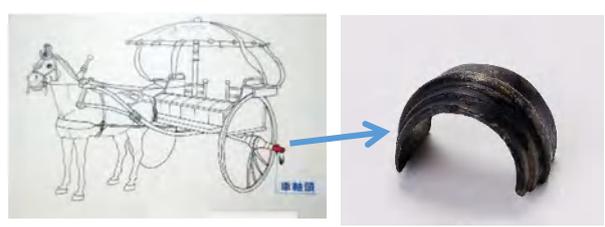
図版5 人面石



図版6 青銅製権



図版7 ガラス製蜻蛉玉

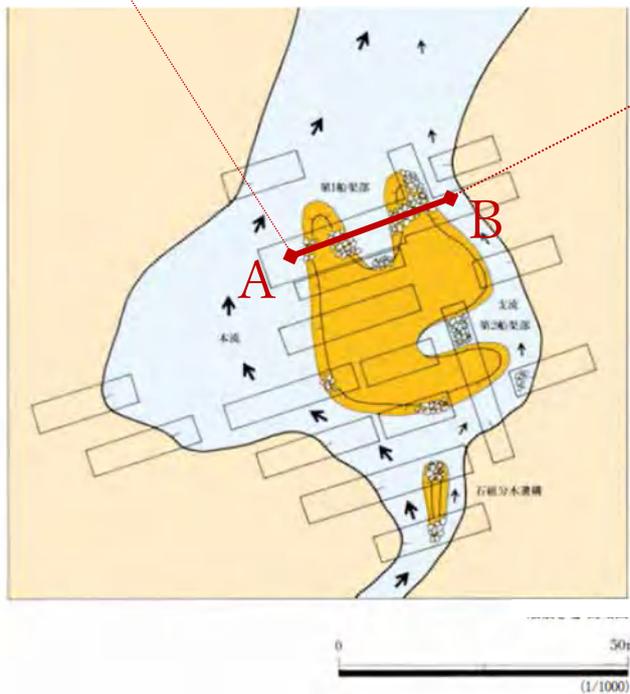
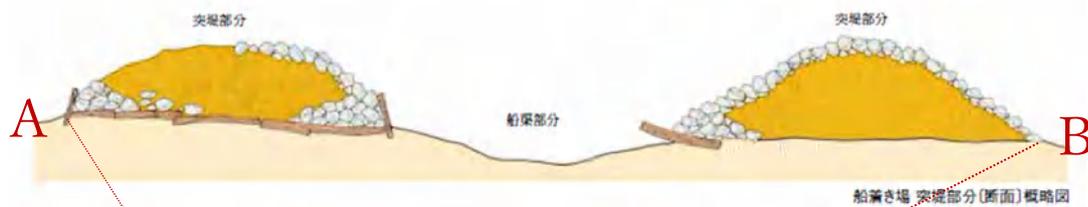


図版8 車輪軸に使用する車馬具

国内外に「海上弥生都市」の存在を示した唯一無二の船着き場

原の辻遺跡で確認された船着き場は弥生時代中期初頭から前葉頃〔今から約2200年前～2100年前〕に築造された日本最古の船着き場跡である。船着き場がつけられた時期は、原の辻集落に多くの外来系の遺物が搬入され、渡来人の存在が明確になる時期と重なる。外来系の遺物は丘陵北西側を流れていた河川内から集中して発見されていることから、一支国に滞在した渡来人が船着き場建設に携わっていたことがわかる。

原の辻遺跡で発見された船着き場は、2つの突堤（とってい）を持つ船渠部（せんきょぶ）が2箇所あり、島状の形になっていることが判明している【第2図】。突堤は何重にもわたる版築を重ね、底面には樹皮を敷き詰め一定の水分を保つための工夫や崩落を防ぐために側面に人頭大の礫石を積み重ねているのが特徴である。また、底面付近には土の流出を防ぐために矢板を打って土留めしている点など随所に最先端の技術「敷粗朶工法（しきそだこうほう）」が用いられている。川の底に石を敷き詰めている点や突堤を基礎から積み上げている点などからみて、船着き場は既存の河川に造られたものではなく、大規模な土木工事によって完成させ、本流の河川に繋げられた可能性が考えられている。



第2図 船着き場の発掘調査成果



発掘された船着き場跡



船着き場跡復元イメージ

最先端の鉄製品加工鍛冶工房の存在

平成 25 年度のカラカミ遺跡の発掘調査で、地上につくられた炉壁の一部が原位置を保ったままの状態の周堤付炉【図版 9】が発見された。平成 26 年度のカラカミ遺跡の発掘調査においても新たに地上につくられた炉の台座と台座の上につくられた周堤付炉【図版 10】が発見された。弥生時代において、地中に掘り込んでつくるタイプの鍛冶炉は全国各地で発見されているが、地上につくるタイプの鍛冶炉は国内初の事例である。

発見された周堤付炉跡の周辺からは、鍛冶関連の鉄製品【図版 11】、未完成の鉄製品を含む鉄素材【図版 12】、鉄製品加工に使用する敲石や砥石などの鍛冶関連石製工具類【図版 13】が発見されていることから、地上につくられた周堤付炉を用いて鉄製品の加工を行っていた可能性が考えられる。

現段階の調査成果や発見された遺物から、周堤付炉を用いて行われていた鍛冶行為は搬入鉄製品の 2 次加工もしくは脱炭や鍛接による付加価値を付けた鉄素材の生産の可能性が推考できる。

カラカミ遺跡で発見された地上式周堤付炉跡は、カラカミ遺跡内における鉄製品生産の可能性だけでなく、国内における鉄製品流通の歴史をひも解く上でも貴重な発見である。



図版 9 地上式周堤付炉



図版 10 地上式周堤付炉



図版 11 カラカミ遺跡出土鉄製品

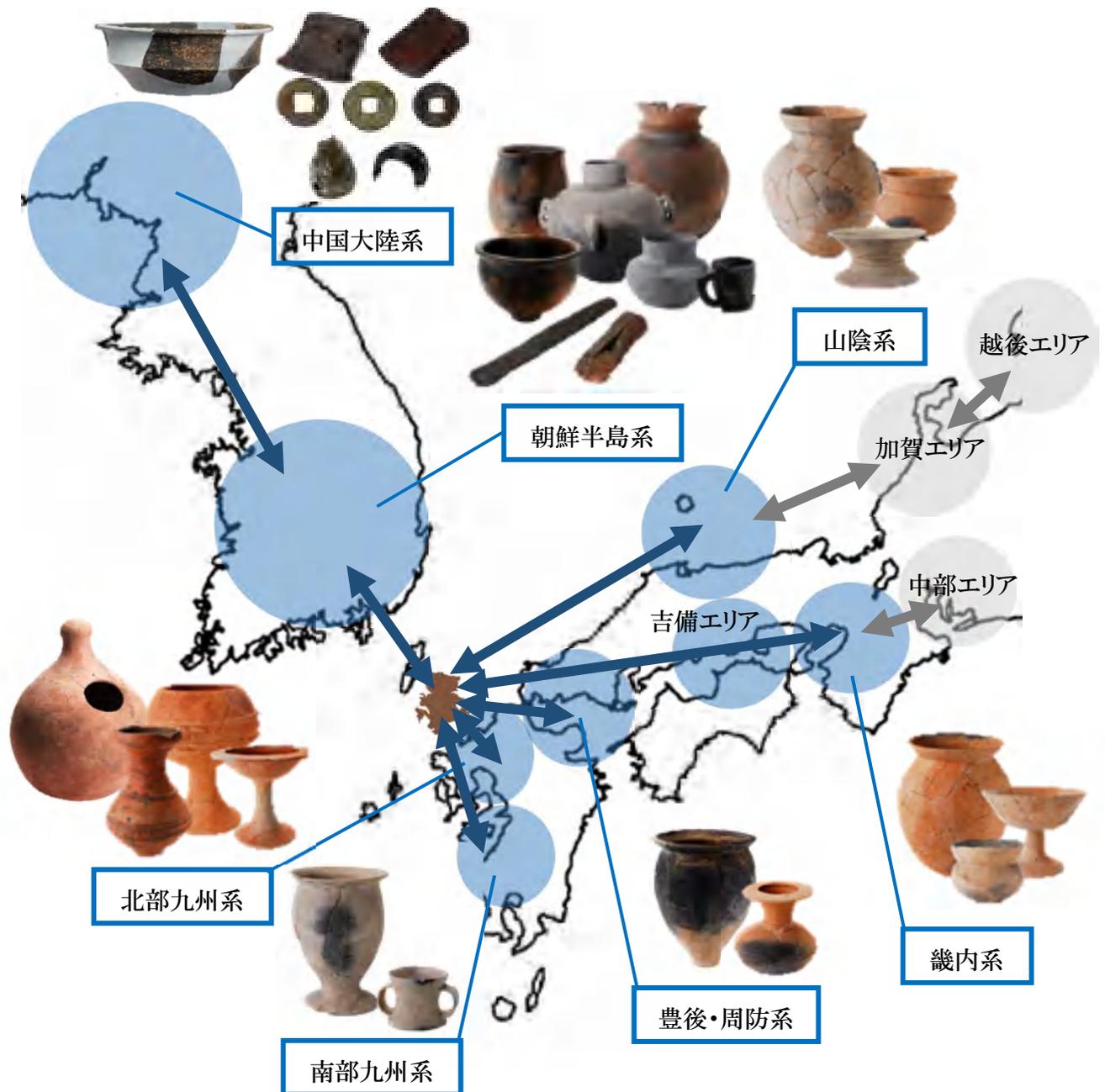


図版 12 未完成品の鉄素材



図版 13 鍛冶関連石製工具類

■出土品から見る一支国（壱岐島）の交流ネットワーク



一支国の衰退

古墳時代になり、九州本土へ拠点が移行する背景として、造船技術や航海技術が格段に向上したことによって朝鮮半島と日本本土との間の海の路〔シーロード〕が朝鮮半島→対馬→壱岐→唐津→糸島→福岡から朝鮮半島→対馬→福岡（博多）へと替わり、モノの流れだけでなくヒトの流れも大きく変わったことが想定される。一支国が「交易の拠点」から完全に「交易の中継点」に移行したことで一支国に住んでいた多くの人々が新たな交易拠点へと活動の場を求めて島外に移住していったことが一支国の人口減少の要因と考えられる。島内の人の動きは原の辻遺跡の集落解体と連動しており、車出遺跡群やカラカミ遺跡もこの時期に集落が解体され終焉を迎えることから、原の辻遺跡だけでなく一支国全体の動きと捉えることができる。

■日韓交渉の立役者が揃う壱岐島の古墳時代

壱岐の古墳時代の特徴

壱岐島内に築造された古墳に副葬されたものの中には、中国大陸や朝鮮半島製の資料も多く含まれている。特に双六古墳から発見された北齊製の二彩陶器【図版 14】や新羅土器【図版 15】などは、当時の倭国社会においても限られた有力階層しか持つことができなかつた貴重な資料である。笹塚古墳からは亀形飾金具【図版 16】をはじめ、心葉形杏葉、貝飾付辻金具といった金銅製の馬具が発見されており、出土した馬具は中央政権との強い結びつきを示すものである。

6世紀後半以降、東アジア社会情勢において倭国と新羅や高句麗などの朝鮮半島の国々との関係が悪化していく。倭国は朝鮮半島の国々からの襲来に備え、壱岐島を国防の最前線に位置づけ、国防の任務には島内の有力者だけでなく、島外から赴任してきた有力者の存在も想定される。

対立が深まる東アジア社会情勢の中で、壱岐島の有力者たちはこれまで築いてきた独自の交流ルートを活かし、朝鮮半島の国々と友好的な国際関係を築いていたことが副葬品から窺い知ることができる。そのような歴史の中で、朝鮮半島の国々と独自の交流ルートを持つ壱岐島の有力者たちは倭国内において貴重な存在であり、朝鮮半島の国々との関係を取持つキーマンとして欠かすことができない唯一無二の存在だったと考えられる。また、朝鮮半島の国々からしても友好関係にある壱岐島の有力者たちは倭国との交渉の窓口として重要なキーマンであった。このように敵対関係にある倭国と朝鮮半島の国々との関係を取り持つ交渉人的な存在として重要な役割を壱岐島の有力者たちは果たしていた。



図版 14 北齊製二彩陶器

図版 16 金銅製亀形飾金具



図版 15 新羅土器

■国境の防衛拠点として重要視された壱岐国（壱岐島）

大化の改新後、中央主権国家の動きが高まり、701（大宝元）年に唐の律令制度に倣い、全国を7道の行政区分に区分けし、その下に国（くに）、郡（ぐん）、里（り）が設けられ、それぞれに国司、郡司、里長が任命された。また、国は4階級に区分され、上から大国、上国、中国、下国とされた。その中で壱岐島は西海道の下国として認められた。任命された国司は、国衙がある国府に常駐し、国内の統治や中央政権との連絡等の役割を果たした。壱岐島は対馬島とともに国境の島として重要視されており、主な機能として国防の役割が大きかったものと思われる。

表2 古代制度概要

道名	等級	国名	等級	区分	備考
西海道 11国	大国	肥後	壱岐国	国（くに）	上級階級から任命 派遣役人
		上国		郡（ぐん）	地元豪族から任命 世襲制
		筑前		租税等の徴収等雑務 律令官僚外	
		筑後			
		豊前			
		豊後			
		肥前			
	中国	日向			
		薩摩			
		大隅			
	下国	壱岐島			
対馬島					

職位	職務
守（かみ）	一国の政務全般（行政・司法・警備等）を統括する
介（すけ）	守の職務を補佐又は代行する
掾（じょう）	国内の治安維持及び取締りを行う
目（もく）	上申の取り纏め、お達しを周知する
史生（ししょう）	書記及び書雑務を行う

表3 壱岐島内郷区分

郡区分	郷区分	駅制
壱岐郡	可須郷（勝本・新城一带）	何周駅
	風早郷（本宮・布気一带）	
	潮安郷（箱崎・諸津一带）	
	鯨伏郷（立石・住吉一带）	
	田河郷（諸吉・深江一带）	
	那賀郷（国分・中野郷一带）	
	伊宅郷（湯岳一带）	
石田郡	石田郷（印通寺・筒城一带）	優通駅
	籠原郷（志原・初山一带）	
	物部郷（柳田・武生水・渡良一带）	
	沼津郷（長峰・半城・黒崎一带）	



■ 壱岐国の国府所在地の検討

現時点で、壱岐国の場合、国府の正確な位置は特定できていない。国府の第1推定地として有力なのが、現在の池田仲触（旧石田郷）にある椿遺跡一帯【図17】である。『和名類聚抄』に「壱岐嶋管二（中略）壱岐石田伊之太国府」と記されている。『日本三代実録巻7』〔863（貞観5）年〕に「壱岐島の石田郡の人物、卜部是雄と卜部業孝等が伊伎宿祢の姓を賜る」と記されている。亀卜占いを得意とする卜部一族が石田郡内に存在していたことがわかる。また、『同巻19』〔872（貞観14）年〕に「伊伎宿祢是雄は卜道を究めたり」とあり、中央政権内で占いを通して、一定の地位を確立していたことがわかる。椿遺跡の発掘調査では石帯や耳飾などの装身具や当時の土師器や須恵器など、文献内容を裏付ける考古学資料が数多く出土している。また、原の辻遺跡大川地区からは、初期貿易陶磁や国産施釉陶器などが出土しており、8世紀代から10世紀代にかけて権力を持った人物が存在していたことを遺物が示している。

第2推定地として考えられているのが現在の湯岳興触（旧伊宅郷）にある興触遺跡・興触川上遺跡【図版18】である。遺跡の北側には「興神社」があり、南西側には「総社」がある。興神社の『社記』に「壱岐伊宅郷国府村国ノ一宮国府社また印鑰大明神という。昔、兵庫鑰及び国府政所の印を納めておく官庫があったことが印鑰大明神と社号の由来となっている」と記されており、社殿脇の祠に「印鑰宮」の石額【図版19】が現在も残っている。興触・興触川上遺跡の発掘調査では9世紀代以降の貿易陶磁器や縦耳タイプの滑石製石鍋などが出土している。また、観城跡からは、11世紀代以降の貿易陶磁器をはじめベトナム陶磁器が出土しており、11世紀から13世紀にかけて権力を持った人物が存在していたことを遺物が示している。



図版 17 国府第1推定地



図版 18 国府第2推定地



図版 19 社殿脇の祠にある石額

地元豪族壱岐氏の居館と郡司の位置

壱岐氏の居館跡は、那賀郷にあったとされ、現在の国分本村触にある国片主神社一帯に存在していたことが発掘調査によって確認されている。また、壱岐氏居館跡の西側隣接地には壱岐国分寺跡が、東側の丘陵上には、14世紀代にこの地を治めていた松浦党の1人とされる塩津留氏の居城郡城跡【図版20】がある。

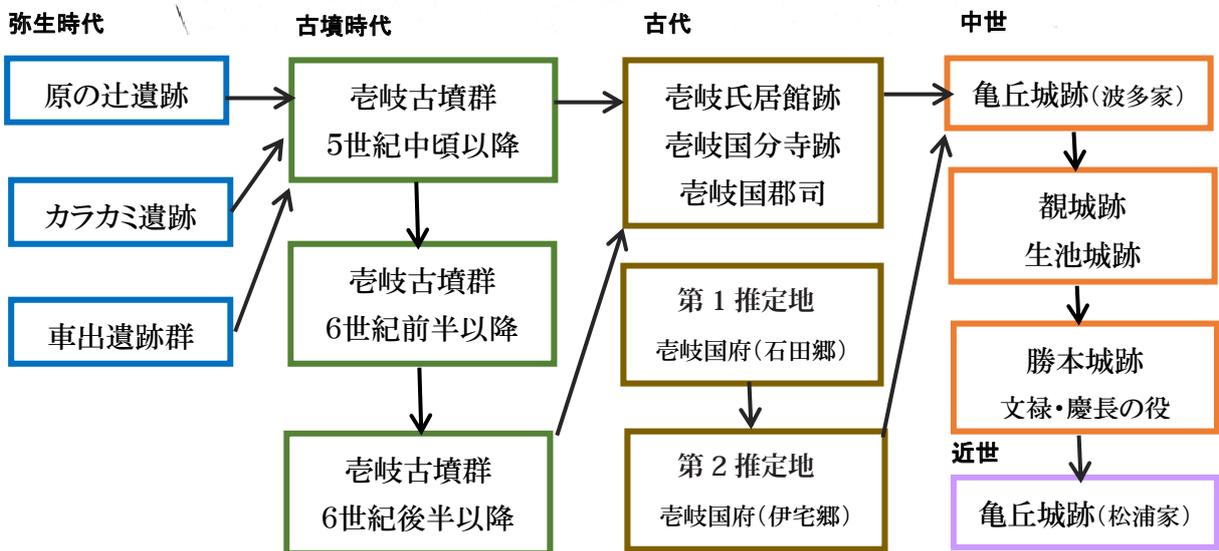
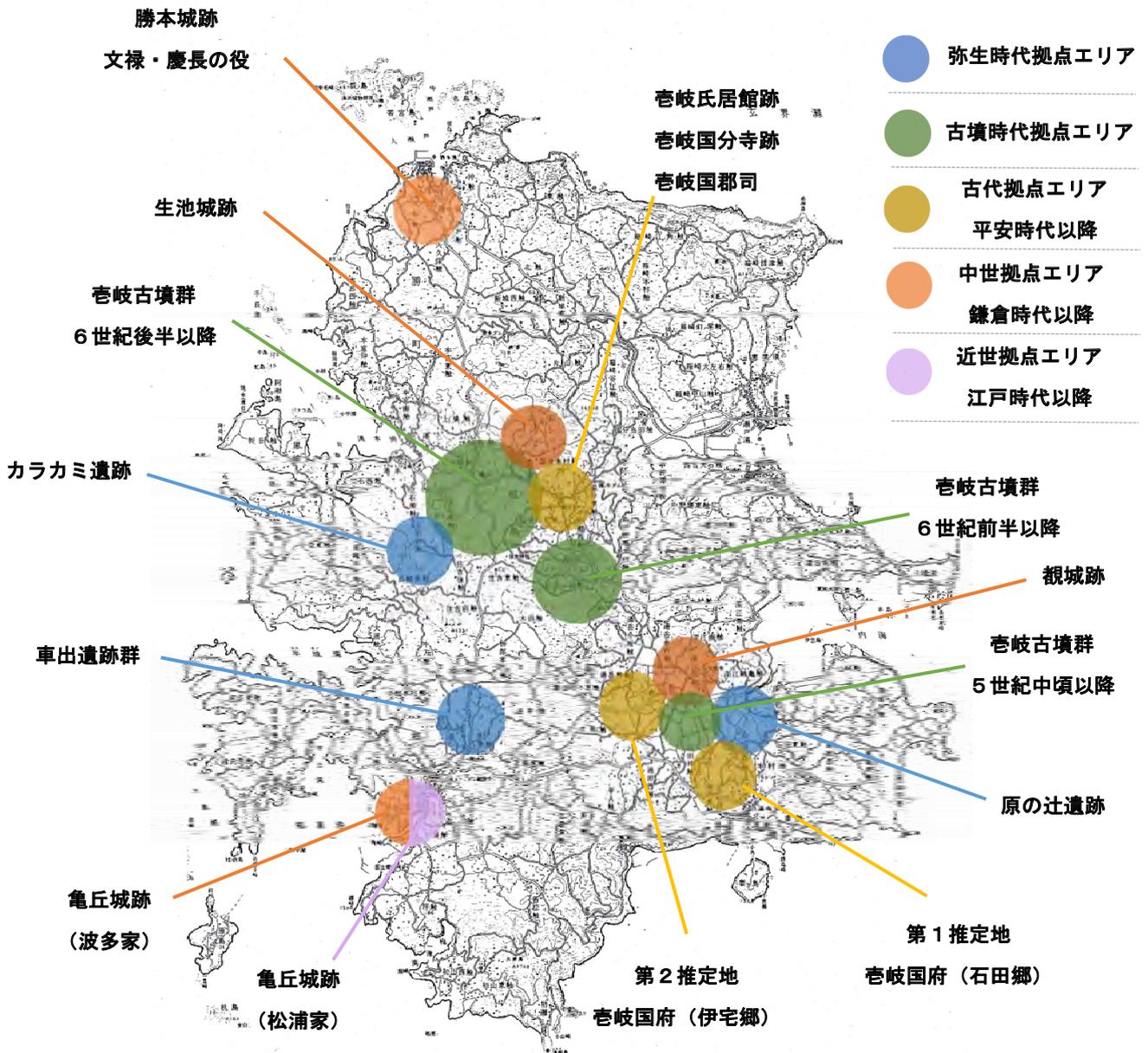
国片主神社付近には“こおり坂”、“こおり畑”、“こおり井”などの地名や名称が残っており、律令時代に郡司の郡家があったことを連想させる。

壱岐氏居館跡の西側には、双六古墳をはじめとした巨石古墳が100基以上築造されていることから壱岐氏の権力が絶大であったことがわかる。



図版 20 郡城跡に残る壕跡

■ 壱岐島内における拠点の時期別変遷



肥前国（佐賀平野）所在の官衙関連遺構と弥生時代拠点集落について

佐賀県文化・観光局文化課
文化財保護室 細川 金也

1. 佐賀平野の地理的環境と地域的区分

佐賀県は、九州の北西部に位置する。現在の行政区分で言えば、北と東を福岡県、西側を長崎県と接する。県の中央域には標高約 800 ～ 1,000 m 程度の山塊及び山塊から派生する支嶺がつづら状に連なる脊振山地が位置し、佐賀県域を玄界灘沿岸地域と有明海側に分ける。福岡県との境界に「筑紫次郎」と呼ばれる筑後川が有明海に向かって流れ、その川の両側には肥沃な筑紫平野が広がる。佐賀平野東部地域では、脊振山麓から派生する中小河川が筑後川に流れ込み、佐賀市域より西側の地域では、河川が直接有明海に注ぐ。（図 1）

弥生時代の遺跡の立地に関しては、佐賀平野のボーリングデータから復元された弥生時代の旧地形をもとに弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺跡の分布を重ね合わせた結果、佐賀平野に分布する該期の集落は、有明海に流れ込む河川により山麓部と低平地部の遺跡が有機的に繋がる 4 つの流域圏で中原地域（寒水川・切通川流域）、神埼地域（田手川・城原川流域）、佐賀地域（巨瀬川・嘉瀬川流域）、小城地域（祇園川流域）の 4 地域を抽出した。（蒲原 1994）この有明海に流れ込む中・小河川を媒介として山麓部と低平地部の遺跡をひとつの流域圏として考える説は、佐賀平野の遺跡を説明するうえで、極めて有効であることから、今回の 4 つの対象地域に鳥栖地域（大木川・秋光川、安良川流域）を加え説明する。

2. 吉野ヶ里遺跡の変遷と集落構造（図 3）

佐賀平野にある最も著名な遺跡として、特別史跡吉野ヶ里遺跡がある。この吉野ヶ里遺跡は、昭和 61 年（1986）年の工業団地造成に伴う調査開始以来、平成元年の保存決定後に実施した遺跡の内容確認の調査を含め平成 25 年まで約 28 年間調査を継続してきた。そして約 10 年間の空白期間を経て、令和 4 年（2022）年の春、調査を再開したところである。

吉野ヶ里遺跡は、弥生時代の前期前半から集落が形成される。吉野ヶ里丘陵の先端に丘陵を横切る条濠が作られ、吉野ヶ里丘陵に小規模な集落域が形成され始める。前期後半になると、吉野ヶ里丘陵の南部を取り囲む約 2 ha の環濠が形成される。

弥生時代中期には、前期につくられた環濠が埋没し、その北側の一部を利用し、環濠が再掘削され、集落域を丘陵部から裾部に向け拡大する。また、丘陵南端部には、細形銅剣を副葬した弥生時代中期初頭の甕棺墓のほか、青銅器の鑄造に関連した遺構が存在する。弥生時代中期前半には、吉野ヶ里丘陵全体に集落域と墓地が広がる。特に、この時期には巨大な北墳丘墓が造営され、有力な首長が数世代にわたって埋葬されていた。

中期後半に入ると、甕棺墓群は引き続き作られるが、集落はその範囲を狭めていく。北墳丘墓への有力首長の埋葬が終了し、谷を挟んだ西側の丘陵から前漢時代の舶載鏡を副葬する甕棺墓が現れる。

弥生時代後期前半には、集落の中心が遺跡の南部から南内郭がある中央部に移動する。吉野ヶ里丘陵の西側斜面を最大幅 7 m にもなる大規模な環濠（外環濠）が掘削されるようになるが、

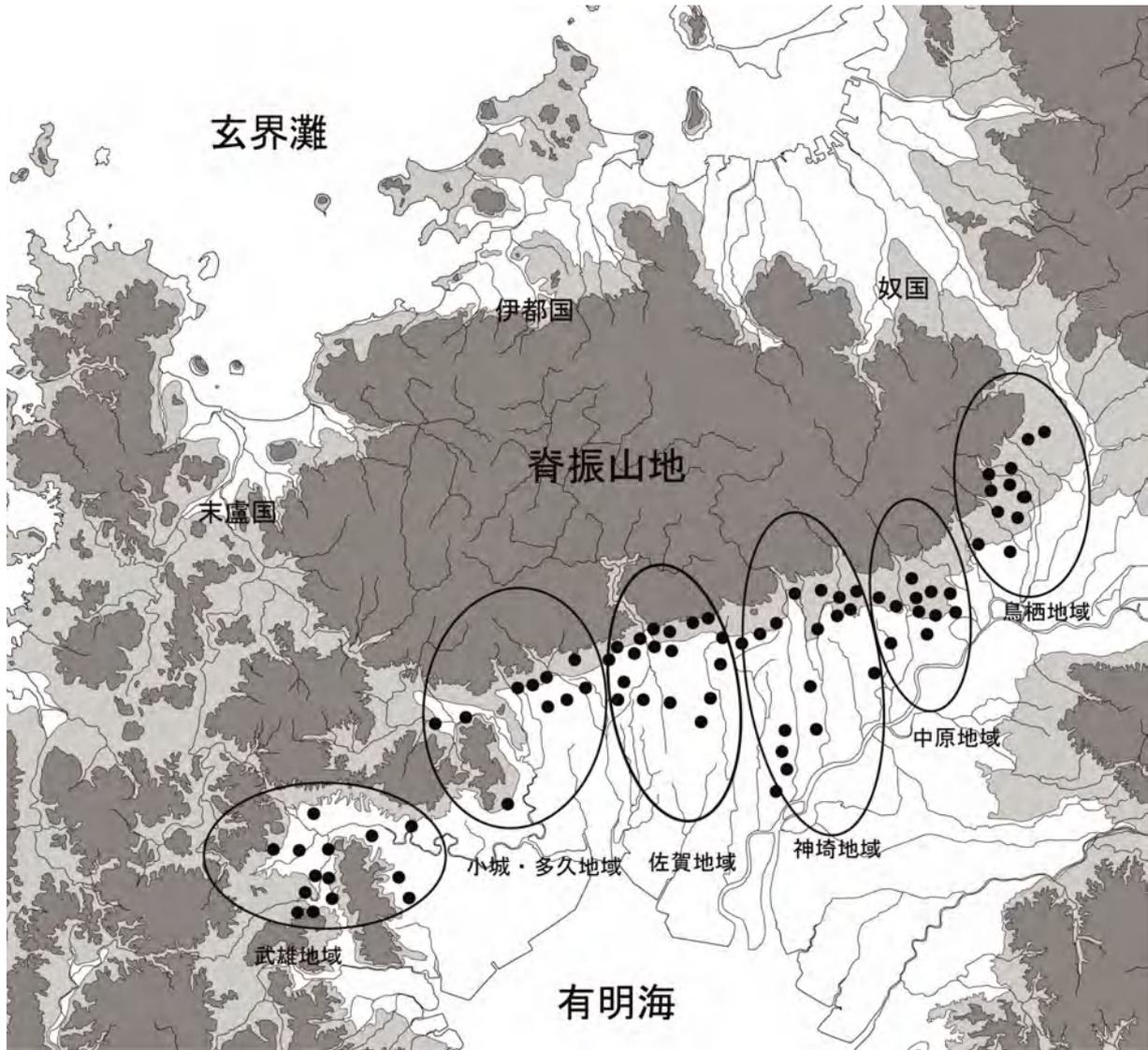


図1 佐賀平野の位置と主な弥生時代の遺跡分布

この段階では、集落全域を巡らない。この外環濠からは、巴形銅器の鋳型も発見されていることから、青銅器生産がこの時期まで断続的であるが続いていたことがわかる。

なお、弥生時代中期に最盛期を迎えた甕棺墓を中心とする墓地群は、後期に入るとその数を減らし、墓域そのものも縮小する。

弥生時代後期後半には、丘陵の西側を巡る外環濠が北へ延長され、北墳丘墓を取り巻くように作られる。遺跡中央部では、外環濠の内部を溝で区画する南内郭が成立する。この南内郭の西側の平坦地に高床倉庫群が建てられるようになる。この時期以降、丘陵部では明確な墓地が認められない。

弥生時代終末期に入ると、遺跡中央部の南内郭では、濠が再掘削され、範囲が拡張される。この南内郭の濠の一部は半円形または方形に張り出され、その内側に物見櫓とみられる掘立柱建物が複数建てられる。南内郭の北東には、北内郭は、二重の環濠により構成される北内郭が作られる。その平面形は、ちょうどアルファベットの「A」字形をしている。北内郭をAの向きで説明すると両側辺の中央を半円形に張り出し、下部にあたる基部の両側を方形に張り出す。

この北内郭に伴う建物のうち、祭殿とみられる3×3間の総柱建物跡は、柱の太さが50cm

にもなる柱を用いて建てられている。建物の一辺がそれぞれ 12.3 m、12.7 m と弥生時代の掘立柱建物跡としても極めて大型のものである。

この大型建物と北にある墳丘墓、南の祭壇と呼ばれる人工の盛土遺構は、一直線となり、有明海を挟んだ南側に位置する雲仙普賢岳^{うんぜんふげん}の方向と一致することから、遺跡を通す軸線が意識されていたことが分かる。(七田 2017) (図 2)

3. 佐賀平野の弥生時代拠点集落

吉野ヶ里遺跡を除く佐賀平野の拠点集落は、弥生時代全期間を通じて営まれることは少なく、拠点集落として認定できるかどうか難しい遺跡も存在するが、ここでは、弥生時代後期の拠点集落の可能性のある主な遺跡について触れる。(図 1)

鳥栖地域では、鳥栖スタジアムに近い鳥栖市藤木遺跡や同市蔵の上遺跡^{ふじのき}があげられる。藤木遺跡は、後期前半に延長 160 m を超える環濠が形成され、多量の土器とともに国内初出土となる銅釦^{どうこう}の鋳型や銅鏃などの鋳型 4 点を出土していることから、本地域の拠点的な集落の一つとみられる。また、蔵の上遺跡は、環濠を持たないものの、弥生時代後期前半から末にかけての竪穴建物跡 239 棟、掘立柱建物跡 59 棟を検出した大規模な集落である。

中原地域は、現在のみやき町に相当する範囲にあたる。みやき町町南遺跡は、弥生時代前期末に掘削された環濠が中期初頭に埋没後、後期に入り再度掘削された環濠集落である。中原遺跡^{はらこがさんぼんだに}の西側に位置する原古賀三本谷遺跡は、二重の濠で囲まれた二つの区画があり、全体の形状を知ることのできる二重環濠 (SD001・SD003) の内濠には、吉野ヶ里遺跡と同様な半円形の突出部を持つ。なお、環濠内部の土坑から連弧文昭明鏡片^{れんこもんしょうめい}が出土している。

神埼地域 (田手川・城原川流域) には吉野ヶ里遺跡以外にも拠点集落の候補として吉野ヶ里町松原遺跡や同町瀬ノ尾遺跡、同町夕ヶ里遺跡が挙げられる。

吉野ヶ里遺跡の東側の丘陵縁辺部に位置する松原遺跡や瀬ノ尾遺跡は弥生時代前期末から集落が営まれ、後期に最盛期を迎える。このうち、松原遺跡は後期後半以降、多重の濠を巡らす集落であることが判明している。特に弥生時代終末期には、南側に入口を持つ方形区画が 2ヶ所に確認されている。この 2ヶ所の方形区画は、その四隅を屈曲させ、張り出すが、内部には、明確な建物跡は認められない。

田手川上流域の右岸の扇状地に位置する夕ヶ里遺跡は、弥生時代後期終末期だけで 170 棟を超える竪穴建物が調査され畿内系を中心とする多数の外来系土器が出土している。

有明海側に面した筑後川下流付近の低平地に存在する諸富遺跡群^{もろどみ} (村中角、土師本村遺跡^{むらなかすみ}、三重櫟ノ木遺跡^{はしほんむら}等) は、後期中頃から出現し、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて営まれる。この遺跡群からは、東海系土器群を初めとして吉備系・讃岐系・畿内系・山陰系土器など各地域の外来系の土器が見つかり、有明海を通じた対外交流の窓口とみられている。(蒲原 2002)

佐賀市大和町惣座遺跡^{やまと そうざ}は、弥生時代後期後半から終末期にかけて二重に環濠を巡らした集落が確認されており、吉野ヶ里遺跡同様、濠の一部を半円形または方形に張り出す。この惣座遺跡は、嘉瀬川上流域の拠点集落と考えられる。なお、惣座遺跡周辺では、一回り小さな惣座南環濠や惣座東環濠、大和町岡裏遺跡など、複数の環濠集落が存在する (図 4)。

環濠を持たないものの、規模の大きな集落も一定数存在する。中期後半から後期前半にかけて営まれた巨勢川中流域にある村徳永遺跡^{こせ}は、竪穴建物 40 棟以上、掘立柱建物跡 70 棟以上

で構成される集落である。

小城地域（祇園川流域）では、青銅器鋳型と朝鮮半島系無文土器を出土した土生遺跡群が拠点集落として知られているが、この遺跡群は、中期初頭から中期末にかけて最盛期を迎え、後期に入ると衰退する。弥生時代後期に入ると、土生遺跡に代わり扇状地に近い小城市八ッ戸遺跡、同市天神軒遺跡、同市丁永遺跡付近に集落が出現する。

4. 肥前西海道と官衙関連遺構

佐賀平野を東西方向に貫く「肥前西海道」は空中写真の分析により佐賀市大和町の肥前国府から三養基郡みやき町付近まで約 17 km に渡って古代道路（北道）が直線的に築かれている。（図 6）（小松 1997）その敷設時期は、古代官道の延長線上にある吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区の調査から 7 世紀後半代以降につくられ、8 世紀を通じて維持されていたとみられる。なお、吉野ヶ里遺跡付近では、この古代官道の北 6 町に、伝路とみられる道路跡が、南には、延喜式に記された平安時代の道路跡（南路）が古代官道と並行しながら作られている。

肥前国庁跡（佐賀市大和町惣座）は、嘉瀬川左岸の標高 14m の自然堤防上に位置し、南北 104 m、東西 72 m の範囲を築地塀で囲む（高瀬 1995）。その内部の中心に最も大きな正殿を置き、正殿の背後には後殿を、前面には、東西に脇殿を配置する。正殿は、東西方向に長く四方に庇を持つ掘立柱建物で、建物の両脇に回廊がつけられている。この国庁跡は、何度かの建て替えや改修がみられ、使用された土器の年代から概ね 8 世紀中頃から 10 世紀代まで継続して使用されていたとみられる。また、国庁跡から北に位置する惣座遺跡や久池井 B 遺跡、久池井六本杉遺跡では、国庁跡に関連する掘立柱建物群が確認されており、倉庫や居宅としての性格が考えられている（図 4）

一方、吉野ヶ里遺跡周辺では、昭和 61 年度から開始された工業団地造成に伴う調査で、官衙に関連する道路跡や掘立柱建物群が多数発見され、郡衙や駅家に相当する施設の存在が想定された。志波屋四の坪地区では、丘陵部を東西方向に切り通す官道とその南北両側に展開する掘立柱建物跡 124 棟以上が確認され、これらの建物群は駅家にかかわる施設とみられる。また、独立丘陵上の小高い丘の上 2 か所に同様な掘立柱建物群がつくられ、それぞれ「館」跡（三の坪甲地区）、（三の坪乙地区）の可能性が指摘されている。

志波屋四の坪地区と丘陵を挟んだ東側には、奈良時代寺院である辛上廃寺跡が存在し、寺域を示す二重の区画溝の内部には、塔基壇のほか、金堂と考えられる四面庇を持つ 3 間×5 間の掘立柱建物跡や僧坊とみられる掘立柱建物跡が確認されている。（図 5）

吉野ヶ里遺跡は『肥前風土記』に記された神埼郡に属するが、郡衙に相当する施設は現在のところ、認められていない。吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区の西側水田部分にある志波屋二の坪遺跡が、郡衙の候補となっている。

5. まとめ

有明海に面した弥生時代の拠点集落と国庁などの官衙関連遺構が重なる地点は、佐賀市惣座遺跡と肥前国庁跡、吉野ヶ里遺跡と神埼郡の官衙関連施設、鳥栖市蔵の上遺跡と比較的少ない。これは、奈良時代の官衙関連施設が政治的意図を持つ肥前西海道に沿って作られたことによる。ただ、肥前国庁跡が存在する惣座遺跡は、佐賀市域の弥生時代後期の拠点集落であり、奈良・平安時代だけでなく、中世まで佐賀平野の拠点であったことが文献や周囲の発掘調査状況

から判明している。

吉野ヶ里遺跡もまた、奈良時代に駅家や郡衙、寺院跡がまとまって置かれ、鎌倉時代に遺跡の南端に西大寺系の東妙寺と妙法寺が存在したことからも、この地域が「肥前風土記」に記された神埼郡の中心域として重要視されており、両遺跡とも佐賀平野の地域的拠点として認識され続けてきたことがわかる。

【参考・引用文献】

蒲原宏行 1994 「古墳時代初頭前後の佐賀平野―集落の変貌とその画期―」『日本と世界の考古学―現代考古学の展開―』

小松 譲 1997 「佐賀平野の古代道路」『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』佐賀考古談話会

蒲原宏行 2002 「三世紀の北部九州―佐賀平野・志波屋遺跡群を中心に―」『シンポジウム記録3 三世紀のクニグニ・古代の生産と工房』考古学協会

森田孝志 1995 「吉野ヶ里と弥生のクニグニ」『風土記の考古学5』同成社

高瀬哲郎 1995 「肥前国府」『風土記の考古学5』同成社

七田忠昭 2017 『邪馬台国時代のクニの都・吉野ヶ里遺跡』新泉社

細川金也 2022 「特別史跡吉野ヶ里遺跡 佐賀県神埼市・吉野ヶ里町」『文化遺産の世界 コラム集』

この他、佐賀県・佐賀県教育委員会刊行の文化財調査報告書を参照したが、出典が多岐に及ぶため、署名は割愛した。

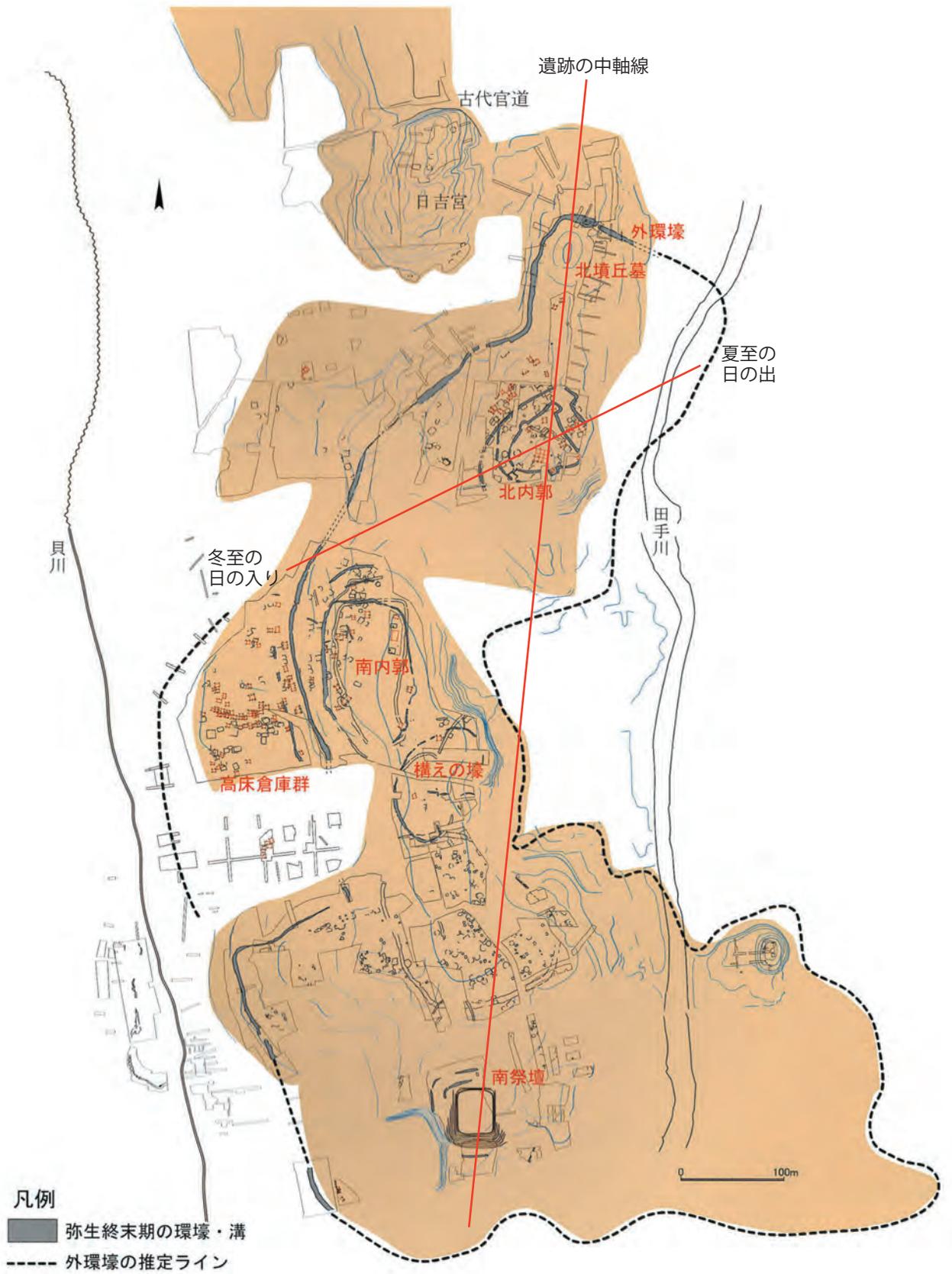


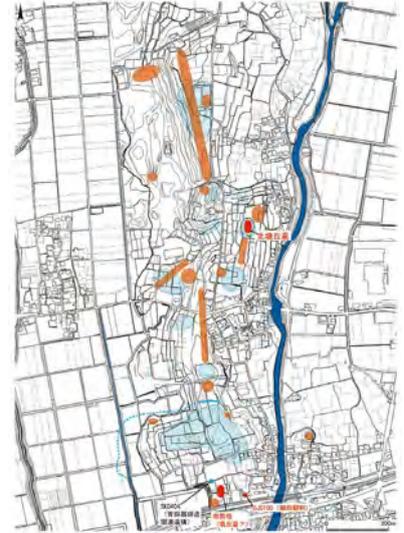
図2 吉野ヶ里遺跡中心部の弥生時代集落遺構の分布図



1 弥生時代前期初頭～前半



2 弥生時代前期後半～末



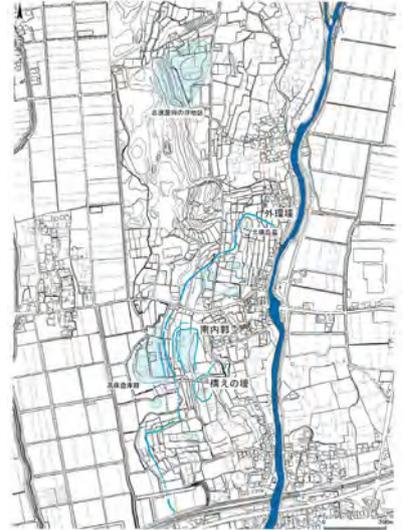
3 弥生時代中期初頭～前半



4 弥生時代中期後半～末



5 弥生時代後期前半



6 弥生時代後期後半



7 弥生時代終末期



8 古墳時代初頭

凡例
 は墓地
 は集落

図3 吉野ヶ里遺跡集落及び墓地の変遷図

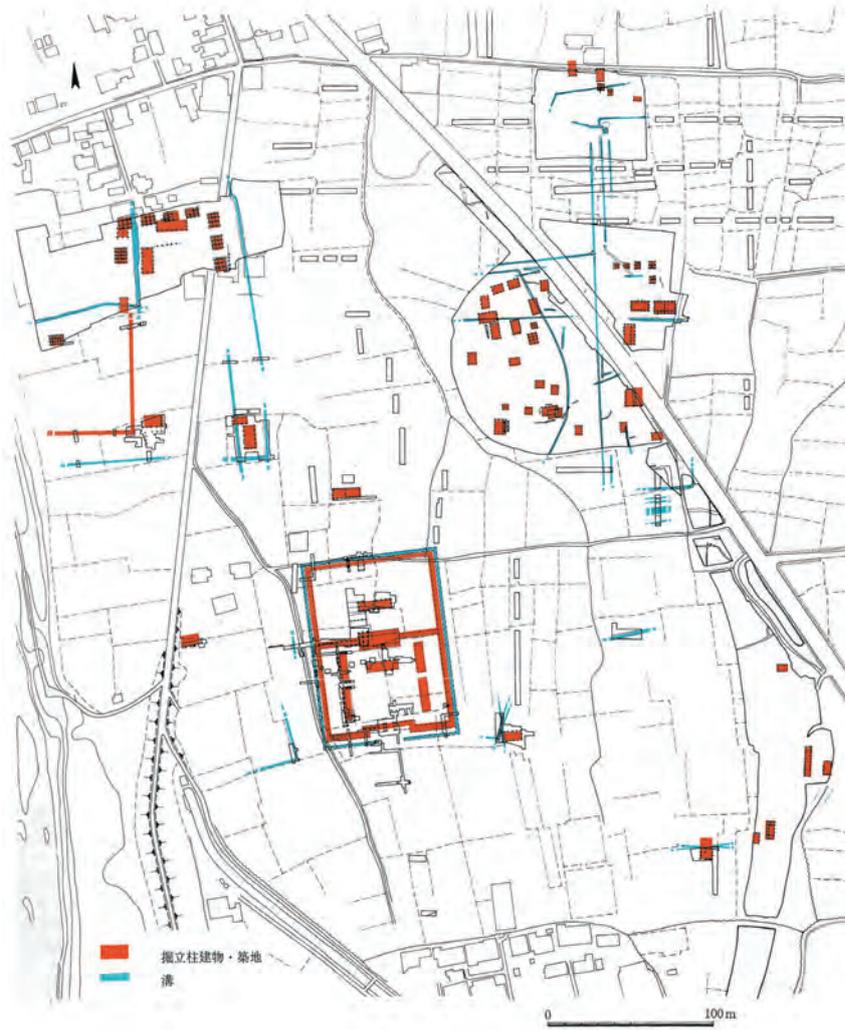


図4 佐賀市惣座遺跡の環濠集落（上）と肥前国庁跡周辺の遺跡分布図

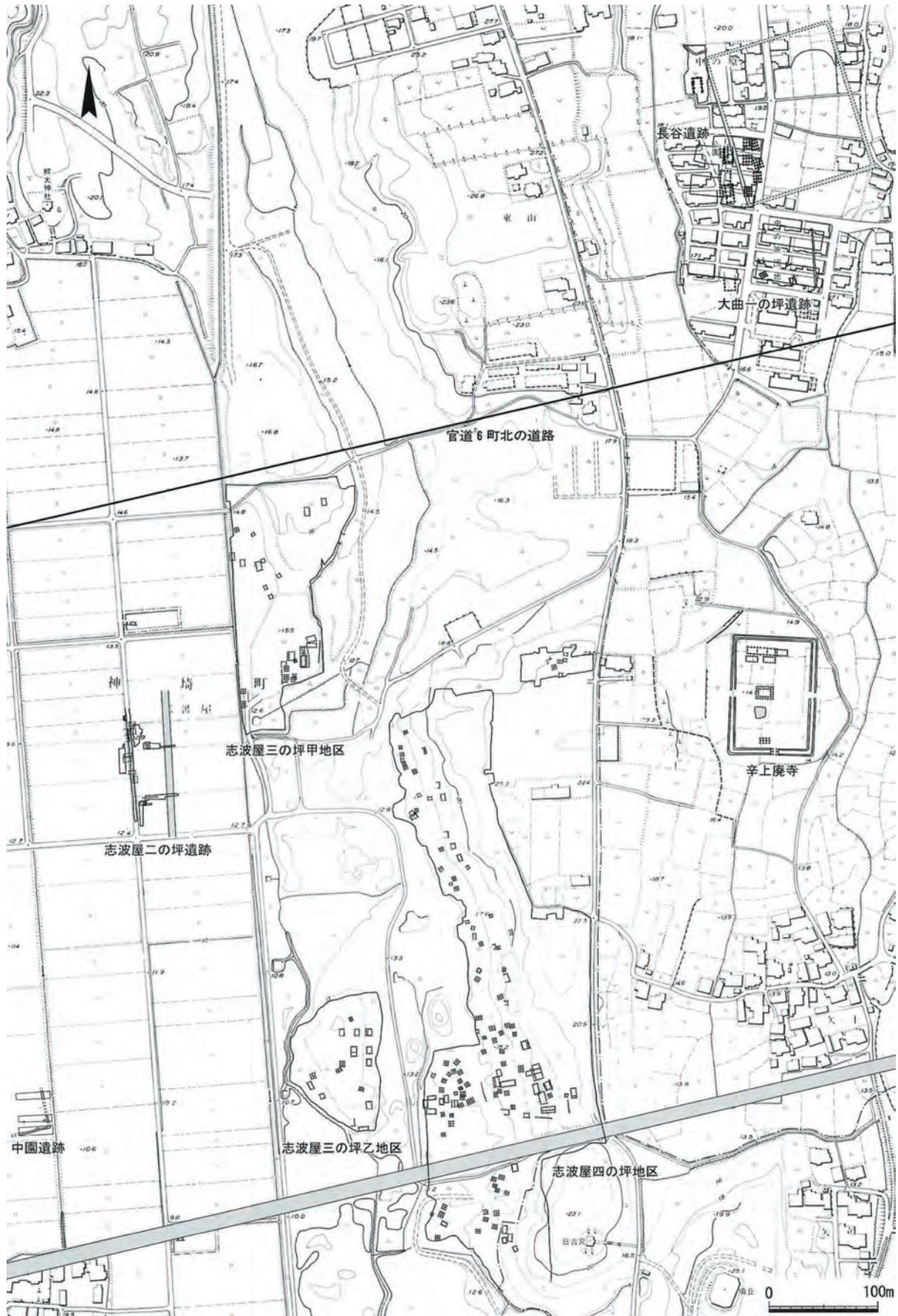


図5 吉野ヶ里遺跡周辺 奈良時代官衙関連遺跡位置図

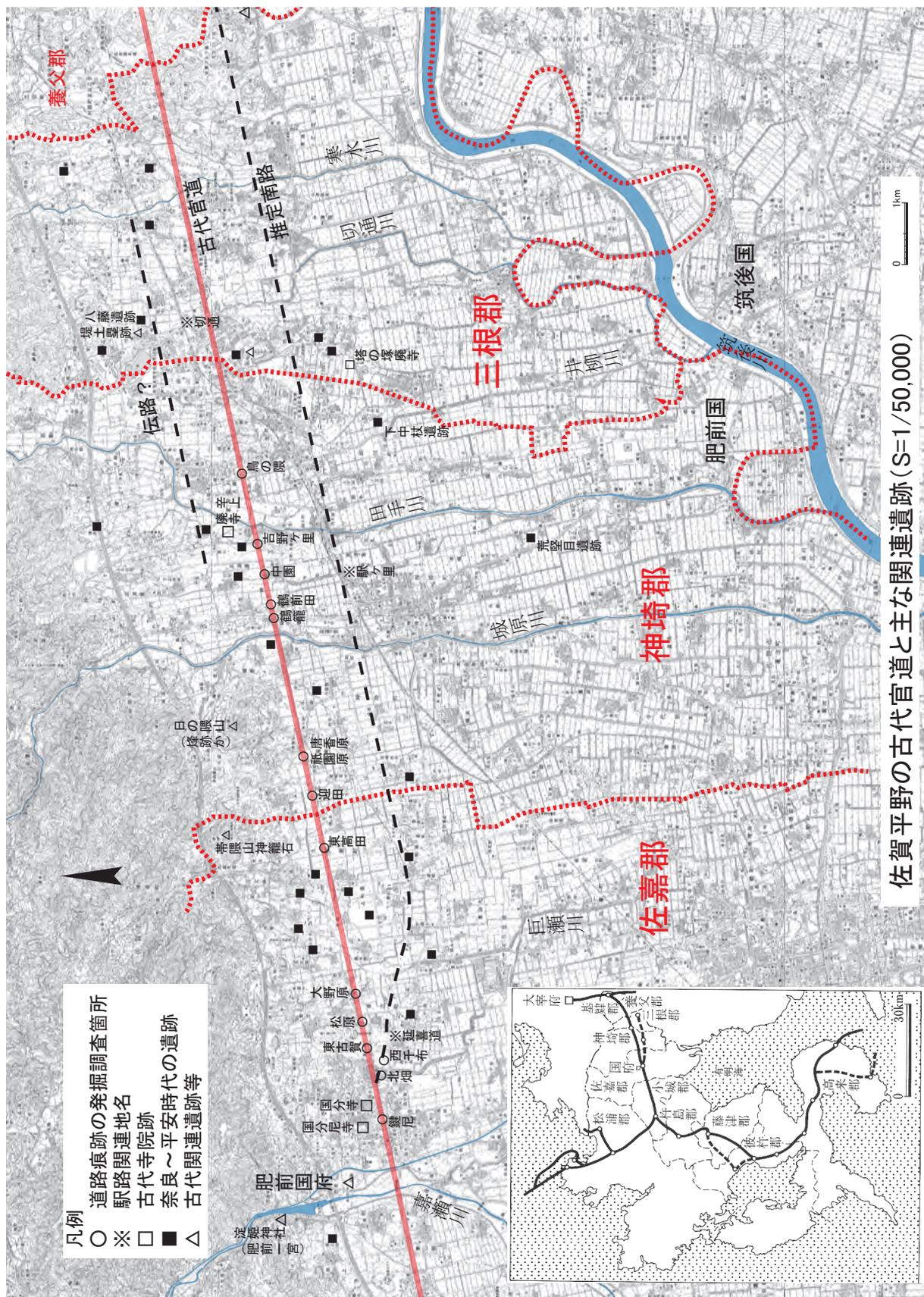


図6 佐賀平野の古代官道と主な関連遺跡

因幡国府・伯耆国府の地理的環境と弥生時代の拠点集落

鳥取県立むきばんだ史跡公園
河合 章行

はじめに

現在の鳥取県の県域は、^{いなば}因幡国及び^{ほうき}伯耆国の領域に該当し、因幡国の領域を「東部」、伯耆国の領域を「中・西部」と区分している。北は日本海に面し、東は兵庫県（^{たじま}但馬国・^{はりま}播磨国）、南は岡山県（^{みまさか}美作国・^{びつちゆう}備中国）、西は島根県（^{いずも}出雲国）と広島県（^{びんご}備後国）と接している。それぞれの県境（国境）には、^{おおぎのせん}扇ノ山（1310m）、^{ひょうのせん}氷ノ山（1510m）、^{なぎさん}那岐山（1255m）、^{ひるぜん}蒜山（上蒜山 1202m）、^{どうごやま}道後山（1268m）がそびえ立ち、周辺は急峻な山岳地帯をなしている。

鳥取県の東部・中部・西部には、それぞれ、これらの山岳地帯を源流とする一級河川の^{せんだい}千代川、天神川、日野川が中国山地から日本海に向けて流下し、それらの河口付近には平野や砂丘地形などを形成している。これらの平野や砂丘地形が現状に近づくのは近代になってからであり、近世に活発に行われた^{かな}鉄穴流しによって、大河川周辺の海岸地形は大きく変容した。また、弥生時代には日本海沿岸に数多く点在した^{せきこ}潟湖も、河川による埋積作用や後世の干拓等によって、その多くが埋没して平野の一部をなすなど、弥生時代から古代にかけての地理的環境と現代の地理的環境では沿岸部や平野周辺を中心に大きな差異が生じている。

本稿では、それらの事実を踏まえた上で、因幡国府、伯耆国府の地理的環境を概観するとともに、弥生時代の拠点集落の分布と照らし合わせることによって、国府が置かれた背景を検討していきたい。

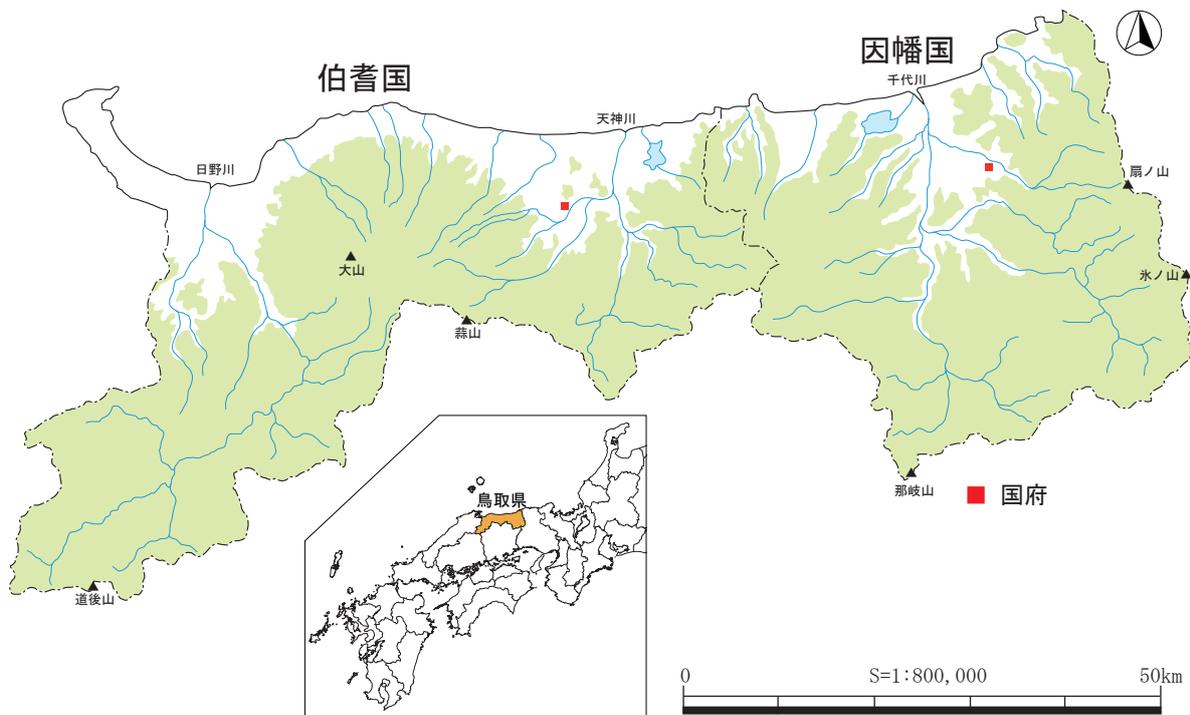


図1 因幡国・伯耆国の位置

1 国府の位置と地理的環境

因幡国・伯耆国が属する山陰は、中国山地の脊梁部が日本海側に偏在した位置に横たわっているため、山陽側に比べて谷間が狭小で傾斜が急な山地の多い地形となっている。また、伯耆国には中国地方最高峰の大山（剣ヶ峰 1729m・弥山 1709m）がそびえ立ち、伯耆国の大部分が大山起源の火山灰性丘陵となっている。一方、因幡国・伯耆国エリアの平野は、前述した千代川、天神川、日野川の下流を中心に形成されているが、概して規模は小さく、中・近世に至るまでは不安定な低湿地のエリアが多かったと考えられている。また、弥生時代から中世にかけて、海岸に発達した砂丘によって日本海と隔絶された「潟湖（ラグーン）」が海岸線沿いに数多く点在していた（島根県古代文化センター 2015）。このように、因幡国・伯耆国は、大規模な官衙施設を設置するには、地形的に制約の多い地理的環境といえる。

古代の因幡国及び伯耆国の国府所在地は、主に条里地割の復元や地名などの検討をはじめとする歴史地理学の研究から、因幡国府が鳥取市の法美平野（因幡国法美郡）、伯耆国府が倉吉市の国府川左岸（伯耆国久米郡）に推定されていた。その後、昭和 40 年代以降の発掘調査によってそれぞれ国府関連遺構が確認され、考古学的にも所在地が裏付けられている。

(1) 因幡国府 (図 2)

奈良の大和三山（天香具山・畝傍山・耳成山）に擬せられて因幡三山と呼ばれる甑山（100m）・今木山（89m）・面影山（100m）に囲まれた法美平野に所在する。法美平野は、南北を丘陵性の山地で区画され、平野の北側には千代川の支流で扇ノ山・河合谷高原を源流とする袋川が西流している。因幡国の中では、比較的古い段階に安定した平野の一つで、周辺の現標高は 15～30m 程度である。

条里地割の復原等から 6 町四方の国府域が推定されており（藤岡 1970、中林 1997 ほか）、このうち想定される国府域の北西側で因幡国府の正殿・後殿と推定される中心建物群が発見されている（鳥取県教育委員会 1973～1980）。ただし、脇殿や門が確認されていないこと、明確な瓦葺きや礎石建物が確認されていないことから、政庁として特定するのに課題も提示されている（坂本 2018b）。また、これらの遺構は平安時代から鎌倉時代の遺構と考えられ、奈良時代の遺構は下層にある可能性や国府域内の別の場所にある可能性（中林 1997）、八上郡衙とされる万代寺遺跡に前身国府が存在した可能性（中原 2018）が指摘されている（註 1）。また、周辺には、因幡国分寺跡や因幡国分尼寺推定地が存在している。

(2) 伯耆国府 (図 3)

大山（1,729 m）が形成した火山灰性丘陵の一つである久米ヶ原丘陵の東端付近に所在する。国府に係る意味で「伯耆三山」という呼称はない（註 2）が、国府の北に四王寺山（172m）、南西に高城山（214m）、東に打吹山（204m）を臨み、三山に囲まれた位置に立地する。四王寺山と久米ヶ原丘陵は連続しておらず、由良川支流の北条川によって隔てられている。また、久米ヶ原丘陵の南から東側にかけては、天神川の支流で大山・地藏峠付近を源流とする国府川が北東方向へ流下しており、開析谷を形成している。伯耆国府が造営されたのは標高 40～50m の丘陵上で、南側の開析谷との比高差は 15～25m 程度ある。

発掘調査の結果、この丘陵上には、国司が儀式や政務を行う国府のほか、法華寺畑遺跡・不入岡遺跡・伯耆国分寺跡をはじめ国府に関連する遺跡が集中する様相が明らかになっている。伯耆国府は、70 m 四方の築地塀に囲まれた中に、正殿・後殿・脇殿などが広場を囲み「コ」の字型に規則的に配置され、8 世紀中葉から 13 世紀にかけての変遷が認められる。因幡国府

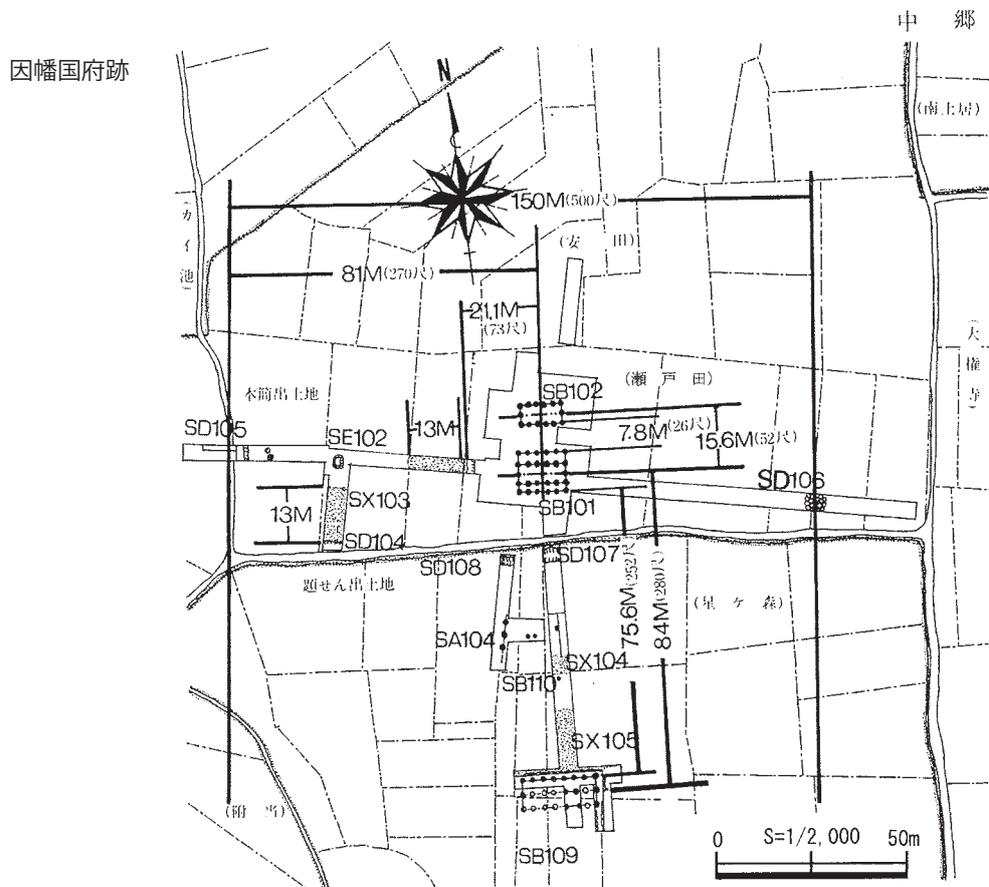
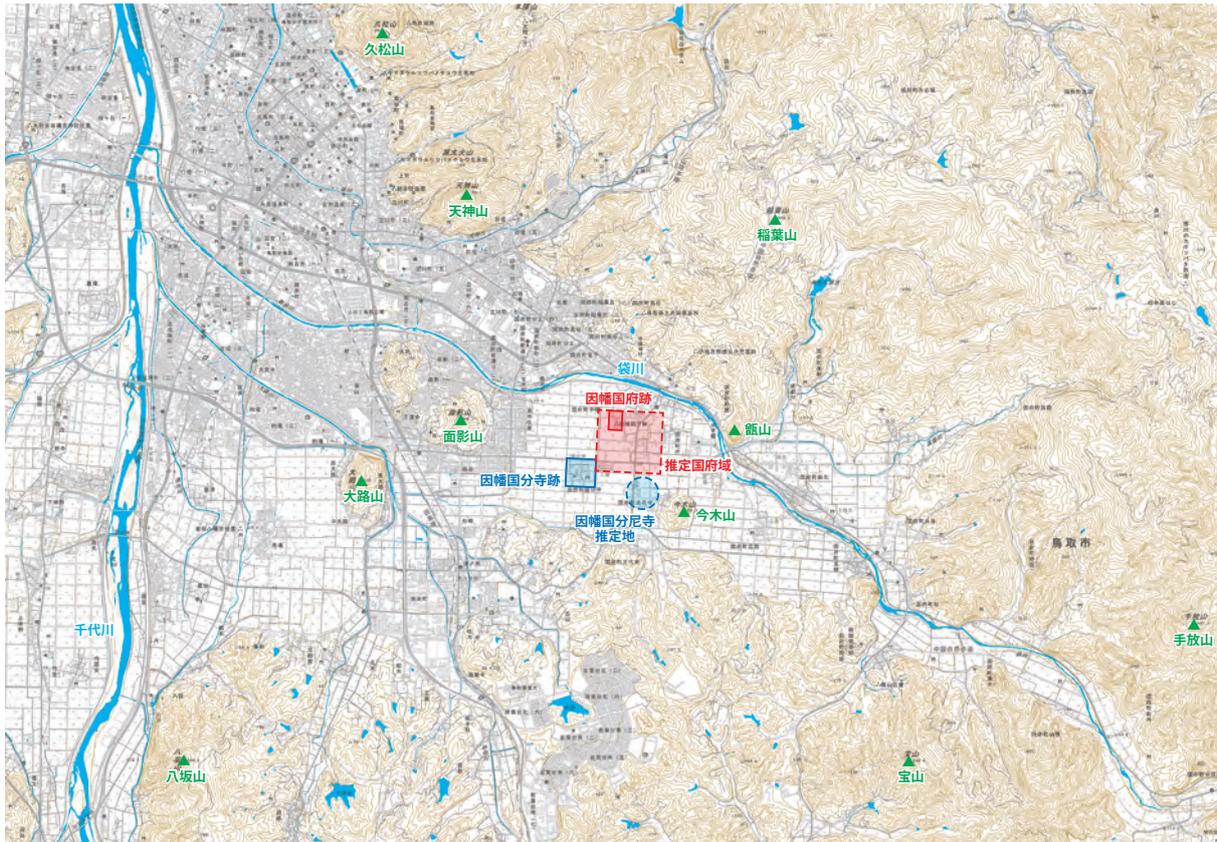


図2 因幡国府の地理的環境（遺構配置図は坂本 2018b より転載）

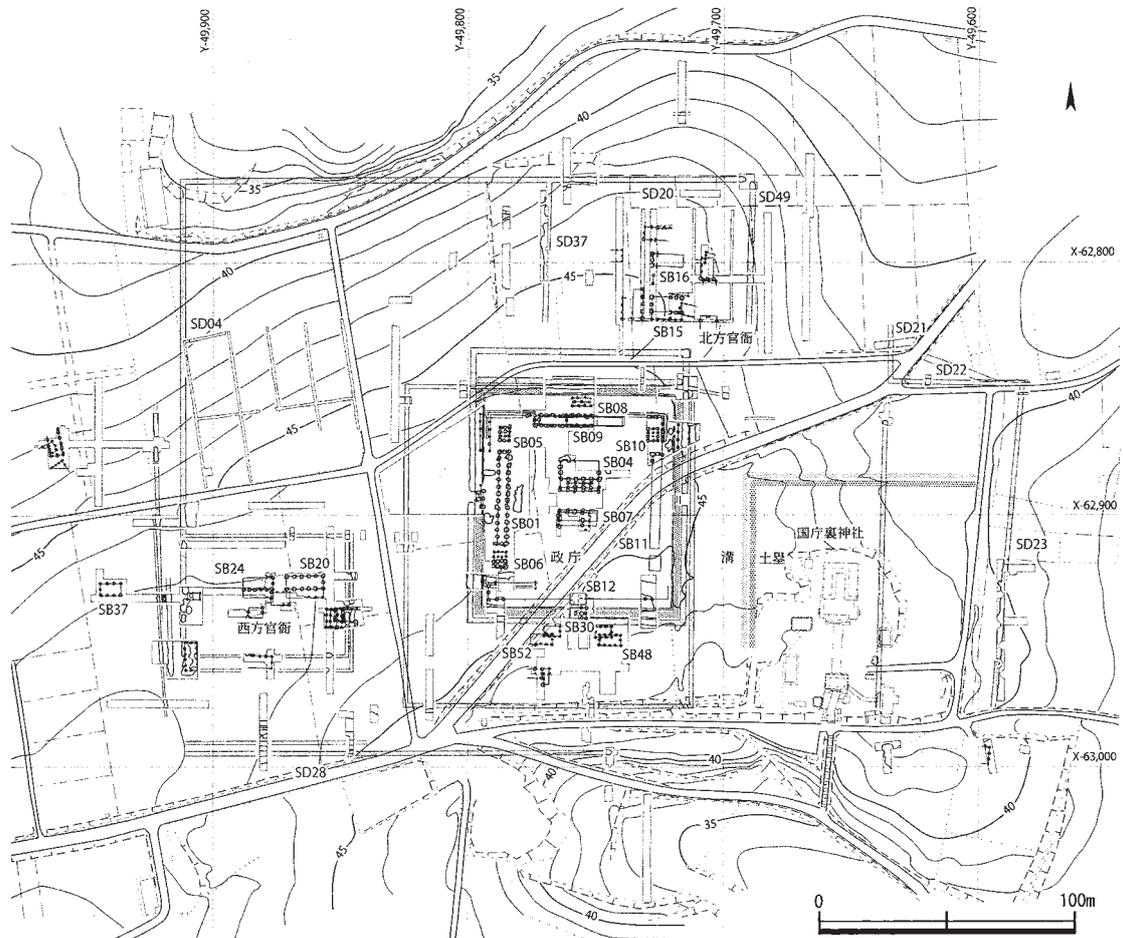
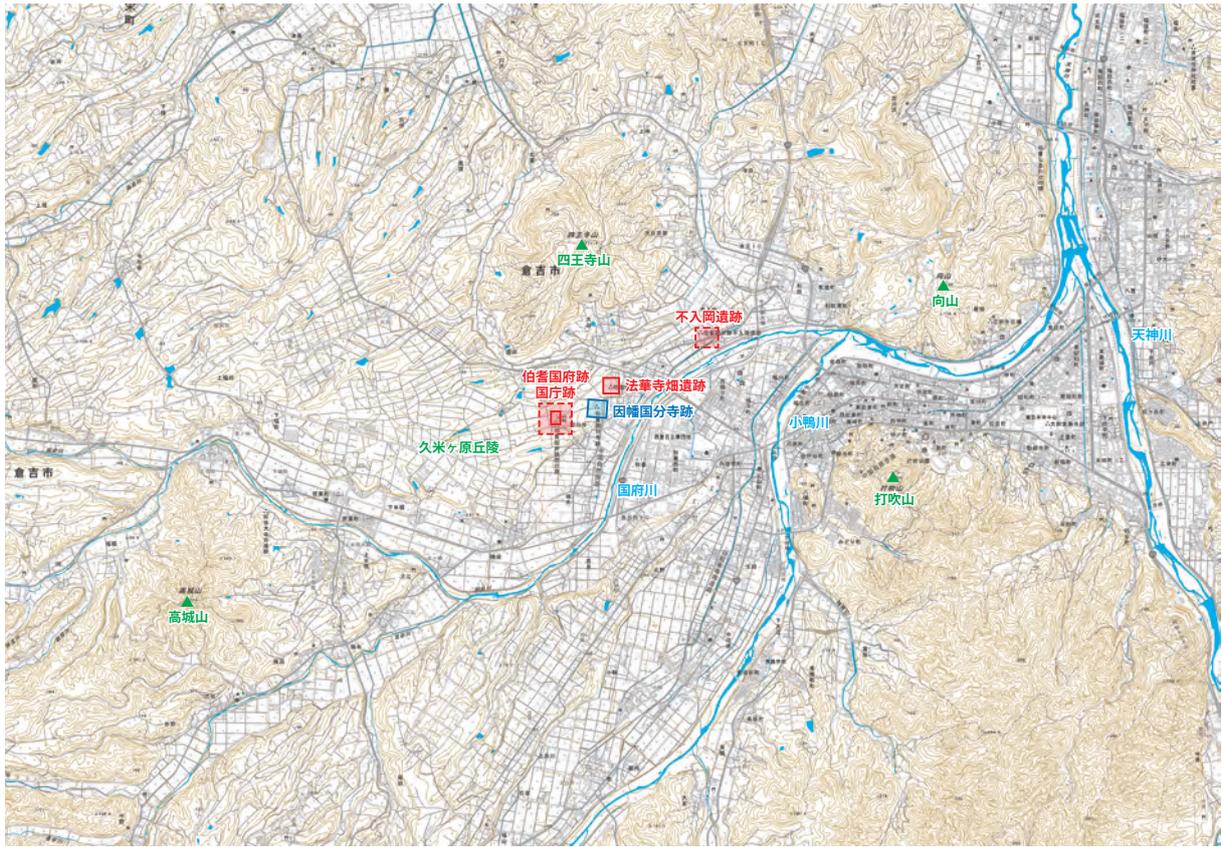


図3 伯耆国府の地理的環境（遺構配置図は岡平 2018 より転載）

周辺に条里地割が認められたのに対して、伯耆国府周辺では碁盤目状の統一的な配置・地割は認められない。小規模な谷筋が複雑に入り込む丘陵という地形の制約を受けて、官衙等が配置されたことが窺える。なお、北東に位置する不入岡遺跡に、8世紀前半頃に前身国庁が置かれたことが指摘されている。

(3) 小結

『続日本紀』の和銅元(708)年2月の条に記された平城遷都の詔文の中に「方今平城之地、四禽叶図、三山作鎮、亀笈並従(正にいま平城の地は、四禽が陰陽の吉相に配され、3つの山が鎮護のはたらきをなし、亀甲や筮竹による占いにも適っている)」(註3)とある。因幡国府・伯耆国府の位置は、それぞれ甕山・今木山・面影山、又は四王寺山・高城山・打吹山の三山に囲まれており、山・平野・河川の位置を含めて「四神相応の地」として選定された可能性が高い。このように、山陰特有の様々な地形的制約の中で、当時の国府地選定の条件に合致する最適地が選ばれたと想定される。

3 弥生時代の拠点集落と地理的環境

鳥取県では、1990～2010年代の大規模な開発事業によって、弥生時代の拠点集落の調査が数多く実施されてきた。ここでは、それらの地理的環境について整理しておきたい。

(1) 鳥取県東部(因幡)

ア 秋里遺跡

千代川の河口付近に位置し、千代川が形成した標高0.7～1.5mの自然堤防上に立地する。弥生時代から中世に至る複合遺跡だが、主体を占めるのは弥生時代後期である。遺構は、平地建物をはじめ布掘建物、礎板を持つ掘立柱建物、土坑、溝状遺構、井戸などが検出されている。遺物は、スタンプ文をはじめ北近畿系の外来系土器を含む大量の土器のほか、土製品、管玉製作資料、舶載鏡が出土している。

イ 西大路土居遺跡

因幡三山の一つ面影山の西方にある独立丘陵である大路山(105m)の北西裾部、標高5～11mに立地する。弥生時代から中世に至る複合遺跡だが、主体を占めるのは弥生時代後期～古墳時代前期初頭である。遺構は、竪穴住居をはじめ掘立柱建物、段状遺構、土坑、溝状遺構などが検出されている。遺物は、弥生時代後期から終末期にかけての北近畿系の外来系土器が一定量を占める。弥生時代前期から継続的に営まれる基幹的な集落と考えられており、中細形銅剣も出土している。

ウ 岩吉遺跡

千代川下流西岸域に広がる平野に立地する。遺構は、水田施設や溝状遺構、掘立柱建物、土坑等が検出されている。遺物は、弥生時代中期中葉から終末期にかけての土器が多量に出土しており、近江系、畿内系、北近畿系、吉備系なども認められる。遺構は明らかになっていない部分が多いが、鳥取平野における拠点集落の一つとして認識されている。

エ 大桒遺跡

千代川支流の野坂川左岸の標高7～10mの扇状地及び標高12～14mの河岸段丘上に立地する。弥生時代中期から奈良時代の複合遺跡だが、弥生時代後期から終末期の竪穴住居のほか土壙墓や貯蔵穴などが検出されている。遺物も後期から終末期の土器や石器が主体を占めるが、自然流路内からは古墳時代から奈良時代の祭祀系遺物が多量に出土している。

オ ^{かつらみ} 桂見遺跡群

湖山池南東岸の標高 1 m 前後の低湿な水田地帯から標高 8 m 前後の丘陵裾部に立地する桂見遺跡、その東側に隣接する標高 1 ~ 2.5m 前後の水田地帯に立地する東桂見遺跡、桂見遺跡の西側にある標高 15 ~ 40m の丘陵上に立地する西桂見遺跡、桂見遺跡の南側にある標高約 35 ~ 40m の丘陵上に立地する桂見墳墓群を合わせて桂見遺跡群とされている。縄文時代から中世に至る複合遺跡だが、弥生時代後期から終末期の竪穴住居や土坑、大型墳丘墓が検出されているほか、土器、木製品、建築部材等が多数出土している。

カ ^{まつばらたなか} 松原田中遺跡

湖山池南西岸に位置し、湖山川右岸の沖積地に立地する。縄文時代晩期から近世に至る複合遺跡だが、弥生時代前期末から中期前葉、弥生時代中期中葉から後葉、弥生時代後期、古墳時代前期に盛期が認められる。弥生時代中期中葉から後葉にかけては、水田や居住域が検出されたほか多量の管玉製作資料が出土している。また、古墳時代前期の遺構面からは、地中梁を持つ布掘建物が多数検出されている。

キ ^{おつがせやしきまわり} 乙亥正屋敷廻遺跡

浜村川が形成した勝谷の西側に位置し、標高 6 ~ 35m の谷底平野から丘陵上に立地する。弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である。遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、段状遺構、貯蔵穴のほか導水施設が検出されている。遺物は、土器や木製品のほか八禽鏡や巴形銅器をはじめとする青銅器が出土している。

ク ^{あおやかみじち} 青谷上寺地遺跡

勝部川によって形成された三角州先端部の微高地上に立地する。現在は、青谷平野の一角を占めているが、ボーリング調査等の成果によって、遺跡に内湾が接していたことが明らかになっている。縄文時代から中世に至る複合遺跡だが、弥生時代中期中葉から後葉と弥生時代後期から古墳時代前期初頭に盛期が認められる。遺構は、平地建物、掘立柱建物のほか、矢板による護岸施設を有する溝状遺構などが検出されている。遺物は、土器、石器のほか、木製容器、骨角器、管玉製作資料、建築部材などが多量に出土している。

(2) 鳥取県中・西部 (伯耆)

ア ^{みなみだにおおやま} 南谷大山遺跡

東郷池北東の標高 68 ~ 90m の丘陵上に立地する。弥生時代後期前葉から古墳時代後期にかけての大規模な集落遺跡だが、弥生時代では後期前葉から終末期までの集落跡が検出されている。遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、貯蔵穴、段状遺構などが検出されている。遺物は、在地の土器を中心として多量の土器が出土しているほか、^{やりがんな} 鉋、^{ゆうたいふくろじょうてつぶ} 刀子、有帯袋状鉄斧などが出土している。

イ ^{なかお} 中尾遺跡

四王寺山の南東側山裾に位置する標高 30m 前後の丘陵上に立地する。後期旧石器時代から中世に至る複合遺跡であるが、弥生時代では前期後葉、中期、後期に平地住居や竪穴住居が認められる。住居に併設された貯蔵穴が検出されているほか、中期の竪穴住居からは国内最大級の鉄矛（全長 54.3cm、刃長 33.1cm、最大幅 5.4cm）や板状鉄斧（全長 27.5cm、刃幅 7.3cm）、鑄造鉄斧（全長 11cm、刃幅 8.7cm）がまとまって出土している。

ウ ^{かさみ} 笠見第 3 遺跡

大山北麓の標高 61 ~ 74m の丘陵上に立地する。縄文時代から平安時代までの複合遺跡だが、



■ 国府 ■ 官衙関連遺跡 ● 古代寺院 ■ 弥生時代集落遺跡 ● 弥生時代墳墓 - - - 古代山陰道（駅路）推定路 - - - 同（伝路）推定路
 1 伯耆国府跡 2 長者屋敷遺跡 3 坂中廃寺 4 大寺廃寺 5 上淀廃寺 6 長者原遺跡 7 斎尾廃寺 8 大高野遺跡 9 石塚廃寺 10 伯耆国分寺跡
 11 法華寺畑遺跡 12 不入岡遺跡 13 大御堂廃寺 14 大原廃寺 15 野方・弥陀ヶ平廃寺 16 石脇第3遺跡 17 因幡国府跡 18 青谷横木遺跡
 19 会下・郡家遺跡 20 上原遺跡群 21 寺内廃寺 22 吉岡大海廃寺 23 岩古遺跡 24 菖蒲廃寺 25 万代寺遺跡 26 因幡国分寺跡
 27 玉鉾ヶ坪廃寺 28 岡益廃寺 29 栃本廃寺 30 岩井廃寺 31 青木遺跡 32 越敷山遺跡群 33 父原墳墓群 34 日下墳墓群 35 妻木晩田遺跡
 36 茶畑遺跡群 37 梅田萱峯遺跡 38 湯坂1号墓 39 笠見第3遺跡 40 阿弥陀寺墳丘墓群 41 中尾遺跡 42 南谷大山遺跡 43 宮内遺跡群
 44 青谷上寺地遺跡 45 乙亥正屋敷廻遺跡 46 松原田中遺跡 47 松原1号墓 48 桂見遺跡群 49 大桝遺跡 50 秋里遺跡 51 西大路土居遺跡
 52 門上谷墳墓群 53 奈免羅・西の前遺跡 54 新井三嶋谷墳丘墓群

図4 因幡・伯耆国府と古代・弥生時代遺跡の分布

弥生時代としては、中期後葉から終末期までの遺構と遺物が多量に検出されている。特に、弥生時代後期後葉には竪穴住居 46 棟、掘立柱建物 4 棟、段状遺構 2 基、土坑 7 基、木棺墓 1 基が検出されており、最盛期を迎えている。また、後期前葉の玉作工房や後期中葉から後葉にかけての多数の鉄器が出土している。

エ 梅田萱峯遺跡

大山北麓の丘陵先端部に立地する。弥生時代から奈良時代に至る複合遺跡だが、弥生時代としては中期後葉から後期前葉までが中心をなす。竪穴住居のほか中期後葉段階の独立棟持柱を有する大型の掘立柱建物や方形貼石墓も検出されている。中期後葉には緑色凝灰岩製の管玉製作やサヌカイト製の石器製作が行われている。

オ 茶畑遺跡群

大山北麓のなだらかな台地や丘陵上の平坦面に立地する。弥生時代中期中葉から後葉の集落が営まれた茶畑六反田遺跡、中期後葉の独立棟持柱を有する大型の掘立柱建物が検出された茶畑第1遺跡、中期後葉の土壇墓群が検出された押平弘法堂遺跡、後期から古墳時代前期の竪穴住居、掘立柱建物等が検出された古御堂笹尾山遺跡などが認められる。茶畑六反田遺跡の北側には名和川水系の蛇の川によって形成された河岸段丘上に立地する茶畑山道遺跡も存在する。

カ 妻木晩田遺跡

大山北西に位置する側火山の一つである孝霊山（751.3m）から北西方向に派生する標高 90 ～ 150m の丘陵上に立地する。弥生時代中期から奈良時代に至る複合遺跡であるが、集落遺

跡としては弥生時代後期から古墳時代前期が中心である。後期前葉には洞ノ原地区で径 65m の範囲を囲む環壕や四隅突出型墳丘墓を含む墳丘墓群が形成され、その後、弥生時代後期後葉に最盛期を迎える。

キ 青木遺跡

越敷山（226.5m）の北西に位置する長者原台地の西端に位置する標高 40m の丘陵上に立地する。弥生時代中期から終末期にかけての拠点集落であるが、後期中葉から後葉にかけて最盛期を迎えている。遺物は、大量の土器をはじめ、石器、鉄器、土製品、玉類などが認められ、八禽鏡などの青銅鏡も出土している。

ク 越敷山遺跡群

越敷山を中心とする標高 200m 前後の越敷原台地上に立地する。弥生時代中期から古墳時代前期初頭に営まれた拠点集落で、竪穴住居や掘立柱建物、柵列、貯蔵穴、土壙墓、段状遺構等が検出されている。中期後葉頃に本格的な集落展開が認められ、後期中葉頃に最盛期を迎えている。

(3) 小結

これまで見てきたとおり、鳥取県東部における弥生時代の拠点集落は、沖積低地に立地するものが多数を占める。これは、丘陵部が基本的に痩せ尾根で、集落を形成するのに適さない地形であることが原因と考えられる。一方、鳥取県中・西部における弥生時代中期～終末期の拠点集落は、丘陵又は台地上に立地するものが多数を占める。これは、大山北麓に安定した平野部が乏しいことと、大山山麓のなだらかな丘陵頂部を利用して集落を形成することができたためと考えられる。

4 国府と弥生時代の拠点集落の地理的關係

因幡国府・伯耆国府と弥生時代の拠点集落の分布は図 4 に示したとおりであるが、因幡国府・伯耆国府の周辺に傑出した弥生時代の拠点集落は認められない。しかし、古代山陰道の（推定路）の経路や港（津）の位置と比較すると、弥生時代の拠点集落の分布との関係性が見えてくる。

古代山陰道の経路については、これまで歴史地理学の分野によって多くの検討がなされてきた（松尾 1972、中林 1997、島方ほか 2009、木本 2018 ほか）。また、近年では、古代山陰道と考えられる道路遺構の発掘調査事例も増加してきている。このうち、青谷上寺地遺跡では路線を規定する杭列を幅 7.8m で打ち、盛土中に敷葉・敷粗朶を敷設し、路面に小礫を敷き詰めるなど精緻なつくりの直線道路が検出されている（図 5）。また、道路遺構は確認されていないが、妻木晩田遺跡も古代山陰道（推定路）の経路上に位置しているほか、他の拠点集落についても、古代山陰道（推定路）の沿線や瀉湖・河川の沿岸などに分布している。

このように、弥生時代の拠点集落は、いずれも古代における交通の要衝に分布しており、弥生時代の段階で生まれたネットワークは古墳時代から古代の交通路の基底になるものと想定される。

5 まとめ

因幡国府・伯耆国府は、いずれも三山に囲まれた「四神相応の地」に設置されたと考えられる。もちろん、地理的環境だけでなく地域の有力な豪族とのつながりもあったと想定される（註 4）が、因幡国・伯耆国の事例では弥生時代の拠点集落との直接的なつながりを見出すことが

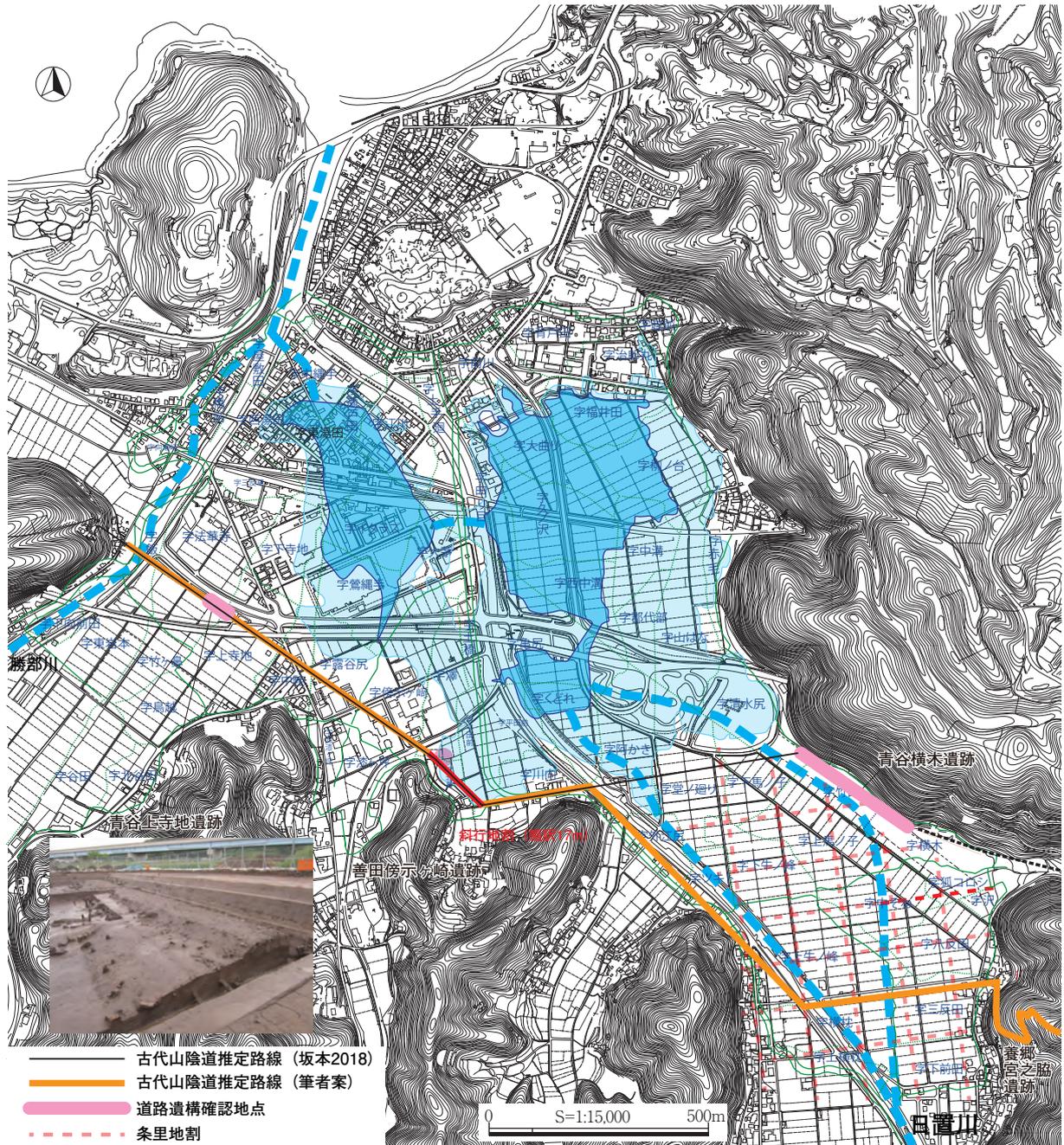


図5 青谷平野の古代山陰道推定路（坂本 2018a、家塚・村田編 2011 をもとに作成）

できなかった。しかし、弥生時代の拠点集落の分布は、古代山陰道（推定路）の経路や港（津）の分布と重複する部分も多く、弥生時代に育まれた拠点間をつなぐネットワークが古墳時代から古代にかけての交通網の基盤となった可能性は高い。

今回、発表する機会をいただき、弥生時代の拠点集落の分布や地理的環境を古代の国府や官道等と比較することによって、弥生時代の「見えざる道」を認識することができた。今後、拠点集落に限らず弥生時代の遺跡の分布を精査することによって、当時の交流や交易の実態について、より詳しく検討していきたいと思う。

本稿をなすに当たり、久保穰二郎氏、坂本嘉和氏には大変お世話になりました。末筆ながら、

記して感謝申し上げます。

【註】

- (1) 八上郡衙跡に比定される万代寺遺跡^{まんだいじ}で検出された中央官衙跡は約 100m 四方にも及び、国庁級の規模を有しているとされる。
- (2) 一般的に「伯耆三山」とは、大山^{みとくさん}、三徳山^{せんじょうざん}、船上山を指すことが多い。
- (3) 現代文は、中林（1997）を引用した。
- (4) 因幡国府の置かれた法美郡は伊福部氏^{いほきべ}の本拠地であり、伊福部氏と中央政権との繋がりの中で国府を誘致したという所見がある（久保 2016）。

【参考文献】

- 家塚英詞・村田泰輔編 2011 『青谷上寺地遺跡景観復原調査研究報告書』 鳥取県埋蔵文化財センター
- 石田敏紀 2011 『古代因幡の豪族と采女』 鳥取県史ブックレット 8 鳥取県
- 岡平拓也 2018 「伯耆国庁跡」『新鳥取県史（資料編）考古 3 飛鳥・奈良時代以降』 鳥取県
- 木本雅康 2018 『日本古代の駅路と伝路』 同成社古代史選書 29 同成社
- 久保穰二郎 2016 「大権寺遺跡の瓦について」『調査研究紀要 7』 鳥取県埋蔵文化財センター
- 久保穰二郎 2017 「土師百井廃寺の瓦について」『調査研究紀要 8』 鳥取県埋蔵文化財センター
- 久保穰二郎 2021 「因幡国分寺の瓦について」『調査研究紀要 12』 鳥取県埋蔵文化財センター
- 坂本嘉和 2018a 「第 7 章 総括 第 2 節 青谷平野における駅路の構造と特質」『青谷横木遺跡Ⅲ 自然科学分析・総括編』 鳥取県埋蔵文化財センター
- 坂本嘉和 2018b 「因幡国府跡」『新鳥取県史（資料編）考古 3 飛鳥・奈良時代以降』 鳥取県
- 島方洗一ほか 2009 『地図でみる西日本の古代—律令制下の陸海交通・条里・史跡』 平凡社
- 鳥根康古代文化センター 2015 『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』
- 鳥取県 2017 『新鳥取県史（資料編）考古 1 旧石器・縄文・弥生時代』
- 鳥取県 2019 『新鳥取県史（資料編）考古 2 古墳時代』
- 鳥取県 2018 『新鳥取県史（資料編）考古 3 飛鳥・奈良時代以降』
- 鳥取県教育委員会 1973～1980 『因幡国府跡発掘調査報告書 I～VIII』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013 『古代・中世・近世—社会と暮らし』 鳥取県の考古学 第 6 巻
- 中林保 1997 『因幡・伯耆の町と街道』 富士書店
- 中原 斉 2018 「第 1 章 時代概説 2 遺跡と遺物からみた古代の鳥取」『新鳥取県史（資料編）考古 3 飛鳥・奈良時代以降』 鳥取県
- 錦織勤 2013 『古代中世の因伯の交通』 鳥取県史ブックレット 12 鳥取県
- 藤岡謙二郎 1970 『国府』 吉川弘文館
- 松尾陽吉 1972 「律令国家の成立 交通制度」『鳥取県史』 第 1 巻 原始古代 鳥取県
- 村田泰輔 2012 「鳥取平野の形成過程と人間活動」『調査研究紀要 4』 鳥取県埋蔵文化財センター
- 淀江町 1985 『淀江町誌』
- ※弥生時代に関連する発掘調査報告書は割愛した。

備前国の地理的環境、拠点集落と国府の位置

岡山県教育庁文化財課

河合 忍

はじめに

飛鳥時代に官道が整備されると、山陽道が岡山平野部を東西に貫くように整備されていたことが明らかにされており、備前・備中の国府や国分寺・国分尼寺も岡山平野に置かれていたことが指摘されている（高橋 1982、足利 1985、木下 1988、中村 1994、大橋 2006、亀田 2021、草原 2022 など）。一方、この平野部においては、水稻農耕が伝わった弥生時代前期にいち早く弥生時代の拠点集落が形成されることも知られており、遺跡の分布状況からみて、海路もしくは河川を介した交流に重きを置いていた状況がうかがえ、土器様相の類似性からは拠点集落が相互に交流を保っていた様子も推察される。ただし、弥生時代に拠点集落相互を結んでいた「見えざる道」を考えるためには現状では情報が不足しており、その具体像に迫るためには、「官道」が整備された古代に至る変遷を整理し、総合的に判断することが必要である。

そこで本発表では、岡山平野部に拠点集落が形成される弥生時代から、官道が整備され、国府等が設置される飛鳥・奈良時代に至る過程をまとめ、その「見えざる道」がいつどのように形成されてきたのかについて考えてみたい。

1. 弥生時代前・中期

岡山県は古代には吉備と呼ばれ、九州と近畿を結ぶ瀬戸内海航路の要衝として栄えてきた(図 1・2)。また、岡山県には東から吉井川・旭川・高梁川の一級河川が中国山地に端を発して、県南部に流れ込み、肥沃な平野を形成しているが、分水嶺を挟んで北に所在する山陰地域とは、こうした河川沿いの低位部を介して繋がっており、遅くとも縄文時代後晩期には、密接な南北交流も行われていた。このように海と河川を利用する交通の結節点である岡山平野部は、交通の十字路として人々の往来が盛んであった。その状況下において、縄文時代晩期後半(弥生時代早期)には水田稲作につながる諸要素が受容されはじめ、弥生時代前期になると、岡山市津島遺跡では水路等を伴う本格的な水田が出現する(図 3)。津島遺跡周辺では、縄文時代後晩期に半田山の山裾付近に集落があったものが(岡山市津島岡大遺跡)、弥生時代前期になると南側の沖積地側に移動し(同津島遺跡)、より水を得やすい立地を指向している。なお、当時の地形を復元すると、瀬戸内海は現在よりもかなり内陸に入っていたと推測されているが(南編 2016 のほか、地理院地図や岡山県文化財情報 GISなどを参考)(図 4)、海への交通の便も良い場所に集落を選地していることも注目しておく必要があり、水田稲作、遠賀川式土器・大陸系磨製石器などに代表される新来の情報の受容や石器素材であるサヌカイト等の入手において、瀬戸内海に近い利便性も重視していた可能性が高い。さらに、瀬戸内市門田貝塚の食物遺存体の分析結果を参考にすると(宮路・中原・松井 2006)、アサリ、サザエ、エイ、サメ、クロダイ、ハモ、ボラなどの海産物が豊富に出土しており、食糧確保の面でも臨海立地が求められていた可能性もある。岡山平野部に展開したほかの初期農耕集落遺跡も同様の立地を取ることから(岡山市加茂政所遺跡・津寺遺跡、同百間川遺跡群、瀬戸内市門田貝塚)、弥生時代前期集落の選地においては、交通の利便性や多様な食糧確保が重視されていたことが推察される。こうして弥生時代前期後葉～中期前葉までに集落が定着した岡山平野部では、以後順調に

集落が広がっていく様子が認められる。

一方、岡山平野部以外では、津山盆地周辺を除いて、この頃の拠点的な集落は顕著ではないが、凹線土器の出現期にあたる中期中葉（新）になると、丘陵または台地などに立地する集落が目立つようになり、その中に拠点性が認められるものが含まれるようになる。その代表例が赤磐市用木山遺跡とその周辺の遺跡群（東高月丘陵遺跡群）である（神原編 1977）。この遺跡群全体では1時期に最大で約50軒近く（10グループ程度）の住居から構成されていた可能性があると考えているが（河合 2021・2022）、遺跡の立地としては砂川が形成した低位部に突き出た丘陵上に位置する。この遺跡群の注目される点は、眼下に後の古代山陽道（推定）が横切っている点であり、砂川との交点を占めていることである（図5）。この遺跡では、サヌカイトの大型板状剥片と石器生産時に出た剥片類・失敗品・未成品を含めて約40kg分が見つかっており、製品も多く見つかることから、自己消費の範囲を大きく超えると判断される。讃岐から瀬戸内海を経て、この遺跡群で素材を一端集積した後に、周辺に流通させている可能性が高い（図6）（河合 2021）。先に述べた交通の要衝に位置するという側面は、こうした生産と関連させて考えると理解がしやすくなる。さらに、中期後葉に津山盆地周辺では、土器の加飾性が高まり、地域性を把握しやすくなるが、その分布が一部吉井川流域を下って、用木山遺跡まで延びることも確認されており（図7）（河合 2005）、人やモノ・情報が集まる拠点としての役割を果たしていたことがうかがえる。この遺跡の眼下を東西に横切る陸路は、砂川流域から一級河川の旭川と吉井川流域につながるものであり、高地性集落の分布状況も考慮に入ると、この時期にはすでに機能していた可能性もある。ただし、この道はまだ両河川の東西に延びていた証拠は乏しく、この間での利用に限られる可能性はあるが、それでも、古墳時代中期の原山陽道（後述）、さらには官道である古代山陽道に継承された可能性が十分にあり、弥生時代の陸路が後世に引き継がれる重要な事例となる可能性がある。

2. 弥生時代後期・終末期～古墳時代前期

弥生時代中期後葉から後期前半にかけて岡山平野では、急激な沖積化が進行したことが明らかになりつつあるが（南編 2016）、それに伴って旭川下流域西岸や足守川下流域では集落域が広がる。旭川下流域東岸でも、旭川から分流する小河川が網の目状に走る地形を生かして水田経営を行っていることが発掘成果からわかっており（図8・9）、竪穴住居の集成からも順調に人口が増加していたことが明らかになりつつある（図10）。特に後期中葉になると、百間川原尾島遺跡への集住傾向が顕著となり、強いまとまりが形成されてくる。同様の状況は、旭川下流域東岸から総社平野にかけての間において認められるのであり、終末期～古墳時代前期にかけて小地域内でのまとまりが形成されている（図11）。

その終末期～古墳時代前期にかけては、吉備南部（岡山平野）の土器が瀬戸内海を東西に広く分布することが明らかにされており、海を介した交流がさかんであったことがうかがえる（図2）。これに関連した動きとして、備前側の旭川下流域と備中側の足守川下流域では外来系土器が多く出土することが知られている。ただし、この両地域では出土傾向が大きく異なることが注目される。具体的には、讃岐系と近畿系が主体を占める旭川下流域東岸と、この両地域に加え、山陰系が目立つ足守川下流域に分かれる（図13）。前者はより東に位置し、近畿に近い地理的特性と、中期後葉段階から児島の東側を通じた讃岐との密接な関係が認められる旭川下流域東岸（信里 2022）の伝統的な人々の交流ルートに根ざすものと考えられ、後者は後期後葉～終末期に高梁川流域を介して特殊器台が山陰にもたらされた交流ルートが確立していたこと（坂本編 2016 など）が一因としてあった可能性がある。しかし、巨視的にみれば、この時

期の両地域は上東式土器の分布圏内に入っているものであり（図 14）（高橋 1992）、相互の土器様式に顕著な差異は見いだせず、むしろ古墳時代前期にかけて、両地域では一体性が強まった可能性が考えられる。

これらの集落を取り囲むように周辺の丘陵上には、弥生時代後期後葉から墳墓が形成されているが（図 11）、弥生時代終末期までは備中側が優勢であり、備前側は大きな墓を作ることが少ない状況であった（図 12）。しかし、古墳時代初頭に両地域の間位置する吉備中山に前方後円形の岡山市矢藤治山古墳が築かれると、その後 100 m 級の大きな前方後円墳は備前地域の操山の西端に築造される（岡山市操山 109 号墳など）。しかし、旭川下流域東岸に位置しながらも、麓に展開していた集落から見えないことから（図 15 上）、その評価が難しかった（宇垣 2004）。眺望を分析すれば、足守川下流域や両地域をつなぐ瀬戸内海に広く眺望が利いていることが明らかであり、両地域を意識した占地であったとの評価も可能である。このことはそれに後続する大型前方後円墳が再び吉備中山に築かれることから類推できることであり、この古墳からは直下の足守川下流域に加え、旭川下流域と両地域とをつなぐ瀬戸内海を広く見渡せるのであり（図 15 下）、これも両地域の集落群に意識を置いた立地である可能性が高い。

以上から、両地域をつなぐ主要な交通ルートは海路であったことは間違いないと思われるが、このころまでに沖積化が進み、陸路での往来も可能であったことは注意する必要がある。

3. 古墳時代中期・後期・終末期～飛鳥・奈良時代

弥生時代終末期の 3 世紀前半には旭川下流域で大規模な洪水が起こったが、古墳時代前期には、微高地上に集住し、すぐに集落を復興している（図 16・17）。集落自体は消長を繰り返しながらも（図 10）、中～後期へと途切れることなく継続されており、旭川下流域東岸は中心であり続けている。しかし、中期の大型古墳は足守川下流域や、旭川下流域から離れた位置に造られる傾向があり、かつ後の古代山陽道沿いに位置することが注意されており（宇垣 2004 など）、道（原山陽道）からの眺望を意識して形成された可能性が高い（図 18）。主要な古墳の位置を、古墳時代前期～中期で時期別にまとめると（図 11）、前期前・中葉が海路を意識し、前期後葉に内陸を意識するものが増えている様子が見える。このことから、前期前・中葉はこれまで指摘されてきたように（間壁 1970・西川 1975 ほか）、海路に比重があると考えられる。そして、前期後葉に変化の兆しがあり、中期に古代に繋がる陸路が整えられ、陸路重視になった状況がトレースできる。これ以降、後期・終末期の巨石墳や古代の主要な施設がこの道の周辺に集まる状況を確認できる。なお、備前でも備中でも古代山城・国府（国庁）・国分寺・国分尼寺が比較的近くに固まって形成されている構造は近いものがあることから、備前・備中の関係性は古代でも強かったと評価できる。このうち、旭川下流域東岸は上道氏の本貫地との評価がなされ（出宮・葛原・河本 1987 など）、賞田廃寺はその氏寺と目されているが（草原 2004・2022 など）、国府が近くに置かれることから、備前では上道氏が律令国家の施策を推進する実質的な主体者であったことがうかがえる。百間川米田遺跡は当時の海に面しており、奈良時代には総柱建物群（倉庫群）が見つかったこと（図 19）や「市」の墨書土器などから、国府津の可能性が指摘されており（河本 1991・草原 2022 など）、百間川原尾島遺跡では平安時代の例として、国家的祭祀である大祓関連の遺物との評価がなされている木製品等の一括遺物も認められていることから（図 20）（高田 1996）、旭川下流域東岸の広い範囲が国府に関係していたことがうかがえる。なお、備前国府にいたる道（支路）は吉井川付近から分岐し、古代山陽道の南約 2～3 km で併走する低位部または峠を越えるルートが想定されている。

4. まとめ

弥生時代前期に本格的な水稻農耕が県南部の瀬戸内海沿岸地域に波及すると、まず岡山平野部で着床し、拠点集落を形成することとなった。遺跡の分布状況から、海路や河川が交通の中心を占めていたことがうかがわれるが、その一方で遅くとも中期後半期以降は、低位部や低平な峠（峠）を越えて各河川流域を陸路で結ぶ道も部分的には形成されていた可能性が高い。また、岡山平野は弥生時代中期後葉～後期前半に沖積化が進行したことが明らかにされており、沖積地が安定することによって、陸路を東西で結ぶ道が利用されていた可能性もある。

海路重視の傾向は、弥生終末期～古墳時代前期の土器交流や古墳時代前期の古墳の立地から類推できるが、前期後葉に変化の兆しがあり、古墳時代中期の全長 200 m を越える巨大古墳はいずれも後の古代山陽道沿いに作られていることから、遅くともこの時期までには原山陽道が形成されていたと判断できるが、そのルートは弥生時代以降部分的に形成されてきた道を下敷きにして設定されている可能性もある。

吉備南部の拠点集落は水陸の要衝に位置することで、弥生時代以降一貫して中心的な役割を果たしており、それが古墳時代～古代に有力な勢力を生み出す母体になっていたのである。

【参考文献・図の出典】

- 足利健亮 1985 「吉備地方の古代山陽道の駅路の復元」『日本古代地理研究』大明堂
- 井上 弘編 1982 『百間川当麻遺跡 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 52 岡山県教育委員会
- 宇垣匡雅 2004 「古墳の立地とはなにか」『古墳時代の政治構造 前方後円墳からのアプローチ』青木書店
- 大橋雅也 2006 「備前・備中における古代山陽道と駅家」『古代山陽道をめぐる諸問題 ほか』考古学研究会
- 河合 忍 2005 「弥生土器について」『久田堀ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192 岡山県教育委員会
- 河合 忍 2017 「集落・墳墓からみた古墳出現期前後の吉備社会」『平成 29 年度秋期特別展ミニシンポジウム「古墳出現に至る吉備と畿内の交流」』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 河合 忍 2021 「高地性集落論と用木山遺跡 - 情報の整理から研究の可能性を探る -」『2000 年前の吉備～なぜ弥生人は丘の上に住んだのか～』岡山県赤磐市教育委員会
- 河合 忍 2022 「中部瀬戸内の高地性集落 - 土器編年からの再考 (岡山県域) -」『古代文化』74-2 古代学協会
- 神原英朗編 1977 『用木山遺跡 本文編』山陽団地埋蔵文化財調査事務所
- 木下 良 1988 「空中写真による計画的古代道の検出」『考古学叢考 中』吉川弘文館
- 草原孝典 2004 「結語」『ハガ遺跡 - 備前国府関連遺跡の発掘調査報告 -』岡山市教育委員会
- 草原孝典 2022 「軒瓦からみた古代寺院と国府、国分寺の関係」岡山市埋蔵文化財センター紀要 14 岡山市教委
- 河本 清 1991 「国府と官衙」『岡山県史』原始・古代 I 岡山県
- 坂本豊治編 2016 『出雲王登場 とことん解剖西谷 3 号墓』出雲弥生の森博物館
- 島崎 東編 2003 『津島遺跡 4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 173 岡山県教育委員会
- 高田恭一郎 1996 「古代の遺構・遺物」『百間川原尾島遺跡 5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106 岡山県教委
- 高橋 護 1992 「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』上 山陽新聞社
- 高橋美久二 1982 「古代の山陽道」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- 團 奈歩編 2013 『百間川原尾島遺跡 8 百間川沢田遺跡 6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 239 岡山県教育委員会
- 次山 淳 2007 「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器交流」『考古学研究』54-3 考古学研究会
- 出宮徳尚・葛原克人・河本 清 1987 「古代」『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 中村太一 1994 「備前国における古代山陽道駅路の再検討」『古代交通研究』3 古代交通研究会
- 西川 宏 1975 「吉備政権と対外交流」『吉備の国』学生社
- 信里芳紀 2022 「備讃瀬戸における高地性集落とその背景」『古代文化』74-2 古代学協会
- 間壁忠彦 1970 「沿岸古墳と海上の道」『古代の日本 4 中国・四国』角川書店
- 松尾佳子 2020 「古代造瓦技術の変革 - 8 世紀の備中国を題材にして -」『紀要』1 岡山県古代吉備文化財センター
- 南健太郎編 2016 『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 宮路淳子・中原計・松井章 2006 「門田貝塚出土の動物遺存体」『邑久町史 考古編』瀬戸内市
- 柳瀬昭彦編 1996 『百間川原尾島遺跡 5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106 岡山県教育委員会
- 柳瀬昭彦 2004 「弥生水田の展開」『百間川原尾島遺跡 6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 179 岡山県教育委員会

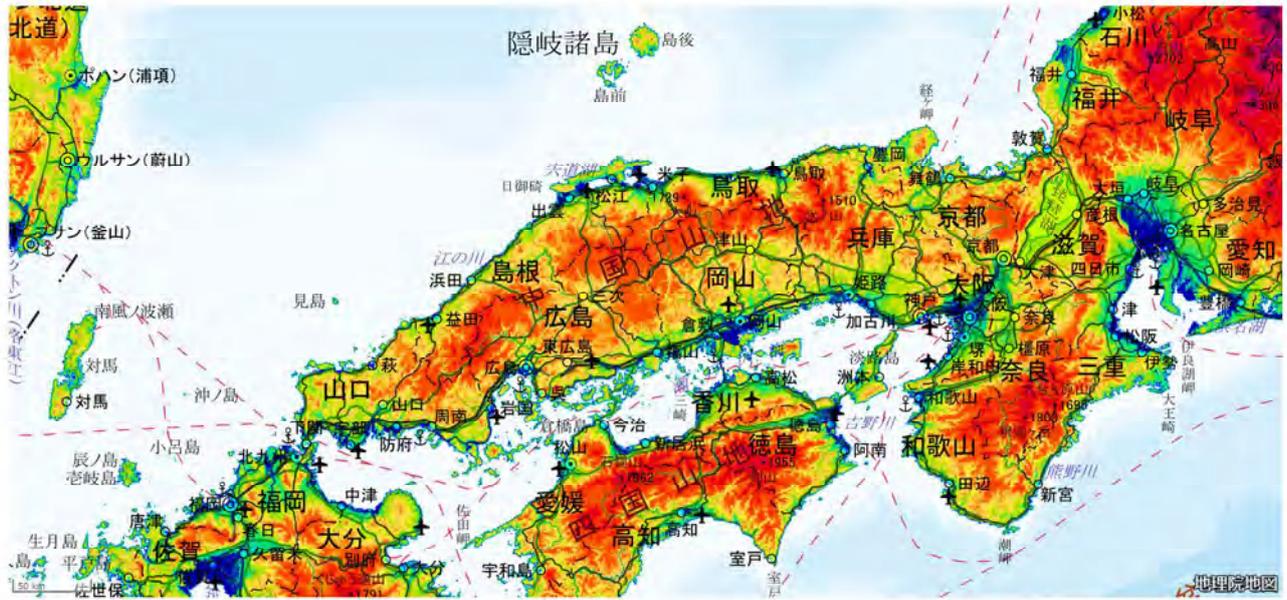


図1 中国地方を中心とした地図（地理院地図を加工）

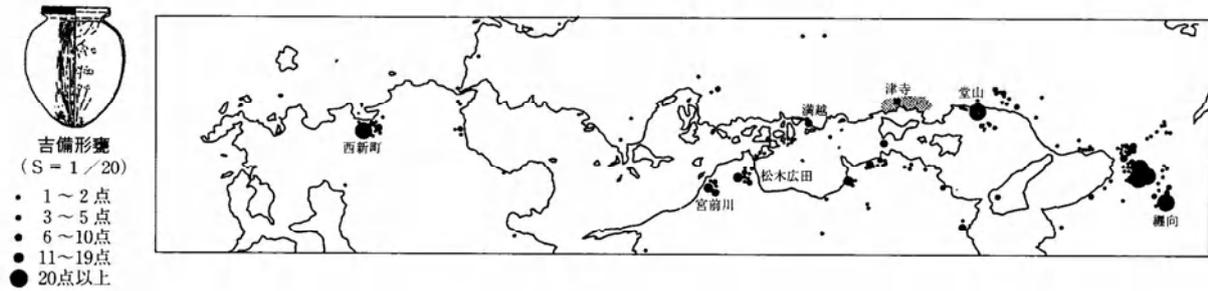


図2 瀬戸内海ルートと吉備型甕の分布（次山2007）

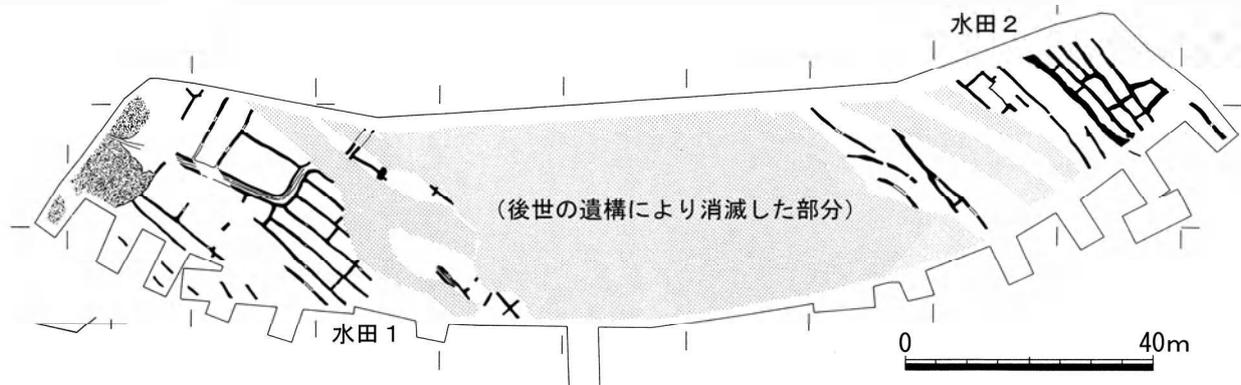


図3 弥生前期の水田（津島遺跡）（島崎ほか編2003を一部改変）



図4 岡山平野部における弥生時代前期～中期前葉のおもな集落遺跡の分布



図5 用木山遺跡周辺の地形と遺跡の位置 (河合2021)

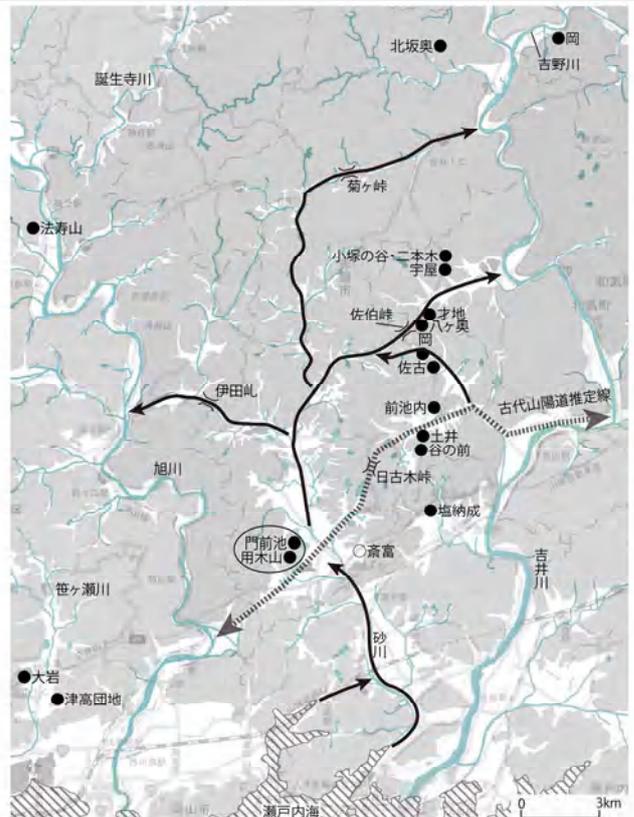


図6 赤磐市周辺の地形と高地性集落等の分布と想定される交通ルート (河合2021)



図7 津山盆地土器様式・型式の広がり（弥生時代中期後葉）
 （河合2005に加筆）



図8 治水地形分類図から復元する流路
 （地理院地図を基に作成）

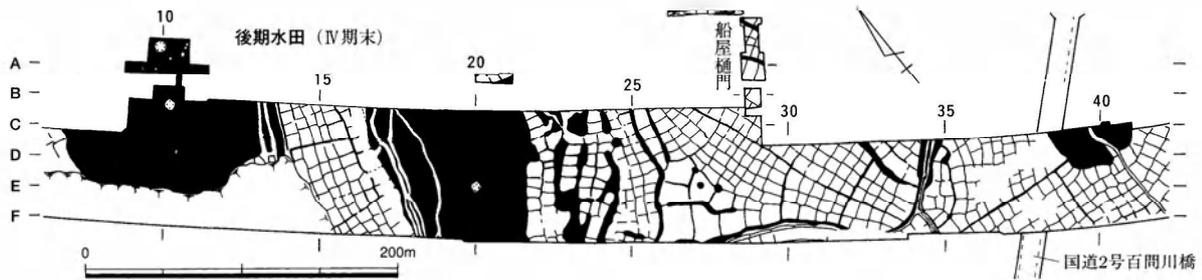


図9 岡山市百間川原尾島遺跡の水田（弥生時代終末期）（柳瀬2004）

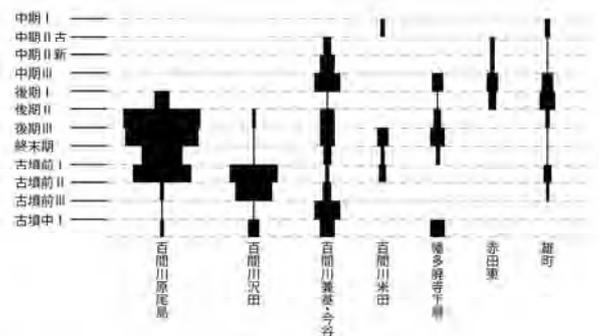
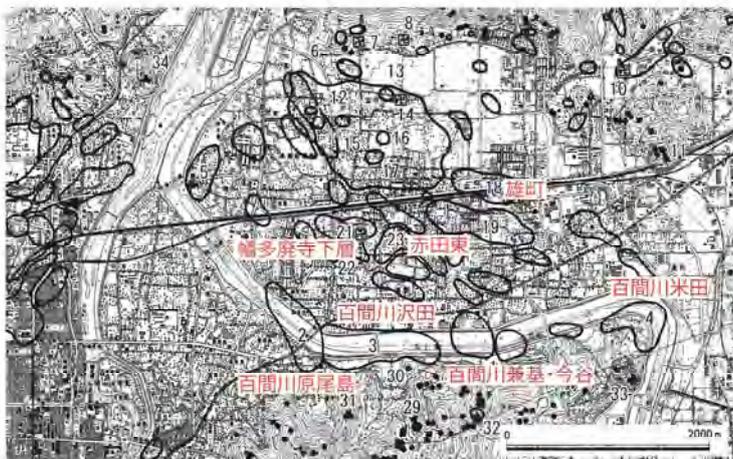
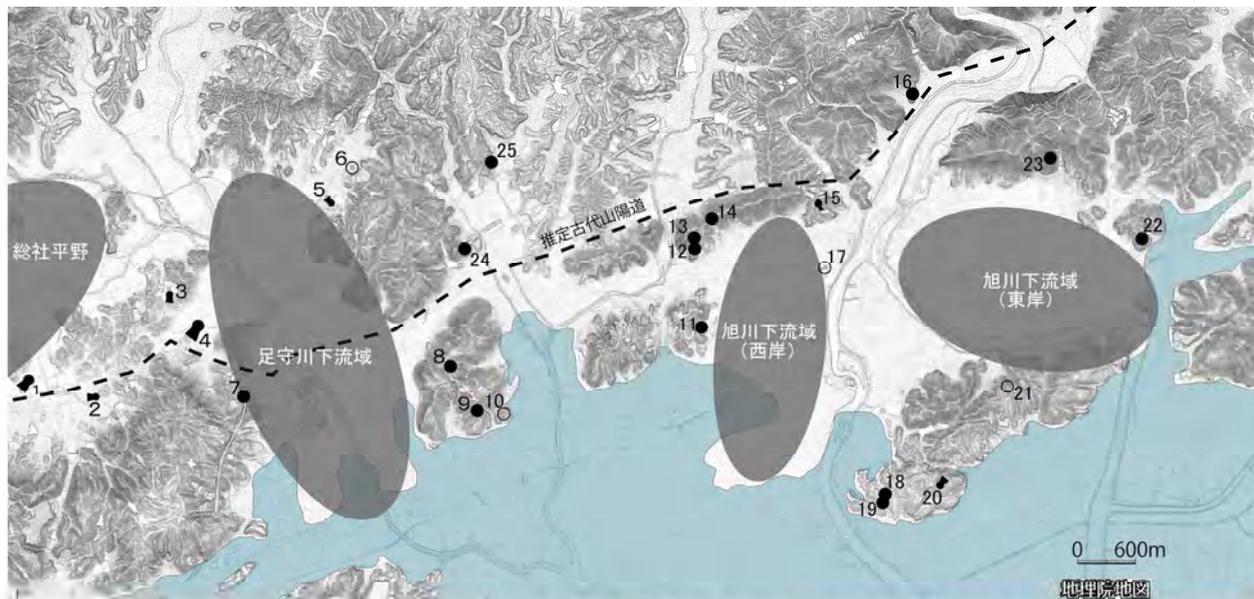


図10 旭川下流東岸域の遺跡分布とその消長（赤字が弥生時代中期～古墳時代前期の集落遺跡）（右図は河合2017）



前期前・中葉：7 矢部大ぐる 8 中山茶臼山 9 矢藤治山 11 津倉 12 七つぐろ5号 13 七つぐろ1号 14 都月坂1号 16 片山 18 網浜茶臼山 19 操山109号 22 宍甘山王山 23 備前車塚 24 一宮天神山1・2号 25 飯盛山
 前期後葉：6 小盛山 10 尾上車山 17 神宮寺山 21 金蔵山
 中期：1 作山 2 宿寺山 3 小造山 4 造山 5 佐古田堂山 15 一本松 20 湊茶臼山
 図11 古墳時代前期の集落域とおもな前・中期古墳の分布

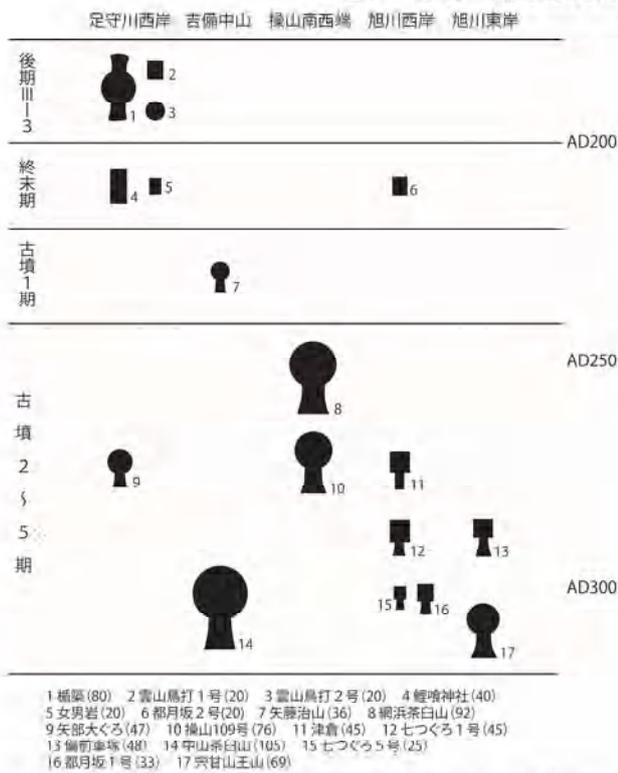


図12 吉備南部における墳墓・古墳の編年 (河合2017)

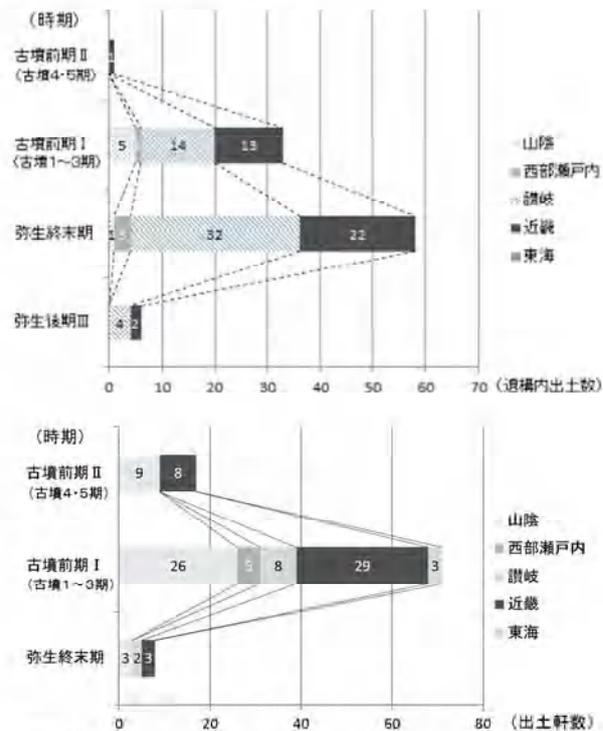


図13 搬入された外来系土器 (上：旭川下流域東岸、下：足守川下流域) (河合2017)

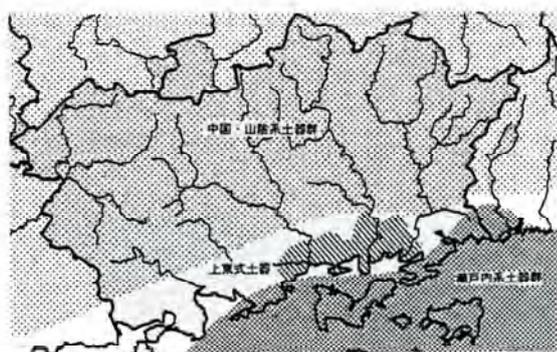
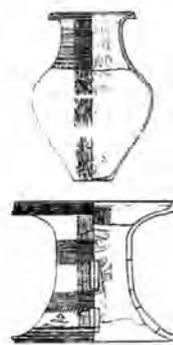


図14 上東式土器の分布 (高橋1992に一部加筆)



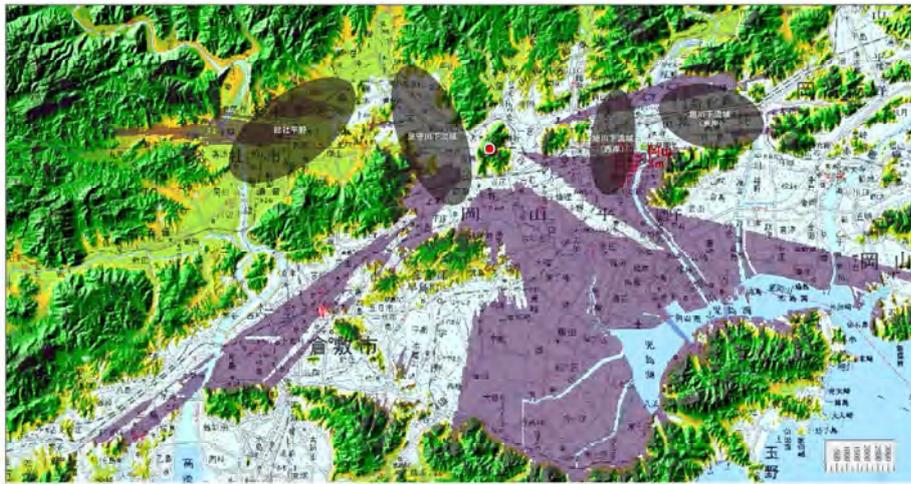
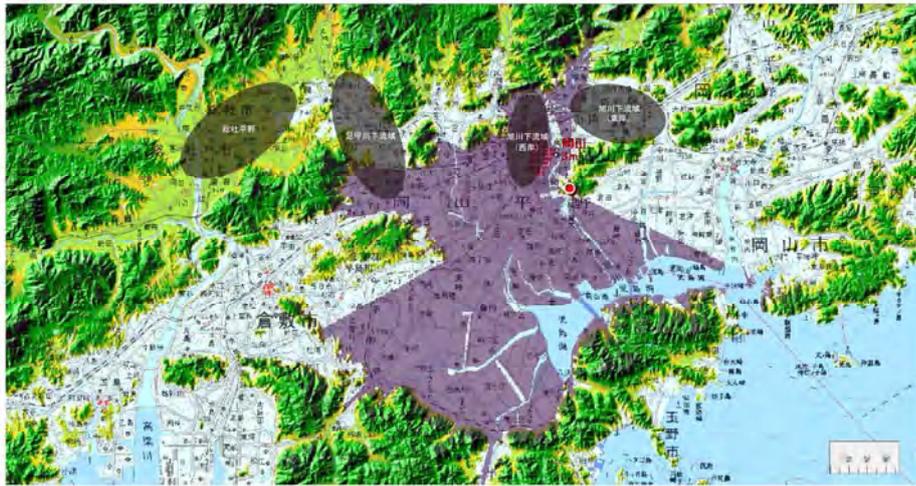


図15 古墳からの眺望（上：岡山市操山109号墳、下：同中山茶臼山古墳）（カシミール3Dより作成）

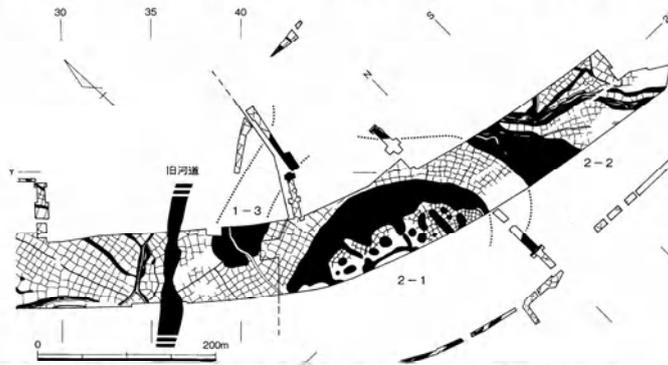


図16 岡山市百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の微高地と水田（弥生時代終末期）（團編2013）



図17 岡山市百間川沢田遺跡の古墳時代前期集落（團編2013に加筆）

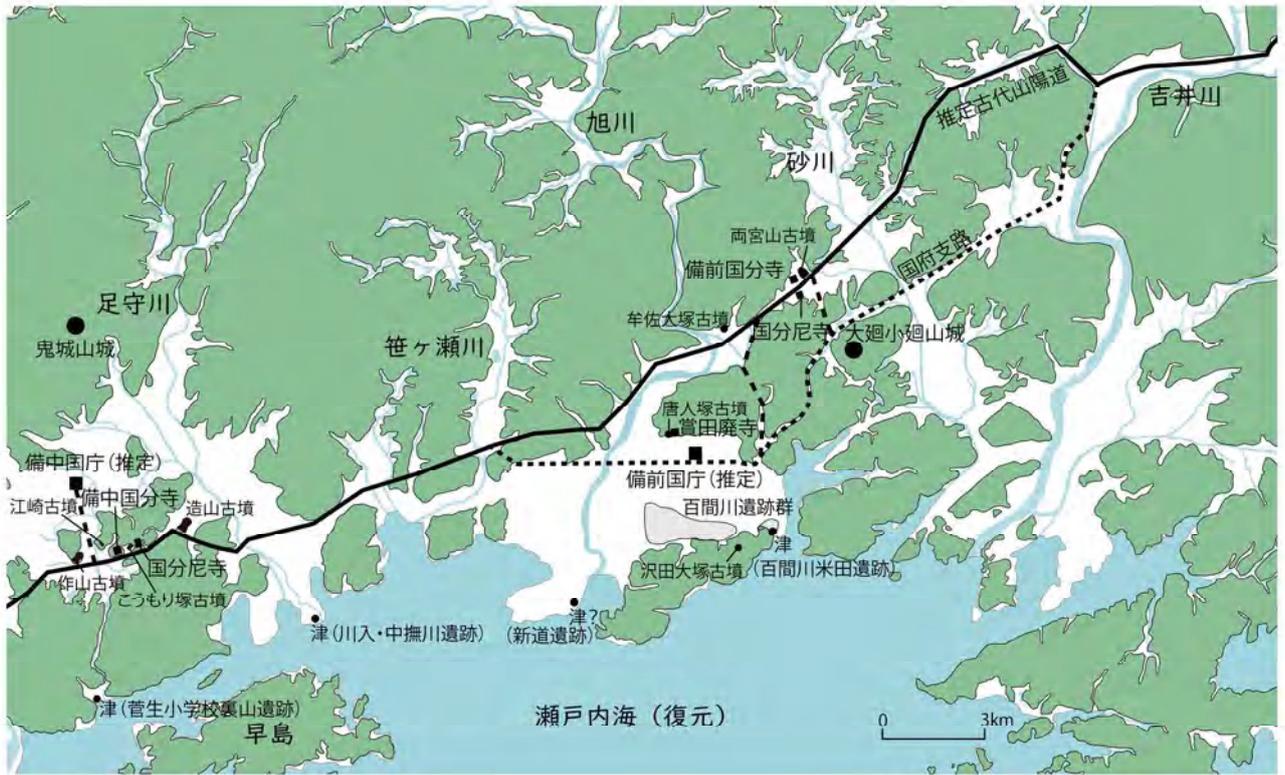


図18 岡山平野部におけるおもな古墳時代中期～終末期古墳と古代寺院・国庁推定地・推定古代山陽道の分布

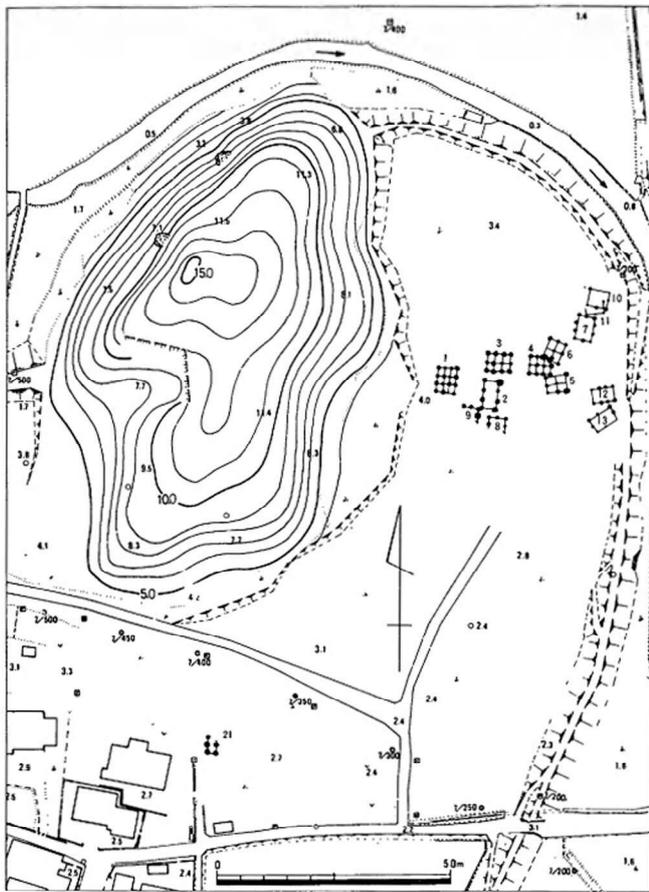


図19 岡山市百間川米田遺跡の掘立柱建物群 (奈良時代)
(井上ほか編1982)

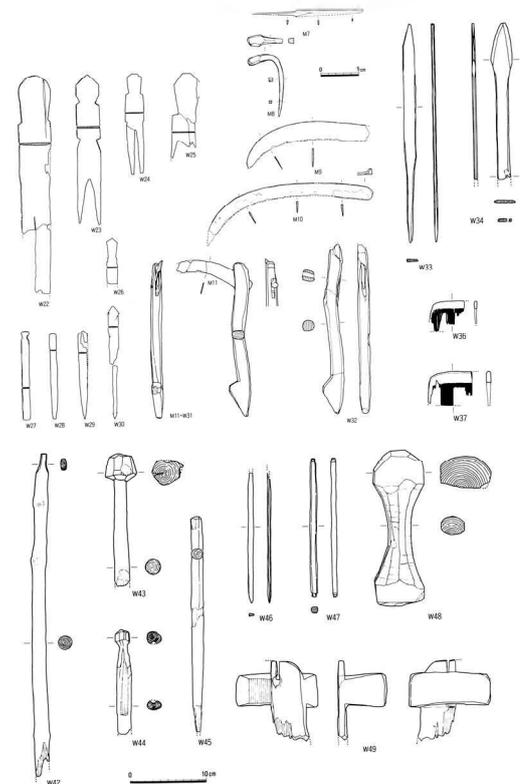


図20 岡山市百間川原尾島遺跡における祭祀関係遺物
(平安時代) (柳瀬編1996を一部改変)

越後・佐渡国における弥生時代～古代遺跡の動態 —「拠点」の形成とその背景—

新潟県文化課
渡邊 裕之

はじめに

現在の新潟県の行政単位は、712（和銅5）年の越後国域の確定、752（天平勝宝4）年の越後国からの佐渡国分離にその骨格ができた。越後国・佐渡国ともに国府（国庁・国衙）所在地はいまだ確定に至ってはいないが、これまでの調査研究により、越後国は上越市高田平野の今池遺跡群、佐渡国は佐渡市国中平野の国分寺遺跡群周辺が有力である。

本格的な水稲耕作が開始される弥生時代中期後半、新潟県域では、それ以前に比べて沖積低地に立地する遺跡数の増加等が認められるが、特に高田平野と国中平野では、緑色凝灰岩・鉄石英製管玉の大量生産と環濠集落を特徴とする大規模な遺跡群が形成される。

古代律令社会における政治的・経済的中心地であった国府と、農耕集落から初期国家形成に向けて社会構造が大きく変化する弥生時代中期後半の大規模集落。本稿では、異なる時代に形成されたこれら2種類の遺跡群を「拠点」と捉え、周辺遺跡の動態をもとに、その形成と背景について考えてみたい。

なお、筆者の力量不足から、以下では越後国高田平野を主に検討対象とし、佐渡国については補足的に触れるにとどめることをご容赦願いたい。

1. 越後国（高田平野）

（1）弥生時代中期後半から古墳時代前期

高田平野は、東・西・南方向を取り囲む山地から日本海へと流れ込む多くの河川によって形成され、地形的に扇状地と沖積低地、砂丘に区分される。高田平野における弥生時代遺跡は、砂丘内陸側の潟湖周辺地域（図1A）、西部丘陵北側（同図B）、西部丘陵南側及びその前面に広がる扇状地（同図C）、平野中央部（同図D・E）の大きく4か所にまとまりが認められる。

高田平野において最初に本格的な弥生集落が営まれるのは西部丘陵南側扇状地（C）に立地する吹上遺跡（図4）である。同遺跡では、日本海沿岸部に広く分布する小松式土器と長野県方面の栗林式土器が共存することから、これらの土器を製作した北陸系と信州系の2つの集団によって営まれことが分かる。本遺跡で大量に生産された緑色凝灰岩製管玉とヒスイ製勾玉が長野県の遺跡で多数出土していることから、地域間の物流を担った遺跡と考えられている。さらに東北や山陰・東海地方以西の土器、銅鐸形土製品、近畿型銅戈模倣土製品等も出土しており、様々な地域との交流があったことをうかがわせる（図3）。吹上遺跡の東方約2kmに上百々遺跡があるが一部の発掘調査に留まり実態は良く分かっていない。

弥生後期後半になると平野を見下ろす西部丘陵の高所（B・C）に遺跡が形成される。裏山遺跡（図2）は、平野部との比高差70mの尾根の先端に築かれた高地性環濠集落で、山頂の狭い平坦地の縁辺部に竪穴建物8棟が分布し、急峻な斜面と環濠を備えた砦という表現がぴったりくる。北陸系の法仏式土器を主体として、緑色凝灰岩製管玉・ヒスイ製勾玉の未成品、ガラス小玉の他、鉄製の鋤先・鍬・ヤリガンナ、研磨用の砥石・軽石が出土した。6点出土した

鋤先^{すきさき}は北部九州との類似が指摘されている。眺望性に優れた立地から、日本海を行き交う鉄などを運搬する船の見張り場との評価もある（笹澤 2014）。また西部丘陵南側では、南北 800m にも及ぶ国内最大規模の高地性環濠集落である斐太遺跡（図 5）が築かれる。発掘調査は一部にとどまるものの、狭い谷で隔てられた 3 つの地区から 70 棟以上の竪穴建物が地形の窪みとして確認されており、部分的に濠が開削される。同時期の下馬場遺跡は環濠を持たないものの、その立地から一般集落とは異なる性格が想定されている。北海道から北東北に由来する続縄文土器 2 点と鉄器の出土が特筆される。そして、斐太遺跡衰退の後、弥生後期末末～古墳初頭に誕生するのが釜蓋遺跡（図 6）である。扇端部の低地に位置する同遺跡は、北～西側にかけて濠が開削され、東側は自然流路と接続して集落を囲む。流路を引き込んだ「船着き場」のような場所も確認されており、日本海と平野内陸部をつなぐ河川交通の要衝であった可能性が高い。環濠の内側からは直径 10 m を超える円形竪穴建物が複数時期にわたって存在し、焼失家屋も複数検出された。

平野中央部の河川流域（D・E）では、中島廻り遺跡（古墳前期～8 世紀前半）、子安遺跡（弥生後期後半～10 世紀前半）、下割遺跡（弥生後期後半～10 世紀後半）など、弥生後期後半から古代にかけて、断続的ながら長期利用された遺跡が分布する。後述するように、子安遺跡が立地する関川右岸の河岸段丘上は古代における高田平野の中核となる地域であるが、土地利用の開始が斐太遺跡群とほぼ同時進行する点は興味深い。

潟湖周辺地帯（A）では、発掘調査例が少なく実態が不明ながらも、武器形青銅器を模した石戈^{せつが}や石剣・銅鏃等の出土、古墳前期の丸山古墳が存在するなど、希少な遺構・遺物が散見される。近年、潟湖を挟んだ対岸丘陵上から前方後円墳を含む古墳群が発見され（高橋 2020）、内水面に立地する当該地域の役割と重要性が注目されている。

（2）古墳後期～奈良・平安時代

古墳後期から古代になると、遺跡数が激増するとともに主要河川ごとに分布がまとまる傾向が顕著となる（図 7）。6 世紀後半～7 世紀には、高田平野の東西で大規模な群集墳が造営される。これらの古墳群の被葬者たちは、8 世紀後半以降、越後国府を支える地域の有力者へと成長していく系譜の人々であったと推定される。遺跡分布のなかで目を引くのが、他の遺跡から離れて平野中央部に位置する今池遺跡群（子安遺跡・今池遺跡・下新町遺跡^{しもしんまち}）である。今池遺跡（図 8・9）は 8 世紀前半に形成されて 10 世紀初頭まで継続するが、大型掘立柱建物が整然と配置され、区画溝がめぐるのは 8 世紀後半から 9 世紀前半である。隣接する下新町遺跡は 8 世紀後半から 10 世紀、子安遺跡はそれより少し下って 9 世紀後半に始まり、10 世紀前半まで継続する。多数の大型掘立柱建物と整然とした配置、道路と考えられる遺構や区画溝の存在、都城以外では稀有な遺物の出土など、他の遺跡にはない特徴が多いことから今池遺跡群は越後国府の最も有力な推定地と考えられている（坂井 2008）。今池遺跡の東側に隣接地には、越後国分寺の可能性が高い本長者原廢寺跡^{もとちやうじやはらはいじ}（図 10）が存在する。

（3）遺跡の動態から見える「拠点」の形成とその背景

弥生中期から古墳前期にわたって大規模な集落を形成する斐太遺跡群（吹上遺跡・斐太遺跡・釜蓋遺跡）と、越後国府推定地である今池遺跡群（今池遺跡・子安遺跡・下新町遺跡）は、各時代における「拠点」と呼ぶべき存在である。ここでは、これまで概観してきた高田平野の弥

生後半～奈良・平安時代における遺跡の分布状況を踏まえて、異なる時代背景のなかで形成された2つの「拠点」を囲む約9 km圏内をひとつの地域と仮定し、主な遺跡の動態を見てみよう(図11)。註1

弥生時代の「拠点」である斐太遺跡群の3遺跡は、中心となる時期が異なることから、吹上遺跡(弥生中期後半)→斐太遺跡(弥生後期後半)→釜蓋遺跡(弥生終末～古墳初頭)と変遷したと考えられ、「首長を生み出す集落(母村)が輪番制(的)に移動した」可能性が指摘されている(禰亙田2019)。つまり、この地を拠点とした集団は、高田平野の最奥部に大規模な農耕集落を作った後、弥生後期後半には丘陵上に上って巨大な高地性環濠集落を築き、その後、再び低地に降りて河川を引き込んだ環濠集落を形成した。この地域には拠点集落を継続して築くに値する高いポテンシャルがあったと考えるべきであろう。しかし、発掘調査によれば、吹上遺跡では中期後半、釜蓋遺跡では古墳初頭とそれ以降の2回にわたって大規模な洪水に見舞われたことが確認されており、安定した集落を営むには決して恵まれた土地ではなかったようだ。それでもこの地が選ばれ続けたのは、洪水の危険がありながらも河川近くに拠点を構える利便性があったからであろう。弥生中期後半以降、水稻耕作を生業の中心とした社会では水田に適した低地に居住地を求めたことも理由だろうが、これまでの発掘調査成果からは、斐太遺跡群がモノや情報が行き交う「道」の交差点としての姿が浮かびあがる。例えば、弥生中期後半は、管玉・勾玉を特産品として吹上遺跡と信州方面の各遺跡を結ぶ「山の道」である。また弥生後期後半には、西部丘陵上に立地する裏山・下馬場・斐太遺跡の連続性から想定される、日本海と内陸部をつなぐ「丘陵の道」。裏山・下馬場遺跡の両遺跡から、西日本経路で持ち込まれたと思われる鉄製品が出土したことはそれを示唆するかのようだ。そして、釜蓋遺跡で存在が想定された「船着き場」に代表される、平野中央部を流れる大小河川を幹線とする「海に至る道」である。弥生中期後半～古墳前期にかけて遺跡の存在が認められる瀉湖周辺の遺跡群は、日本海側の港的機能を果たしたのかも知れない。斐太遺跡群は高田平野の「拠点」であるとともに、日本海を経由した各地と、中部高地を経由した東海地方以西との中継地としての役割を担っていた可能性がある。

斐太遺跡の衰退後、関川左岸の段丘上に栗原遺跡が成立する。主体となるのは7世紀後半以降で、塔基壇と推定される瓦敷遺構や大型掘立柱建物群が検出されたことから、頸城郡衙との関連が想定されている(坂井2008)。関川右岸では古墳前期以降、遺跡が見えない時期が続くが、7世紀後半になって津倉田遺跡が形成される。同遺跡では竪穴建物18棟が検出され、大量の須恵器が出土している。そして、8世紀半ばになって、関川右岸に突如のように出現するのが今池遺跡群である。栗原遺跡や津倉田遺跡と入れ替わるように今池遺跡群が成立することは象徴的であり、複数に分散していた国府機能が、今池遺跡群に集約された可能性が指摘されている(春日2006)。

以上のように当該地域の遺跡を概観してみると、その継続期間には、①弥生中期後半～古墳前期、②古墳後期～8世紀前半、③8世紀後半～9世紀の3時期にまとまりを見出すことができる。①関川左岸の丘陵・扇状地、②関川と矢代川に挟まれた段丘上、③関川右岸の段丘上に遺跡が形成され、時期によって遺跡の立地も変遷する。古墳時代以降もたびたび洪水に見舞われたであろうことを勘案すれば、単に不安定な土地を避けて集落の立地を変えたというよりも、社会的な要因がそこに働いたのではないかと考えたい。斐太遺跡群で推察された低地への志向性が、古代国家形成という時代背景のなかで安定した高台を目指す方向に変わっ

たと考えることはできないだろうか。また、高田平野は古代官道である北陸道と東山道支路が接続する交通の要衝であり、古代においても信州方面と日本海側を結ぶ物流の拠点であった。越後国府の場所はこのような立地条件から選地されたのではないだろうか。川路と陸路の接点となる地理的好条件が、時代を違えて高田平野に「拠点」を形成する大きな要因となったと推測される。

2. 佐渡国（国中平野）

佐渡島の中央部に位置する広大な国中平野では、弥生時代～古墳時代の遺跡は平野中央部から周辺部に多く、古代の遺跡はその外側を取り囲むように分布する（図 13）。高田平野と同様、国中平野において遺跡が増加するのは弥生中期後半からである。なかでも平田遺跡・小谷地（竹の花）遺跡・桂林遺跡・城島遺跡・蔵王遺跡等の玉作遺跡が集中する新穂遺跡群は、約 30 万㎡にわたって広がりを見せ、国内最大規模の弥生～古墳時代玉作遺跡群である。正式な発掘調査は一部にとどまっており遺跡群の内容把握は今後の大きな課題である。県営ほ場整備事業に伴い狭小な範囲を調査した平田遺跡では、弥生中期後半の平地建物、管玉の素材となる緑色凝灰岩・鉄石英の集石遺構、板杭列の他、環濠と思われる幅 2～2.5 m の溝等が発見された。土器は小松式系土器を主体として少数の東北系（宇津ノ台式・川原町口式）、信州系（栗林式）土器から構成されるが、異系統の土器要素が融合するなどの高田平野の吹上遺跡では見られなかった現象が認められる。また長野県善光寺平で製作された石斧も出土している。弥生後期末～古墳前期前半を主体とする蔵王遺跡（図 12）では、掘立柱建物・平地式大型建物・壁立式平地建物等の各種遺構が検出され、特に布堀のなかに地中梁を設けた特殊な構造の SB 5 の周辺からは、内行花文鏡、殊文鏡、銅鏃といった古墳に副葬されるような威信財が出土した。地中梁を持つ掘立柱建物は北陸地方では越前と加賀地方に多く、山陰地方にまで広がることが判明しており、人の移動や移住を考える上で重要な資料と位置付けられている（高橋 2019）。近年、国中平野では古墳時代初頭から前期前半の遺跡の検出例が相次いでいるが、前期古墳は未だに存在が確認されていない。

佐渡国府は未だ明らかになっていないが、佐渡国分寺跡の周辺が有力である（図 14・15）。真野湾に向かって張り出した丘陵上、国中平野を見下ろす高台に国分寺跡が立地する。すでに触れたとおり、国中平野の古代遺跡は弥生～古墳時代の遺跡に比べて高所に位置する傾向が顕著である。国中平野は広大な高田平野に比べて極めてコンパクトであるが、遺跡数と過密度の高さは高田平野を上回っている。古代の佐渡には 3 群 22 郷が存在したとされる。平安時代に編纂された『和名抄』等をもとに越後と佐渡の田数を分析した坂井秀弥は、佐渡国の面積は越後国の 1/13 に過ぎないものの人口は 1/5 にとどまることから、佐渡は越後に比べて人口密度が高く、耕地面積も広がったと指摘している（坂井 2008・佐渡市 2020）。低湿地の広がる越後に比べて、佐渡は高い生産性に支えられていたと言えるだろう。佐渡国の玄関口となる国津（港）は国中平野を縦断する国府川の河口付近にあったと推測されており、国府・国分寺は港を望む場所に占地された可能性が高い。

註 1 図 11 下段の表は湯尾和広氏の業績（湯尾 2021）をもとに他の情報を加えて筆者が再構成した主要遺跡の消長表である。濃く網かけしたところは建物跡や土坑等の遺構が作られた時期、薄いところは遺物のみが出土するなど居住痕跡が希薄な時期に当たる。

【図出典】

図1・2・3・5・7・9：上越市史編さん委員会 2004、図2 上写真：上越市史編さん委員会 2004 より転載・加筆、図4 遺構配置図：上越市史編さん委員会 2003、出土土器写真：上越市教育委員会 2006 より転載、図6：上越市教育委員会 2021、図8・10：坂井 2008、図11：上越市教育委員会 2021 を改変、図12：佐渡市 2018、図13：佐渡市他 2017 に加筆、図14：佐渡市 2019 より転載、図15：佐渡市 2020

【参考文献】

- 相沢 央 2004 「第3部古代 第2章越後国の誕生と頸城郡」『上越市史』通史編1 上越市
- 春日真実 2006 「古代越後の集団と地域」『日本海域歴史大系』第2巻 古代篇Ⅱ 清文堂出版株式会社
- 坂井秀弥 2008 『古代地域社会の考古学』同成社
- 笹澤正史 2005 「頸城地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態」『シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 笹澤正史 2015 「海の道・山の道・玉の道 - 玉がつなぐ地域間の交流 -」『フォーラム小松発、北陸新幹線ルート上の弥生文化を探る』小松市・小松市教育委員会
- 笹澤 浩 2004 「第2部原始 第3章弥生文化と農耕社会」『上越市史』通史編1 上越市
- 佐渡市・佐渡市教育委員会 2017 『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』
- 佐渡市 2018 『新潟県有形文化財（考古資料）指定記念 蔵王遺跡展』
- 佐渡市 2019 『新潟県有形文化財（考古資料）指定記念 遺跡から見た古代の佐渡 - 古代史発見!! 佐渡国分寺遺跡群展 -』
- 佐渡市 2020 『佐渡国分寺遺跡群展・講演会資料集』
- 佐渡市教育委員会 2008 『佐渡国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 上越市史編さん委員会 2003 『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 上越市史編さん委員会 2004 『上越市史』通史編1 上越市
- 上越市教育委員会 2006 『吹上遺跡』
- 上越市教育委員会 2021 『国指定史跡 斐太遺跡群 釜蓋遺跡確認調査報告書（総括編1）』
- 高橋浩二 2019 「布堀り柱掘形をもつ掘立柱建物の特異性」『佐渡の王 - 蔵王遺跡 -』新潟県埋蔵文化財センター
- 高橋 勉 2020 「頸北史の再評価」『頸城文化』68 上越郷土研究会
- 瀬戸田佳男 2019 「西日本の弥生文化から新潟県の弥生文化を考える」『第4回新潟県考古学講演会関連資料集 新潟県の弥生文化を考える』新潟県教育庁文化行政課
- 湯尾和広 2021 「第Ⅶ章総括」『釜蓋遺跡確認調査報告書（総括編1）』上越市教育委員会

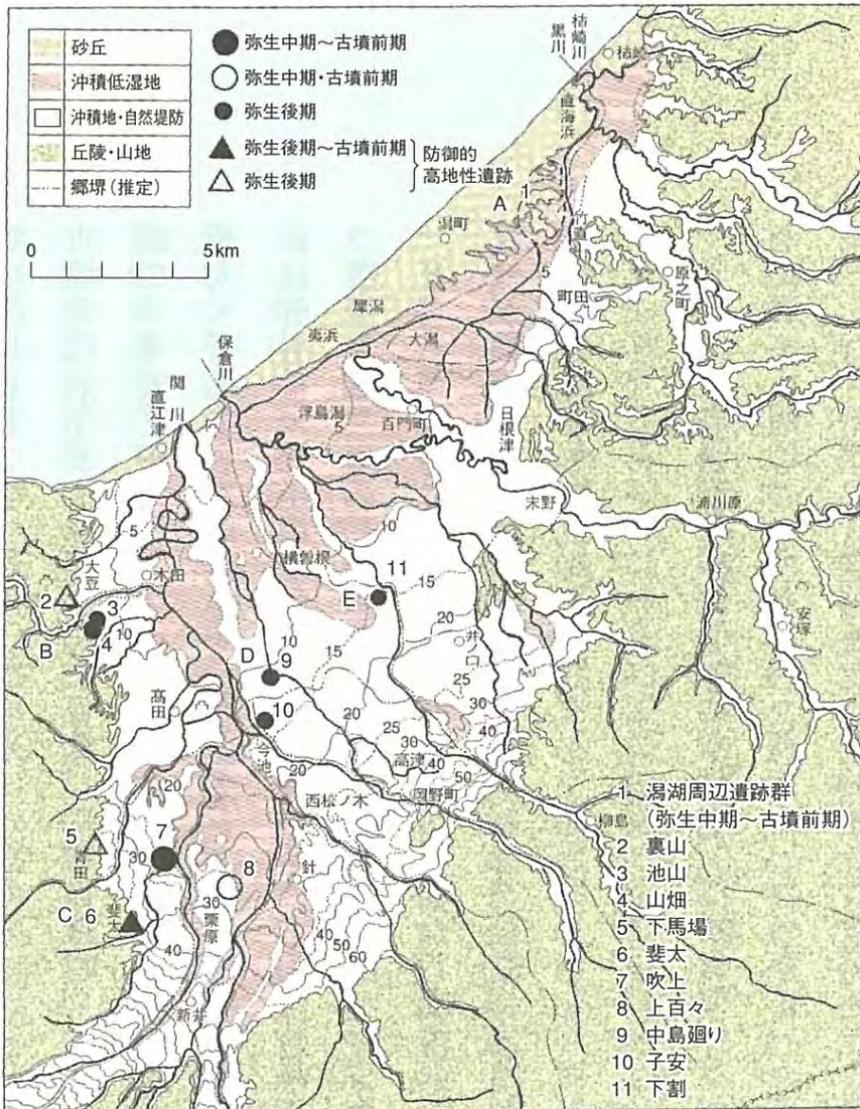


図1 高田平野における弥生中期～古墳前期の遺跡 (上越市史編委 2004)

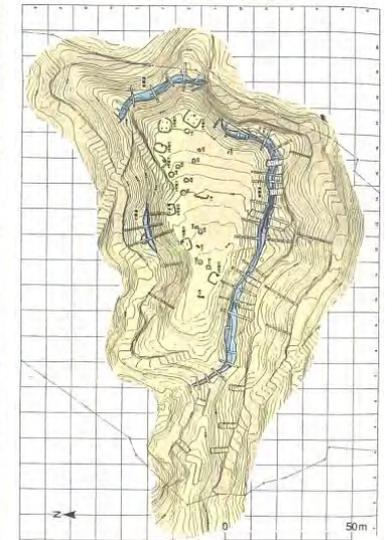
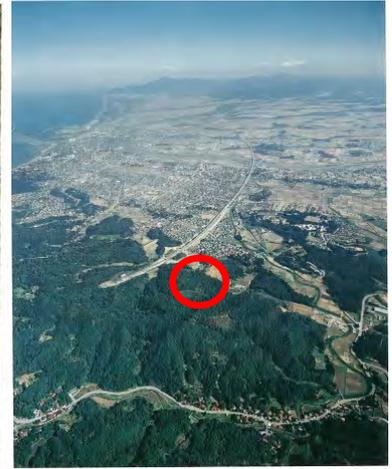


図2 裏山遺跡の立地と集落構成 (上越市史編委 2004 に加筆)

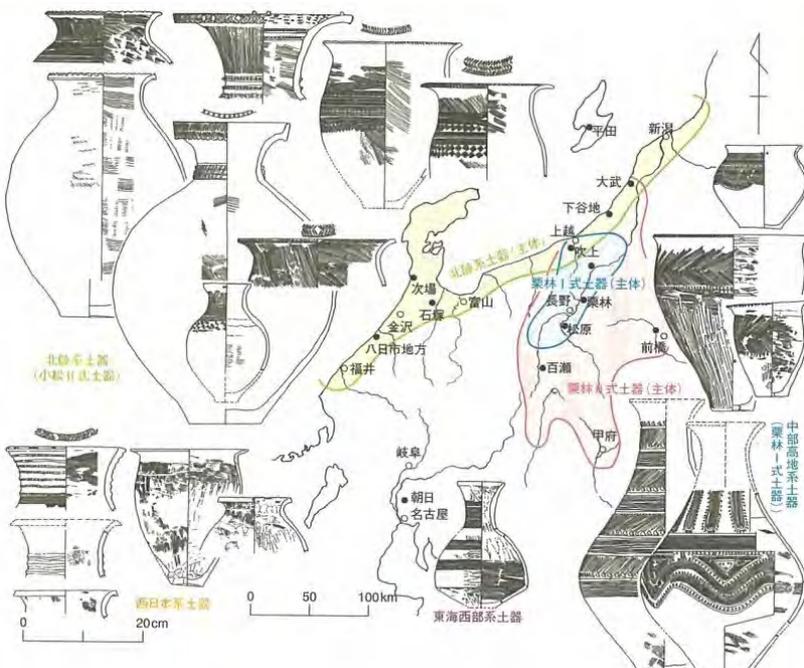
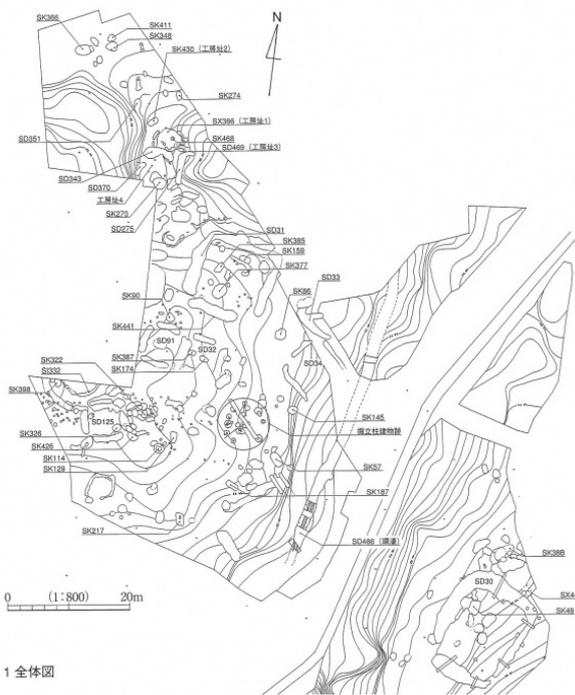
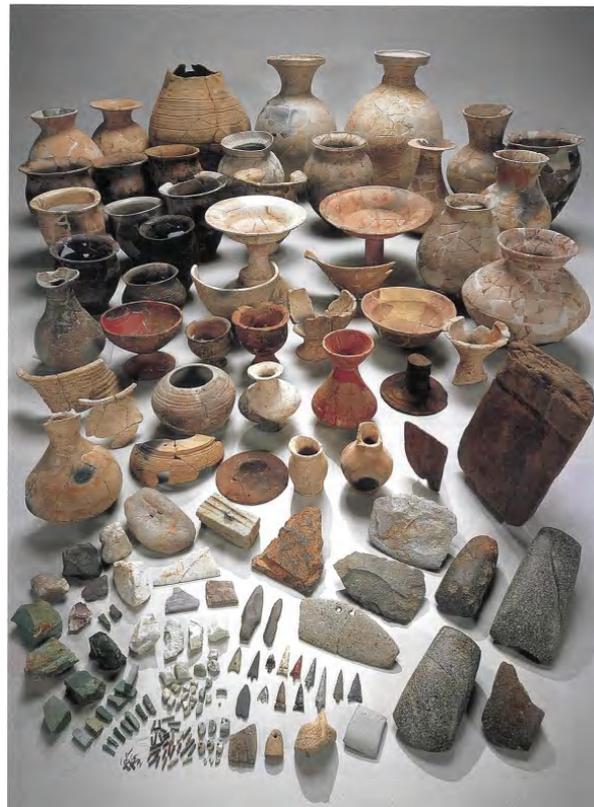


図3 吹上遺跡に見える土器様相 (上越市史編委 2004)



1 全体図
 図4 吹上遺跡の遺構配置と出土遺物
 (上越市史編委 2003)



吹上遺跡出土品 (上越市教委 2006)

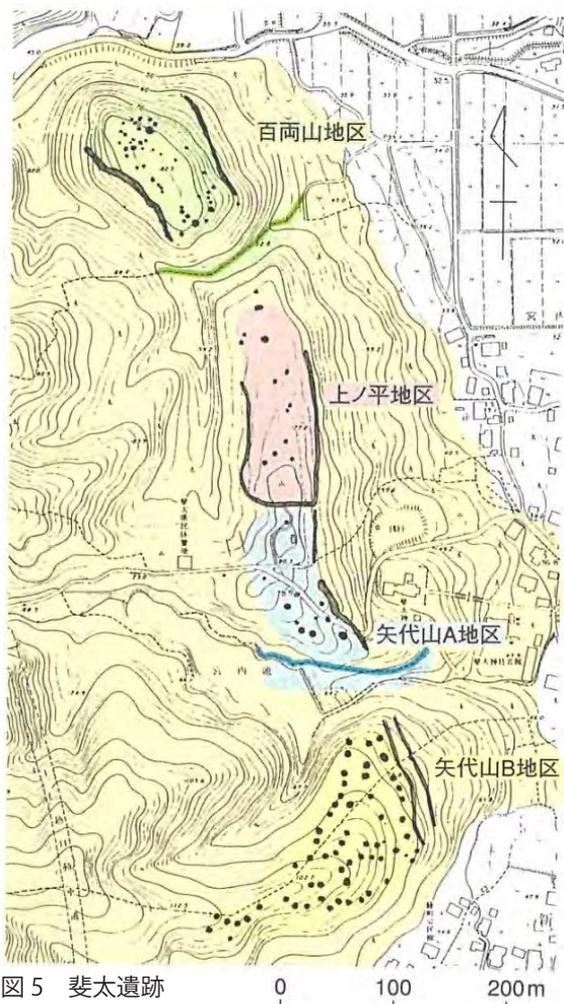


図5 斐太遺跡
 (上越市史編委 2004)

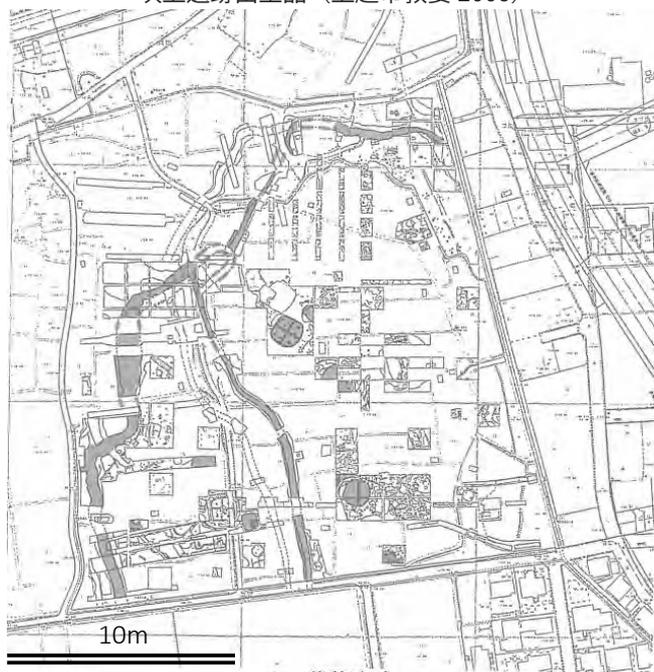
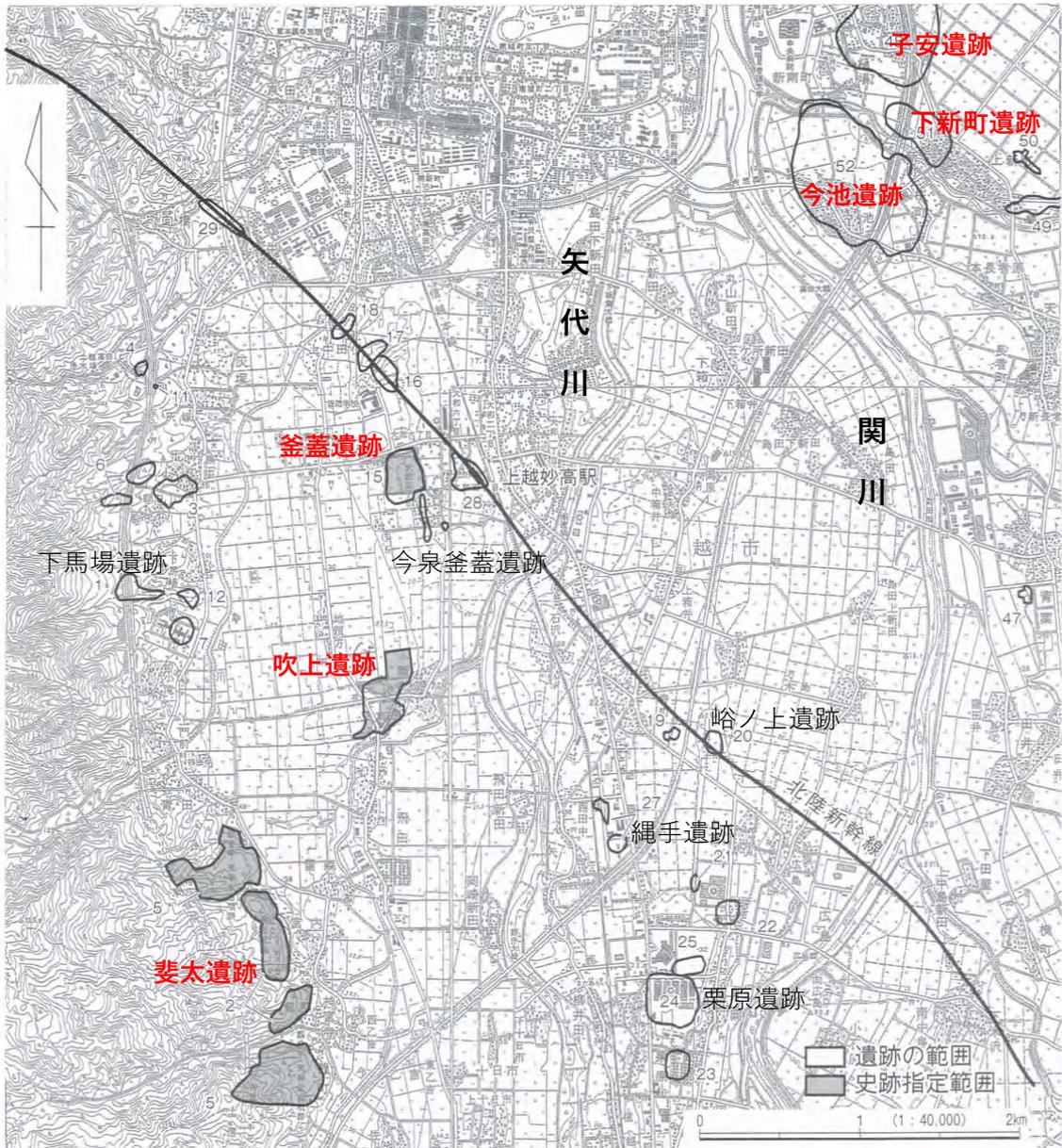


図6 釜蓋遺跡 (上越市教委 2021)



立地	遺跡名	弥生			終末	古墳			7世紀		8世紀		9世紀	
		前期	中期	後期		前期	中期	後期	前半	後半	前半	後半	前半	後半
関川左岸	台地・丘陵	下馬場												
		斐太												
	扇状地	吹上												
		今泉釜蓋												
	段丘	釜蓋												
		嶮ノ上												
栗原														
関川右岸	沖積地	縄手												
		子安												
		下新町												
		今池												
平野北西部	台地・丘陵	津倉田												
		山畑												
	裏山													
沖積地	一之口													

図 11 斐太遺跡群・今池遺跡群周辺の遺跡の消長（上越市教委 2021 に加筆）

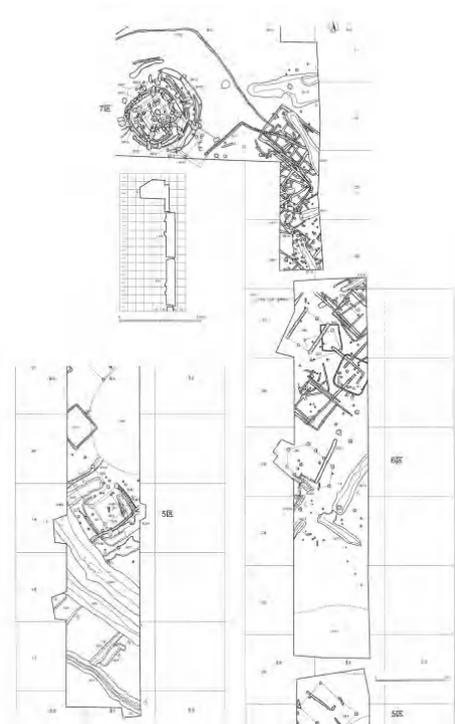


図 12 蔵王遺跡 (佐渡市 2018)

図 13 佐渡 国中遺跡における遺跡分布 (佐渡市他 2017 に加筆)



図 14 佐渡国分寺跡 (佐渡市 2019)

図 15 佐渡国分寺跡と周辺の遺跡 (佐渡市 2020)

拠点をつなぐ道について考える

大阪府立弥生文化博物館
瀬田佳男

はじめに

- 遺跡が「そこ」に所在したのには、何らかの意味があった。それを明らかにするうえで、筆者は「立地」という地理的要因と、その遺跡と周辺の遺跡をつなぐ道、すなわち「交通」という経済的要因時に政治的要因に鍵と考えている。
- 今回のフォーラムでは、弥生時代と古代と時間的に断絶のある二つの時代に「拠点」が形成された理由を明らかにしつつ、共通点と相違点を導き出せることができればと思う。
- その前に、以下は、本フォーラムとの関わりのある、拠点と拠点をつなぐ道についての事例、大阪府の池上曾根遺跡と和泉国府についての事例を紹介したものである。

1 日本海と瀬戸内海を結ぶ道

- 弥生時代には日本海と瀬戸内海が東西交通の大動脈として機能し、特に重要な役割を果たしたのが日本海ルートであった。そして、その二つの大動脈を結ぶ南北の道も存在した。私は、兵庫県域における南北の道として、西に「佐用町一千代川の道」（瀬田 2021）、もう一つは、佐原眞が設定した「加古川一由良川の道」（佐原 1970）については、サヌカイトや金属器の出土状況などを踏まえると「加古川・明石川一由良川の道」（瀬田 2022）があったと考えている。ここでは、前者についてはさらに論を深めておきたい(図1)。

(1) 佐用町一千代川の道

- この道は、弥生時代前・中期の鳥取県智頭枕田遺跡出土土器に瀬戸内系が認められることを踏まえ、後期には佐用町の本位田権現谷A遺跡で鉄器製作跡が検出され、近接した下本郷で突線鈕IV式銅鐸が出土していることから鉄器及び鉄素材の流通ルートとして機能し、畿内地域の政治勢力にとって重要な場所であったと考えた。弥生時代中期には鳥取県青谷上寺地遺跡や松原田中遺跡などで、金山産・二上山産サヌカイト（以下、それぞれ「金山産」「二上山産」という。）が確認されており、サヌカイトの道としても機能していた。
- 問題は佐用町から南である。佐用町を流れる佐用川をそのまま南下すると千種川となり瀬戸内海につながる。一方、新宮宮内遺跡などたつの市域で二上山産が出土していることを踏まえると、揖保川へ抜けるルートも考えられる。
- 古代山陰道は最短で利用しやすい地理的環境にはなかった。因幡地域東部には1,000 mを超える山塊が存在していたため、因幡国からの「山越えの道」として、智頭、佐用を経由して揖保川沿いに姫路へと抜ける道が指摘されている（錦織 2013）。こうした道の存在は、それ以前から利用されていたことが考えられよう（図2）。瀬戸内海をモノが行き来する中、西からのモノは千種川、東からのモノは揖保川で北上した可能性が考えられる。
- なお、千代川を使ったルートとしてはこのほかに、吉井川ルート（よしい）の存在も考えられる、瀬戸内系土器や金山産などはこれが機能した可能性についても考慮する必要があるだろう。

(2) 加古川・明石川一由良川の道

- 「加古川一由良川の道」は、その上流が本州の内陸部で標高のいちばん低い中央分水界となっていること、銅剣形磨製石剣が両方の河川付近で出土していることから設定された。その後、銅剣形磨製石剣の出土は加古川流域よりも明石川で認められることから、明石川と加古川をつなぐ草谷川^{くさたに}を經由したルートの存在が指摘されていた（喜谷 1982）。
- 現在、近畿最古の鉄器は弥生時代中期中葉で、明石川流域の神戸市新方遺跡^{しんぽう}（^{ちゆうぞうてつぷ} 鑄造鉄斧）や神戸市玉津田中遺跡^{たまつ たなか}（鑄造鉄斧の柄）にある。中期後葉には、明石川流域の頭高山遺跡^{ず こうざん}など、そして三田盆地^{さんだ}の三田市有鼻遺跡^{ありはな}・奈カリ与遺跡^ななどでまとまった数の鉄器が知られている。現在のところ、鉄器は加古川よりも明石川流域での出土が顕著であり、喜谷が示したルートは鉄器の道としても機能していたと考えられる。つまり、由良川とつながるのは加古川だけでなく明石川もあり、二上山産製打製石器、石材産地が琵琶湖周辺の可能性が高い銅剣形磨製石剣は明石川から遡上したことが考えられる。
- 石川県八日市地方遺跡^{ようかいじかた}では、サヌカイトとして鳥取県の馬山産^{うまやま}及び金山産・二上山産があった（藁科 2014）。筆者の肉眼観察では、剥片などは二上山産より金山産の方が多い。金山産は、徳島県産の結晶片岩製柱状片刃石斧とともに加古川から遡上したか、千種川などそれより西の川を經由し、はるばる小松の地にもたらされたことが想定される。

(3) 弥生時代以降の二つの道

- この二つの道は弥生時代以降、異なる歩みを進めた。古代においては山陰道が開かれたものの、「佐用町一千代川の道」の方が地理的要因などから実態としては機能していたとみられ、その後も近世には鳥取藩の参勤交代の道としても使われ（来見田 2012）（図3）、現在は近くを智頭急行が走っている。一方、「加古川・明石川一由良川の道」は弥生時代以降、一定の役割は果たしたであろうが、積極的に利用された状況はみえなくなっている。
- 「佐用町一千代川の道」は、大和政権成立後、畿内地域と日本海側の因幡さらには伯耆地域を結ぶ実質的な最短ルートであったのに対して、「加古川・明石川一由良川の道」は、大和政権成立後、畿内地域と日本海側を結ぶルートとしては「遠回り」になったことが、違いとして指摘できるのではないだろうか。一事例でしかないが、拠点と拠点とをつなぐ道は、弥生時代と古墳時代以降とで変化がおこったことを予想させる。

2 池上曾根遺跡と和泉国府

- ほかの報告者と同様に、現在、私が関わっている池上曾根遺跡と和泉国府について、簡単に触れておきたい。

(1) 池上曾根遺跡の位置

- 池上曾根遺跡^{まきお}は現在でこそ、海岸線から2 km離れたところに位置しているが、泉南丘陵では最長の槇尾川下流域の右岸扇状地に位置し、その分流のひとつが遺跡の西を通っていたことが復元されている（図4）（日下 1991）。
- また、発掘調査の成果からは、環濠集落の東側でも流路の存在が確認され、そこからは飯蛸壺、真蛸壺がまとめて出土していることから、周辺に船着き場の存在が想定されている（秋山 1999）（図5）。いずれにしても、川をとおして海とつながっていた。

(2) 国府の地理的・地形的位置

- 和泉国はそもそも河内国に属していたが、最終的に天平宝字元年（757）に設置された。

和泉国府は、歴史地理学的には和泉市の府中と呼ばれる場所にあったとされる（藤岡 1969）。ただし、考古学的にはその周辺を発掘調査しても、国府に関連する遺構・遺物等はほとんど知られていないというのが現状である（図 6）。

- 国府の位置について、歴史地理学の立場から藤岡謙二郎は、①大化前代における文化・政治の中心地域、②みのり豊かな生産の場、③海陸両様からする交通の焦点かつ結節点、④内陸部にあっても河川をとおして海上交通に決して不便ではない地理的位置、と整理している（藤岡 1969）。しかも、大きければ方八町という広い空間の確保も必要となる。また、浅香幸雄は各国の国府の位置を分類したところ、(a) 京に近い位置に 67.2%、(b) 国の中央に位置するのが 28.2%と整理した（浅香 1960）。
- 推定される和泉国府は、泉南丘陵では最長の槇尾川まきおの分流近くに所在し、河口は、国府の外港があったことが想定されている。河口までの直線距離は 3 km である。
- 池上曾根遺跡から和泉国府成立までは、①弥生時代後期の池上曾根遺跡の衰退、②古墳時代前期に槇尾川下流域に拠点的な府中・豊中遺跡群とよなかの成立、③考古学的には未検証ではあるが府中・豊中遺跡群のあった場所に和泉国府成立、という流れとなる（図 7）。
- 推定和泉国府は上記の要件からすると①・②・④、(a) の条件を満たしていることになる。

3 拠点をつなぐ道の変化

- 弥生時代、水田稲作は海を介して列島各地に伝播した。弥生時代前期の遺跡は①海に面した潟湖が形成された場所に所在する場合、②内陸に所在するものの、海から川によってつながっていた場合がある。なお、現在は内陸に所在するが、それは後の地形環境の変化によるもので、弥生時代には海に面していた遺跡は少なからずある（図 8）。
- 律令国家成立の際に整備された古代官道は、中央と地方を最短距離で結ぶことが目的で、そこには沿線住民の利用やそれぞれの地域における利便性などは一切考慮されていなかった（近江 2014）。実態を踏まえず、通常、通らないような道が官道として整備されることもあったのである。また、駅路の整備は①緊急の連絡、②国司の下向、③納税などの利用のためだけではなく、④国家の権威を示す役割、外国からやって来た人の国力をはかる目安としての役割、すなわち権威の象徴としての役割もあった（近江 2012）。
- 古墳時代になって大和政権という政治的中心が成立すると、弥生時代に機能した道が「衰退」することもあった。今回は議論の対象ではないが、弥生時代と古墳時代の道の比較が重要で、それと古代官道の関係にも留意していきたい。

【主要参考文献】

- 秋山浩三 1999 「巨大環濠集落における漁業專業度と“船着き場”」『みずほ』28 大和弥生文化の会
- 浅香幸雄 1960 「国府の位置と相模国府の三遷」『歴史地理学紀要』Ⅱ 日本歴史地理学研究会
- 和泉市教育委員会・泉大津教育委員会 2021 『史跡池上曾根遺跡保存活用計画』
- 和泉市史編さん委員会編 2013 『和泉市の考古・古代・中世』
- 近江俊秀 2012 『道が語る日本古代史』朝日新聞出版
- 近江俊秀 2014 『日本の古代道路』角川学芸出版
- 喜谷美宣 1982 「弥生時代の東播磨」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- 来見田博基 2012 『鳥取藩の参勤交代』鳥取県史ブックレット 10 鳥取県
- 日下雅義 1991 「弥生時代の地形環境」『弥生文化 日本文化の源流をさぐる』平凡社
- 錦織勤 2013 『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット 12 鳥取県
- 佐原眞 1970 「大和川と淀川」『古代の日本』5 近畿 角川書店

欄 宜田佳男 2021 「弥生時代の播磨地域の道」『ひょうご歴史研究室紀要』第6号 兵庫県立歴史博物館

欄 宜田佳男 2022 「兵庫県東南部における弥生時代中期サヌカイトの供給状況」『森岡秀人さん古稀記念論集』

森岡秀人さん古稀記念論集刊行会（提出済）

藤岡謙二郎 1969 『国府』 吉川弘文館

藁科哲男 2014 「石針・原石の石材産地同定」『八日市地方遺跡』Ⅱ 小松市教育委員会

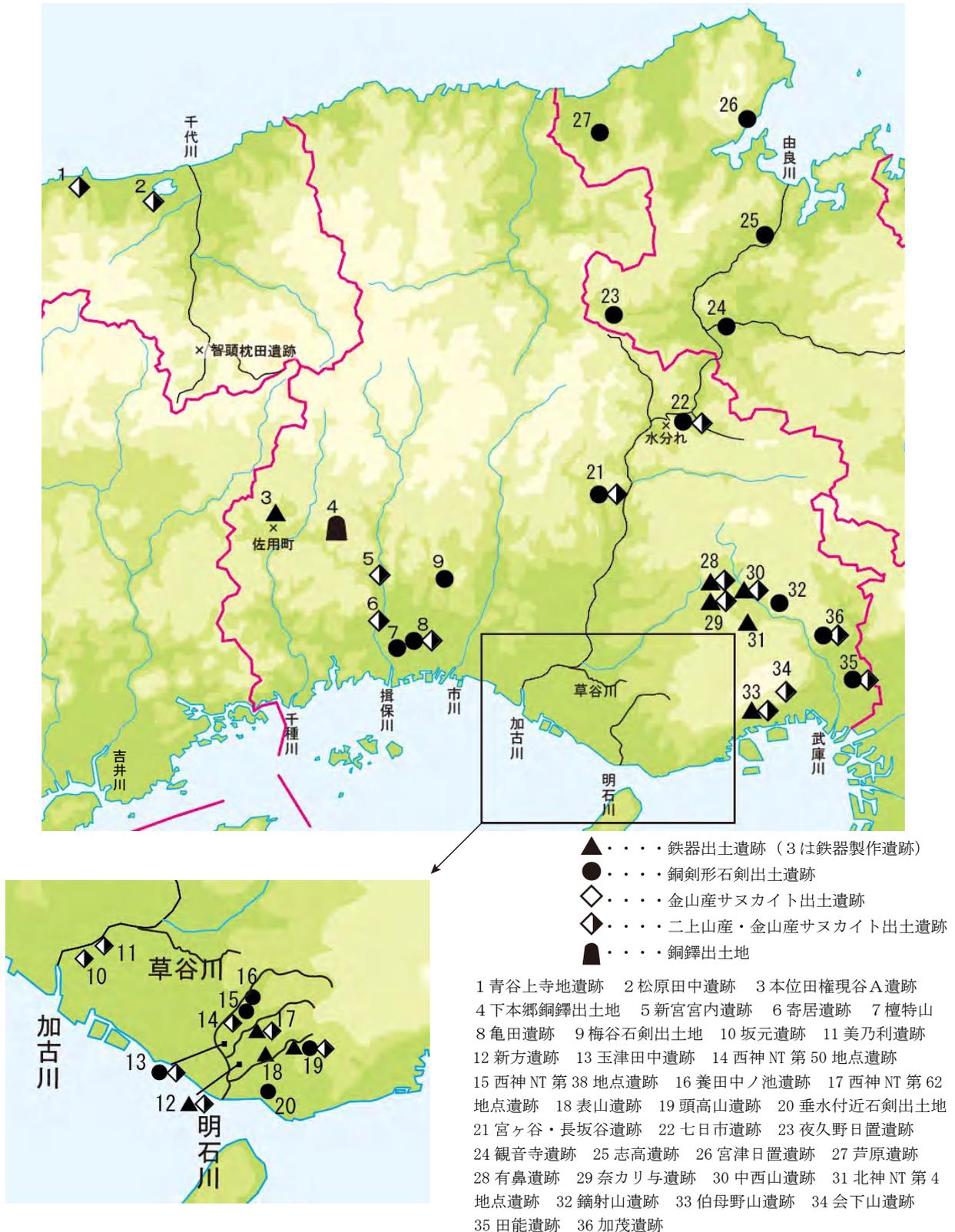


図1 日本海と瀬戸内海を結ぶ2つの道

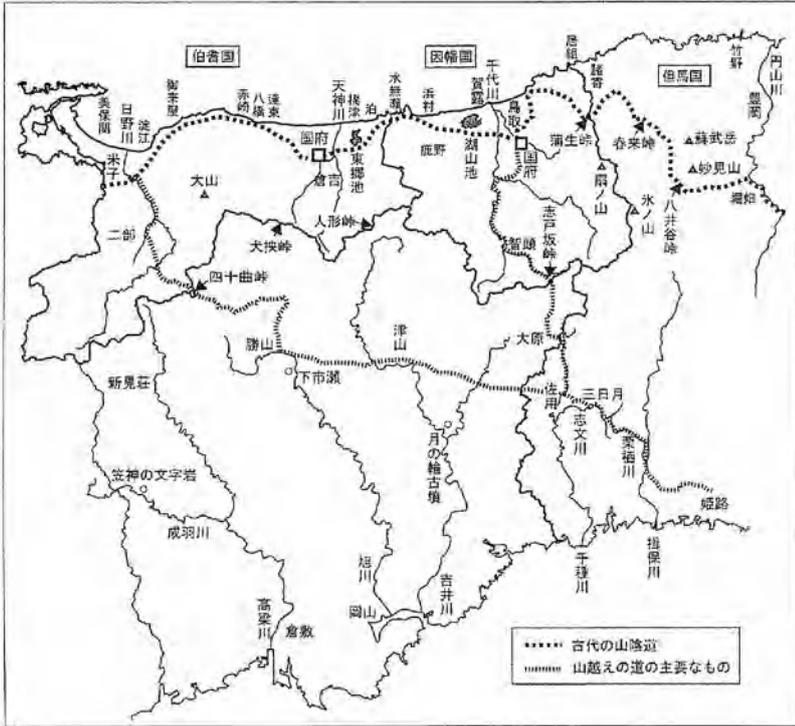
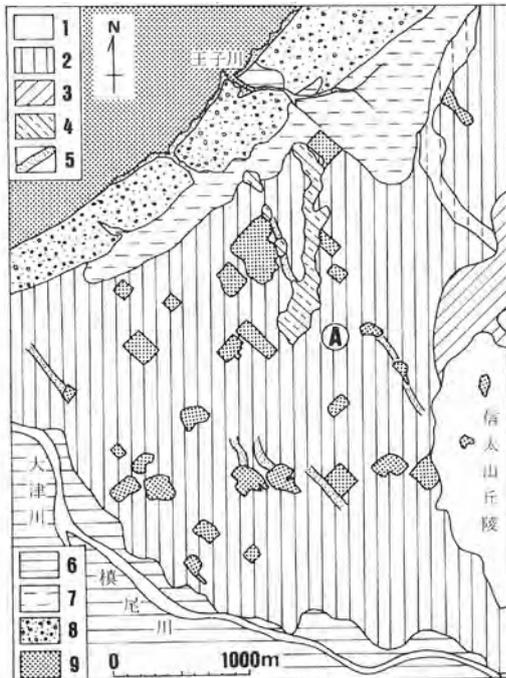


図2 因幡・伯耆交通史関係略図 (錦織 2013)



凡例
○印は宿泊地、△印は休憩地

図3 鳥取藩の参勤交代の道中経路と休泊地 (来見田 2012より)



大阪府池上曽根遺跡付近の地形分類図

- 1 : 丘陵地・台地・中段段丘 2 : 段丘化した扇状地
 - 3 : 扇状地 4 : 自然堤防 5 : 河跡 6 : 氾濫原
 - 7 : 後背低地 8 : 砂礫堆 9 : 溜池・海面
- タテの破線は段丘斜面、(A)は池上曽根遺跡

図4 池上曽根遺跡の位置 (日下 1991)

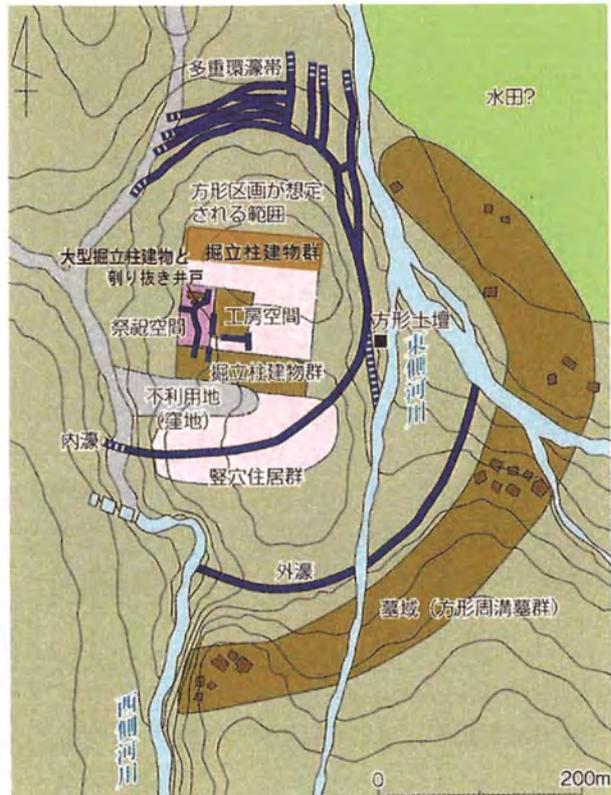


図5 弥生時代中期後半の池上曽根遺跡概念図 (和泉市・泉大津市 2021)



図6 和泉国と国府の位置 (和泉市 2013)

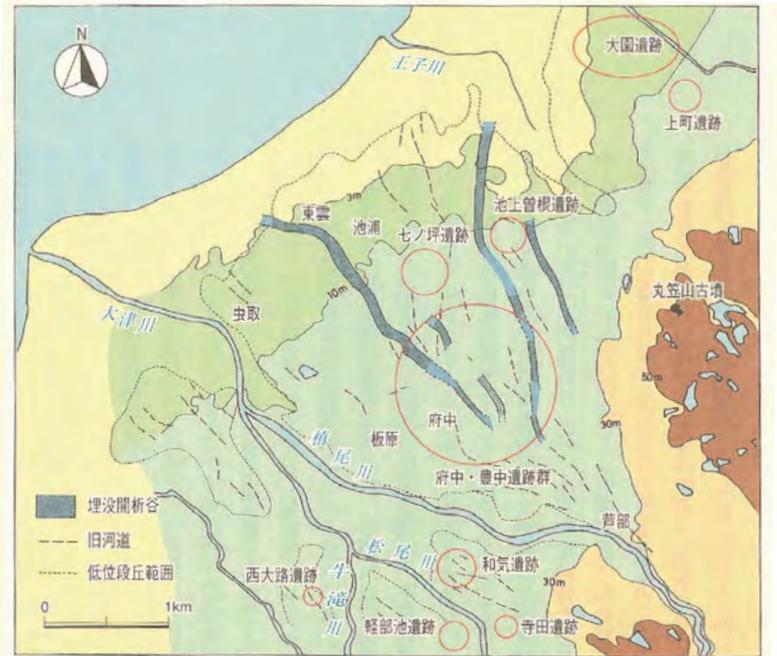


図7 檜尾川周辺の古墳時代集落 (和泉市 2013)

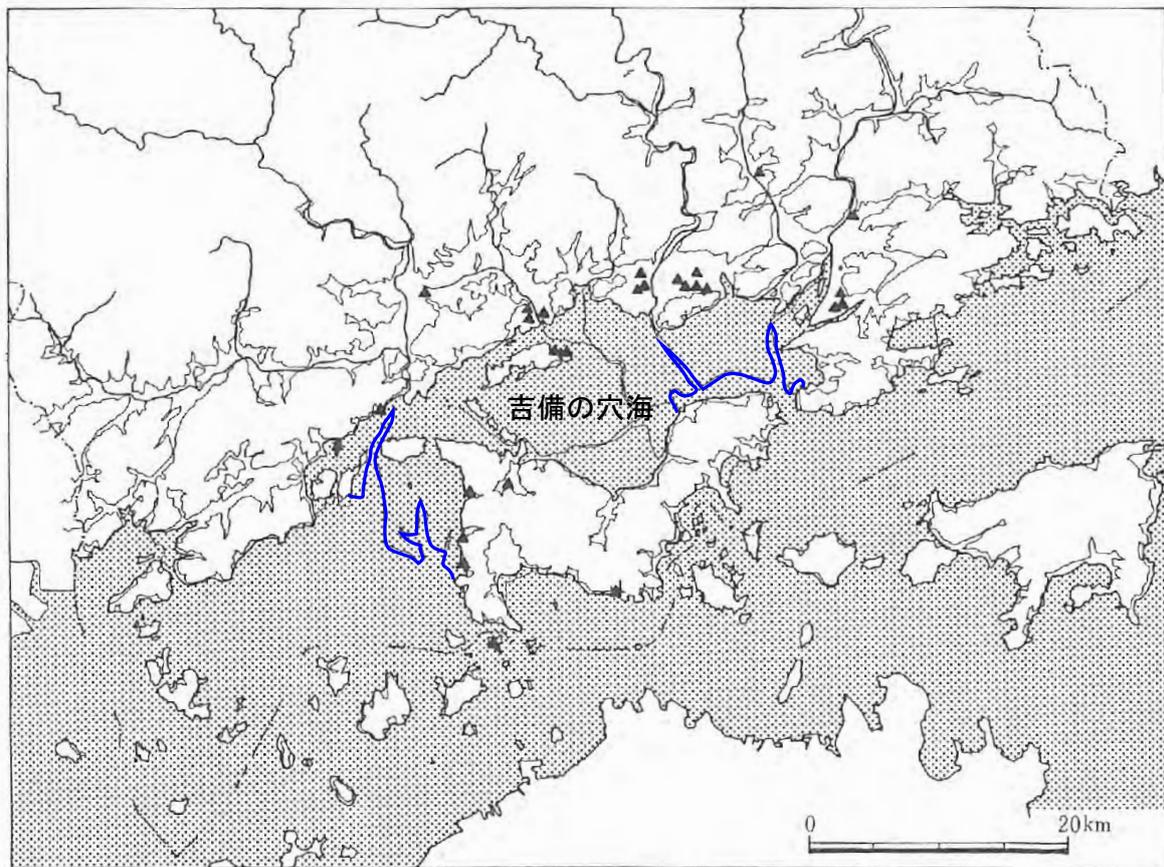
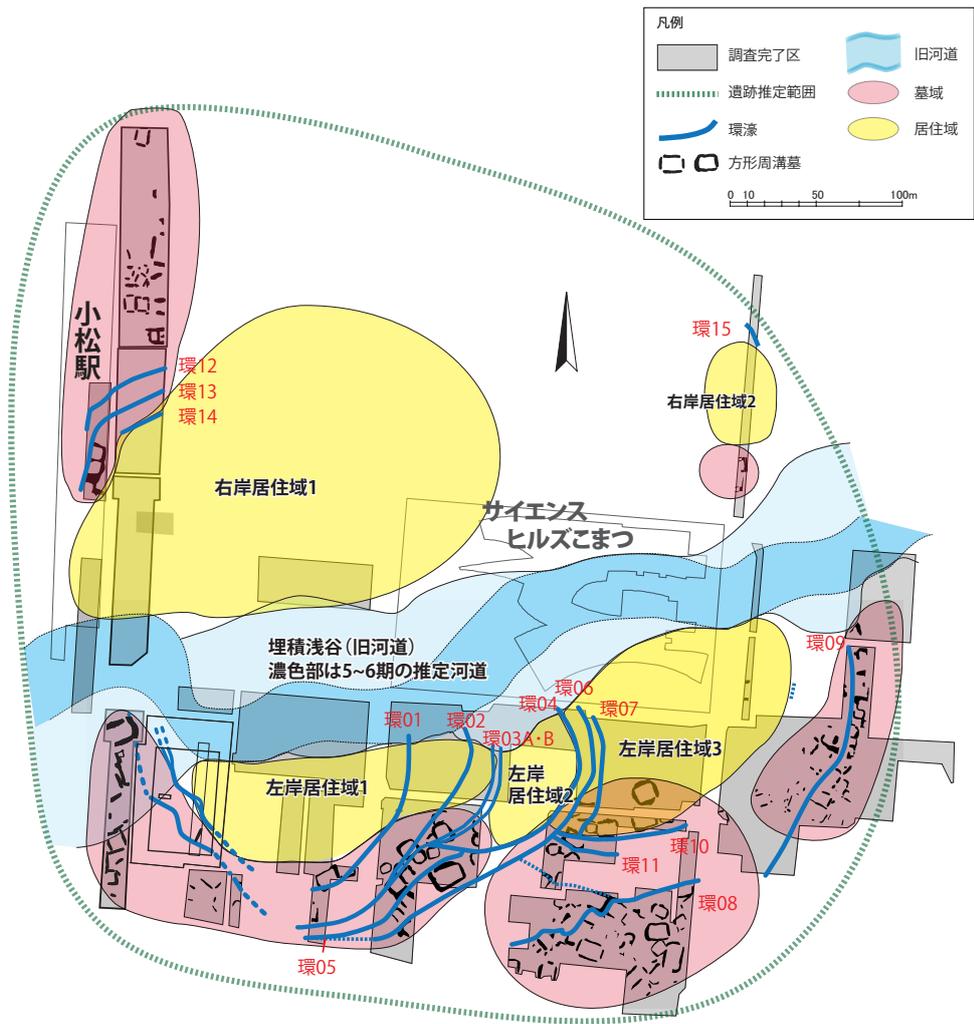


図8 旧海岸推定線と弥生時代前期の遺跡 (藤田憲司作成図に加筆)

八日市地方遺跡のひろがり



河川跡 環濠 居住域 墓域 玉生産集中 木器生産集中



八日市地方遺跡全体図



安宅河口からみた白山



梯川（一針町）からみた白山



* 赤字記載の国は今回の報告箇所になります。

いしかわ百万石文化祭 2023 & 加賀立国 1200 年祭 プレフォーラム

「ヒトとモノ、ワザが動く〜拠点をつなぐ道・国府所在地の源流〜」

発行日 令和 4 年 11 月 16 日

発 行 加賀立国 1200 年祭実行委員会

編 集 加賀立国 1200 年祭実行委員会

問合せ先 〒 923-0075 石川県小松市原町卜 77-8

TEL 0761-47-5713